志木市の文化財　第100集

西原大塚遺跡 第243地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２４

埼玉県志木市教育委員会

1．調査区遠景（南から）

2．調査区全景（上が北西）

1．1011号土坑遺物出土状況（北東から）

2．1036号土坑遺物出土状況（北東から）

はじめに

志木市教育委員会
教育長　柚木　博

ここに刊行する『西原大塚遺跡第243地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』は、教育委員会が令和５年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

西原大塚遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

今回報告する西原大塚遺跡第243地点では、旧石器時代～近世にかけての遺構・遺物が発見されました。特に、縄文時代中期では、２基の土坑から大型の縄文土器が出土しました。また、弥生時代後期～古墳時代前期では、３基の方形周溝墓が検出され、当時の集落像を検討する上での貴重な成果となりました。

このように、今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者、そして深い御理解と御協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

例　　言

1．本書は、令和５年度に発掘作業を実施した、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡第243地点の発掘調査報告書である。

2．本調査は、共同住宅建設に伴う記録保存のための発掘調査として、文化財保護法第99条に基づき、志木市教育委員会が調査主体者として実施したものである。

3．本調査の実施にあたり、土木工事主体者（個人）・志木市教育委員会・株式会社中野技術（代表取締役 菅原広志）の三者による協定を締結した上で、株式会社中野技術が発掘調査支援業務を行った。

4．発掘作業は、令和５年５月30日から令和５年８月２日まで行い、整理作業・報告書刊行作業を令和６年８月30日まで行った。

5．本書は、大久保　聡・尾形則敏・木村結香が監修し、編集は越村　篤が行った。執筆は第１章を尾形、第２章第１節を木村、第２章第２節～第３章の遺構、第５章第１節（１）・（２）、第２節を越村、第３章の遺物、第５章第１節（３）を小林陽子、第５章第63図の集成を大原美紀、第４章第１節を黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）、第４章第２節を伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・黒沼保子（株式会社パレオ・ラボＡＭＳ年代測定グループ）、第４章第３節を竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

6．本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターで一括して保管している。

7．調査組織は以下の通りである。

【志木市教育委員会組織】（令和５・６年度）

調査主体者	志木市教育委員会
教育長	柚木　博
教育政策部長	今野美香
生涯学習課長	土崎健太
生涯学習課副課長	吉成和重
生涯学習課主幹	徳留彰紀（令和６年度～）
生涯学習課主査	徳留彰紀（～令和５年度）
〃	大久保　聡
生涯学習課主任	尾形則敏
〃	石川千尋
〃	塚原会理（～令和５年６月）
生涯学習課主事	木村結香
〃	石井達基（令和６年８月～）
生涯学習課主事補	大澤優奈（令和５年８月～）
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）（～令和５年度）
〃	深瀬　克（会長）（令和６年度～）
〃	深瀬　克（委員）（～令和５年度）

志木市文化財保護審議会　上野守嘉（委員）
〃　新田泰男（委員）
〃　大木雄平（委員）
〃　眞保昌弘（委員）（令和6年度～）
調査担当者　徳留彰紀・大久保　聡・尾形則敏・木村結香

【株式会社中野技術】

○発掘作業

調査員　越村　篤
現場代理人　久津輪弘樹
調査補助員　高橋遥香
作業員　青木利恵・稲田厚子・井原弥生・植村智美・臼井　孝・辛島美樹雄・川口砂織・神田康一・木村圭介・小林由典・嶋田和美・下岡孝明・千葉真人・手塚哲也・藤江保明・藤澤朋広・松尾貴弘・宮澤洋美・渡部正雄

○整理作業

調査員　越村　篤・小林陽子
調査補助員　佐貫　健・高橋遥香
作業員　青木利恵・明石千とせ・石川まゆみ・井上麻美子・井原弥生・大原美紀・北根麻由・坂井美樹子・榊原みゆき・櫻井亜矢子・徳光直子・山本圭子

8．発掘作業及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局教育総務部文化財・博物館課　（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　朝霞市教育委員会
朝霞市博物館　新座市教育委員会　和光市教育委員会　富士見市教育委員会
富士見市立水子貝塚資料館

9．本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
令和5年5月29日付け　教文資第4－325号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）
令和5年11月30日付け　教文資第7－79号

凡　　例

1．本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第１図　　１：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第２図　　１：5,000 ゼンリン電子住宅地図　デジタウン「埼玉県志木市」平成27年４月発行
株式会社ゼンリン

2．本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系（2011）に則している。

3．挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

4．遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。

5．ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

6．遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

7．挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。

8．土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は［　］、推定値は（　）を付した。

口：口径　　高：器高　　底：底径　　厚：器厚

9．遺構の略記号は、以下のとおりである。

Ｙ＝弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡　　方＝方形周溝墓　　Ｄ＝土坑　　Ｐ＝ピット

Ｍ＝溝跡

目　　次

巻頭図版／はじめに
例　　言／凡　　例／目　　次／挿図目次／表　目　次／図版目次
第1章　遺跡の立地と環境……1
　第1節　市域の地形と遺跡……1
　第2節　遺跡の概要……8
第2章　発掘調査の概要……10
　第1節　調査に至る経緯……10
　第2節　調査の経過……11
　第3節　基本層序……14
第3章　検出された遺構・遺物……16
　第1節　縄文時代の遺構・遺物……16
　第2節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物……47
　第3節　中世以降の遺構……63
　第4節　遺構外出土遺物……68
第4章　自然科学分析……75
　第1節　炭化材の樹種同定……75
　第2節　放射性炭素年代測定……78
　第3節　遺構採取土のリン・カルシウム分析……81
第5章　調査のまとめ……84
　第1節　縄文時代中期……84
　第2節　弥生時代後期～古墳時代前期……87
図　　版
報告書抄録

挿図目次

第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20,000）…… 2
第２図　西原大塚遺跡の調査地点（1／5,000）…… 9
第３図　確認調査時の遺構分布図（1／250）…… 10
第４図　遺構分布図（1／200）…… 13
第５図　基本層序（1／400・1／60）…… 15
第６図　縄文時代の土坑1（1／60）…… 16
第７図　1001号土坑出土遺物（1／3）…… 17
第８図　縄文時代の土坑2（1／60）…… 18
第９図　1005号土坑出土遺物（1／4）…… 19
第10図　1006号土坑出土遺物（1／3）…… 19
第11図　縄文時代の土坑3（1／60）…… 20
第12図　1008号土坑出土遺物（1／3）…… 21
第13図　1010号土坑出土遺物（1／3）…… 22
第14図　縄文時代の土坑4（1／30）…… 23
第15図　1011号土坑出土遺物（1／8・1／4）…… 24
第16図　1012号土坑出土遺物（1／3）…… 26
第17図　縄文時代の土坑5（1／60）…… 27
第18図　1016号土坑出土遺物（1／3・2／3）…… 28
第19図　1017号土坑出土遺物（1／3）…… 29
第20図　縄文時代の土坑6（1／60）…… 30
第21図　1020号土坑出土遺物（1／3）…… 31
第22図　1021号土坑出土遺物（1／3）…… 32
第23図　縄文時代の土坑7（1／60）…… 32
第24図　1022号土坑出土遺物（1／3）…… 33
第25図　1023号土坑出土遺物（1／3）…… 34
第26図　縄文時代の土坑8（1／60）…… 35
第27図　1024号土坑出土遺物（1／3）…… 35
第28図　1027号土坑出土遺物（1／3）…… 36
第29図　縄文時代の土坑9（1／60）…… 37
第30図　1029号土坑出土遺物（1／3）…… 38
第31図　縄文時代の土坑10（1／60）…… 38
第32図　1031号土坑出土遺物（1／3）…… 39
第33図　1034号土坑出土遺物（1／3）…… 41
第34図　縄文時代の土坑11（1／30）…… 42
第35図　1036号土坑出土遺物（1／4・1／3）…… 43

第36図　縄文時代の土坑12（1／60）…… 45
第37図　縄文時代のピット（1／60）…… 47
第38図　671号住居跡1（1／60）…… 49
第39図　671号住居跡2（1／60・1／30）…… 50
第40図　671号住居跡遺物出土状態（1／60）…… 51
第41図　671号住居跡出土遺物（1／4・1／3）…… 51
第42図　25号方形周溝墓出土遺物（1／3）…… 52
第43図　25号方形周溝墓（1／60）……53・54
第44図　区画整理第70地点25号方形周溝墓出土遺物（1／4・1／2）…… 55
第45図　37号方形周溝墓出土遺物（1／4・1／3）…… 56
第46図　37号方形周溝墓1（1／60）……57・58
第47図　37号方形周溝墓2（1／60）…… 59
第48図　38号方形周溝墓（1／60）……60・61
第49図　38号方形周溝墓出土遺物（1／3）…… 63
第50図　1004号土坑（1／60）…… 63
第51図　59号溝跡（1／60）…… 64
第52図　中世以降のピット1（1／60）…… 65
第53図　中世以降のピット2（1／60）…… 66
第54図　中世以降のピット3（1／60）…… 67
第55図　遺構外出土遺物1（1／3・2／3）…… 68
第56図　遺構外出土遺物2（1／3）…… 69
第57図　遺構外出土遺物3（1／3）…… 70
第58図　遺構外出土遺物4（1／3）…… 71
第59図　遺構外出土遺物5（1／4・1／3）…… 72
第60図　671号住居の炭化材分布図（1／40）…… 76
第61図　暦年較正結果…… 80
第62図　西原大塚遺跡における縄文時代中期住居跡の分布状況（1／5,000）…… 85
第63図　西原大塚遺跡における弥生時代後期～古墳時代前期の遺構分布（1／5,000）…… 91

表目次

第1表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧…… 1
第2表　発掘調査工程表…… 12
第3表　1001号土坑出土土器一覧 …… 17

第 4 表　1005号土坑出土土器一覧 …… 19
第 5 表　1006号土坑出土土器一覧 …… 19
第 6 表　1008号土坑出土土器一覧 …… 21
第 7 表　1010号土坑出土土器一覧 …… 22
第 8 表　1011号土坑出土土器一覧 …… 25
第 9 表　1012号土坑出土土器一覧 …… 26
第10表　1016号土坑出土土器一覧 …… 28
第11表　1016号土坑出土石器一覧 …… 28
第12表　1017号土坑出土土器一覧 …… 29
第13表　1020号土坑出土土器一覧 …… 31
第14表　1021号土坑出土土器一覧 …… 32
第15表　1022号土坑出土土器一覧 …… 33
第16表　1023号土坑出土土器一覧 …… 34
第17表　1024号土坑出土土器一覧 …… 35
第18表　1027号土坑出土土器一覧 …… 37
第19表　1029号土坑出土土製品一覧 …… 38
第20表　1031号土坑出土土器一覧 …… 39
第21表　1034号土坑出土土器一覧 …… 41
第22表　1036号土坑出土土器一覧 …… 43
第23表　1036号土坑出土石器一覧 …… 43
第24表　縄文時代の土坑一覧 …… 46
第25表　671号住居跡出土土器一覧 …… 51
第26表　25号方形周溝墓出土土器一覧 …… 52
第27表　37号方形周溝墓出土土器一覧 …… 56
第28表　38号方形周溝墓出土土器一覧 …… 63
第29表　中世以降のピット一覧 …… 67
第30表　遺構外出土石器一覧 …… 72
第31表　遺構外出土縄文土器一覧（1） …… 73
第31表　遺構外出土縄文土器一覧（2） …… 74
第32表　遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期土器一覧 …… 74
第33表　遺構外出土陶器一覧 …… 74
第34表　遺構外出土土製品一覧 …… 74
第35表　樹種同定結果 …… 75
第36表　樹種同定結果一覧 …… 77
第37表　測定試料および処理 …… 78
第38表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 79
第39表　分析対象試料 …… 81
第40表　半定量分析結果（mass%） …… 82

図版目次

巻頭図版１
１．調査区遠景（南から）
２．調査区全景（上が北西）
巻頭図版２
１．1011号土坑遺物出土状況（北東から）
２．1036号土坑遺物出土状況（北東から）
図版１
１．調査前現況（南から）
２．表土剥ぎ（北東から）
３．旧石器試掘坑ＴＰ１西壁（東から）
４．旧石器試掘坑ＴＰ２西壁（東から）
５．旧石器試掘坑ＴＰ３西壁（東から）
６．旧石器試掘坑ＴＰ４西壁（東から）
７．旧石器試掘坑ＴＰ５西壁（東から）
８．旧石器試掘坑ＴＰ６西壁（東から）
図版２
１．1001号土坑完掘（北西から）
２．1001号土坑遺物出土状況（北西から）
３．1002号土坑完掘（北から）
４．1003号土坑完掘（北西から）
５．1005号土坑遺物出土状況（南から）
６．1005号土坑完掘（南から）
７．1006号土坑完掘（南西から）
８．1007号土坑完掘（西から）
図版３
１．1008号土坑完掘（北西から）
２．1008号土坑遺物出土状況（北から）
３．1009号土坑完掘（北東から）
４．1010号土坑完掘（北東から）
５．1011・1012号土坑土層断面（北から）
６．1011号土坑遺物出土状況（南西から）
７．1011号土坑土器内土層断面（北から）
８．1011号土坑遺物出土状況（東から）
図版４
１．1011号土坑完掘（南から）
２．1011号土坑調査風景
３．1012号土坑完掘（西から）
４．1013号土坑土層断面（南西から）
５．1014号土坑完掘（北から）
６．1015号土坑完掘（北東から）
７．1016号土坑完掘（南東から）
８．1017号土坑完掘（北から）
図版５
１．1017号土坑遺物出土状況（北東から）
２．1018号土坑土層断面（北西から）
３．1019号土坑完掘（南から）
４．1019号土坑土層断面図（北西から）
５．1020号土坑完掘（西から）
６．1021号土坑完掘（北から）
７．1022・1023号土坑完掘（南東から）
８．1023号土坑遺物出土状況（南東から）
図版６
１．1024号土坑完掘（北東から）
２．1025・1026号土坑完掘（北東から）
３．1028号土坑完掘（南東から）
４．1029号土坑完掘（東から）
５．1030号土坑完掘（西から）
６．1031号土坑完掘（北西から）
７．1031号土坑遺物出土状況（東から）
８．1032・1033号土坑完掘（南西から）
図版７
１．1034号土坑完掘（南西から）
２．1034号土坑遺物出土状況（北東から）
３．1035号土坑完掘（南西から）
４．1036号土坑土層断面（北東から）
５．1036号土坑遺物出土状況（南東から）
６．1036号土坑遺物出土状況（東から）
７．1036号土坑土器内土層断面（北東から）
８．1036号土坑調査風景

図版８
１．1036号土坑完掘（東から）
２．1037号土坑完掘（北西から）
３．1038号土坑完掘（南西から）
４．1039号土坑完掘（南から）
５．1040号土坑完掘（北東から）
６．1041号土坑完掘（南から）
７．33号ピット完掘（南西から）
８．34～36号ピット完掘（南東から）
図版９
１．671号住居跡全景（南東から）
２．671号住居跡全景（南西から）
３．671号住居跡炉（北東から）
４．671号住居跡掘り方（南西から）
５．671号住居跡土層断面（北西から）
６．671号住居跡Ｐ１柱痕跡完掘（北西から）
７．671号住居跡Ｐ１柱痕跡土層断面（北西から）
８．671号住居跡Ｐ１掘り方（東から）
図版10
１．671号住居跡Ｐ１掘り方土層断面（北西から）
２．671号住居跡Ｐ２柱痕跡完掘（北西から）
３．671号住居跡Ｐ２柱痕跡土層断面（北西から）
４．671号住居跡Ｐ２掘り方（南から）
５．671号住居跡Ｐ２掘り方土層断面（北西から）
６．671号住居跡Ｐ３完掘（南から）
７．671号住居跡Ｐ４完掘（北西から）
８．671号住居跡焼土・炭化材検出状況（北西から）
図版11
１．25号方形周溝墓完掘（北西から）
２．25号方形周溝墓北西溝（北東から）
３．25号方形周溝墓土層断面Ｓ北（北東から）
４．25号方形周溝墓土層断面Ｐ（北東から）
５．25号方形周溝墓土層断面Ｏ（南東から）
６．25号方形周溝墓遺物出土状況（北西から）
７．37号方形周溝墓調査風景
図版12
１．37号方形周溝墓全景（上が北西）
２．37号方形周溝墓全景（北西から）
３．37号方形周溝墓全景（北東から）
４．37号方形周溝墓全景（南東から）
５．37号方形周溝墓全景（南西から）
図版13
１．37号方形周溝墓北西溝（北東から）
２．37号方形周溝墓北東溝（南東から）
３．37号方形周溝墓南東溝（南西から）
４．37号方形周溝墓南西溝（南東から）
５．37号方形周溝墓土層断面Ｂ北（北東から）
６．37号方形周溝墓土層断面Ｄ（東から）
７．37号方形周溝墓土層断面Ａ北（南東から）
８．37号方形周溝墓土層断面Ｅ（北から）
図版14
１．37号方形周溝墓土層断面Ｂ南（東から）
２．37号方形周溝墓土層断面Ｃ（南西から）
３．37号方形周溝墓土層断面Ｆ（南東から）
４．37号方形周溝墓土層断面Ａ南（南東から）
５．37号方形周溝墓土層断面Ｇ（北から）
６．37号方形周溝墓遺物出土状況（北東から）
７．37号方形周溝墓遺物出土状況（北西から）
８．37号方形周溝墓遺物出土状況（北東から）
図版15
１．38号方形周溝墓全景（上が北西）
２．38号方形周溝墓全景（北西から）
３．38号方形周溝墓全景（北東から）
４．38号方形周溝墓全景（南から）
５．38号方形周溝墓土層断面Ａ北（北東から）
図版16
１．38号方形周溝墓土層断面Ｂ（南西から）
２．38号方形周溝墓土層断面Ｃ（南西から）
３．38号方形周溝墓土層断面Ａ南（北東から）
４．38号方形周溝墓土層断面Ｄ（北東から）
５．1004号土坑完掘（南東から）
６．１号ピット完掘（南東から）
７．２号ピット完掘（北から）
８．３・４号ピット完掘（南西から）

図版17
1．5・6・12～14号ピット完掘（北から）
2．7号ピット完掘（南東から）
3．8号ピット完掘（南東から）
4．9号ピット完掘（南東から）
5．10号ピット完掘（南東から）
6．11号ピット完掘（南東から）
7．15号ピット完掘（南から）
8．16～20号ピット完掘（北から）
図版18
1．21・22号ピット完掘（北東から）
2．23・24・26・27号ピット完掘（北西から）
3．25号ピット完掘（南西から）
4．28号ピット完掘（南東から）
5．29号ピット完掘（北西から）
6．30号ピット土層断面（北から）
7．31号ピット土層断面（北から）
8．32号ピット完掘（北西から）
図版19
1．1001号土坑出土遺物
2．1005号土坑出土遺物
3．1006号土坑出土遺物
4．1008号土坑出土遺物
図版20
1．1010号土坑出土遺物
2．1011号土坑出土遺物
図版21
1．1012号土坑出土遺物
2．1016号土坑出土遺物
3．1017号土坑出土遺物
4．1020号土坑出土遺物
5．1021号土坑出土遺物
図版22
1．1022号土坑出土遺物
2．1023号土坑出土遺物
3．1024号土坑出土遺物
4．1027号土坑出土遺物
5．1029号土坑出土遺物
6．1031号土坑出土遺物
図版23
1．1034号土坑出土遺物
2．1036号土坑出土遺物
図版24
1．671号住居跡出土遺物
2．25号方形周溝墓出土遺物
3．37号方形周溝墓出土遺物
4．38号方形周溝墓出土遺物
図版25
遺構外出土遺物1
図版26
遺構外出土遺物2
図版27
炭化材の走査型電子顕微鏡写真
図版28
プレス試料およびリン(P)とカルシウム(Ca)の元素マッピング図

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　市域の地形と遺跡

（１）地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71㎞、東西4.73㎞の広がりをもち、面積は9.05㎢、人口約７万６千人の自然と文化の調和する都市である。

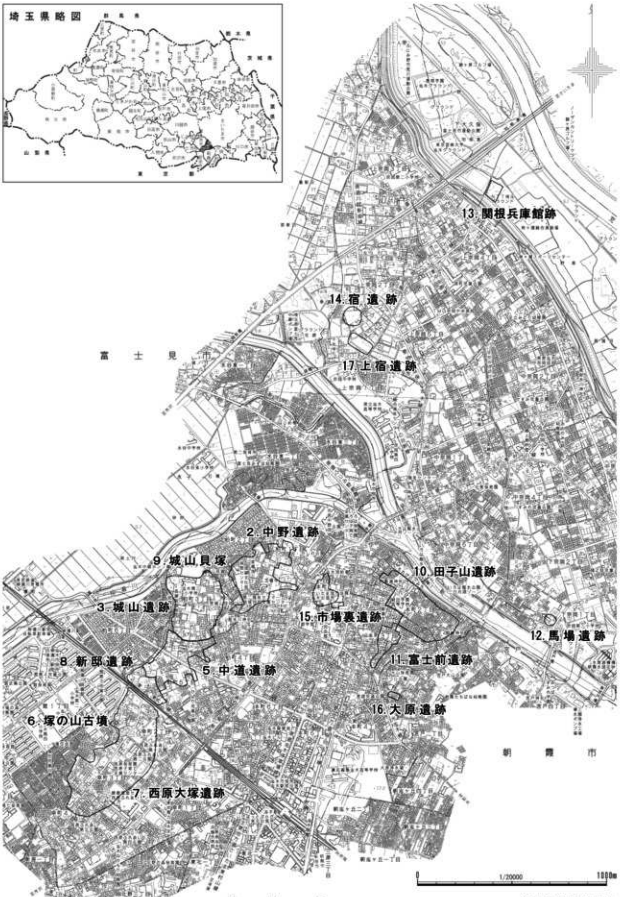
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（７）、新邸遺跡（８）、中道遺跡（５）、城山遺跡（３）、中野遺跡（２）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	71,220 ㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,520 ㎡	畑・宅地	貝塚・城館跡・集落跡・墓跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（中・後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	55,600 ㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 ㎡	林	古墳？	古墳？	古墳？	なし
7	西原大塚	164,960 ㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前・後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	18,900 ㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前・後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 ㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030 ㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830 ㎡	宅地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑？、溝跡？	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 ㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 ㎡	グランド	館跡	中世	不明	なし
14	宮	7,700 ㎡	水田	館跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	15,120 ㎡	宅地	集落跡・墓跡	縄文、弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700 ㎡	宅地	集落跡	近世以降？	溝跡	なし
17	上宮	8,600 ㎡	水田・宅地	集落跡・墓跡	平安、中・近世	住居跡、土坑、溝跡、井戸跡	土師器、須恵器、陶磁器、板碑等
合計		524,580 ㎡					

令和６年６月30日 現在

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



令和６年６月30日現在

第１図　市域の地形と遺跡分布（１／20,000）

付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（６）、城山貝塚（９）を加えた15遺跡である（第１図・第１表）。

（２）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層の第Ⅳ層上部・第Ⅵ層・第Ⅶ層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成６（1994）年度には２か所、平成７（1995）年度には１か所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。令和元（2019）年には第224地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成28（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91㊐地点からは、礫群１基が検出された。令和元～２（2019～2020）年にかけて発掘調査された中野遺跡第109地点では、立川ローム層第Ⅳ層下部～第Ⅴ層を中心とする石器集中地点が検出されており、石核調整剥片の良好な接合資料が出土している。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の２か所で石器集中地点が検出されている。平成20・21（2008・2009）年に調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも１か所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部で石器集中地点２か所、礫群９基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅵ層・第Ⅶ層で石器集中地点や礫群が検出されている。

２．縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成４（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器１点、平成６（1994）年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器３点、第22地点から爪形文系土器１点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器１点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡としては、令和４（2022）年に田子山遺跡第172地点で市内初となる撚糸文期の住居跡が１軒検出された。また、平成18（2006）年に発掘調査が実施さ

れた中道遺跡第65地点では、早期末葉（条痕文系）の10号住居跡が検出されている。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。令和元（2019）年度に発掘調査が実施された城山遺跡第96地点、令和３～４（2021～2022）年に実施された中野遺跡第116①地点では、前期後葉の諸磯ａ式期の住居跡が検出されている。そのうち、城山遺跡第96地点では貝層を持つ住居跡が３軒検出された。住居内貝層からヤマトシジミ・マガキが検出されている。平成２年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に分布していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡１軒が確認されているが、平成28（2016）年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曽利ＥⅣ式の両耳壺を出土する住居跡１軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡２軒と加曽利Ｂ式期の住居跡１軒、遺物集中地点１か所、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）１軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑１基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。その他、平成26（2014）年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的まとまって出土している。最新資料として、平成30（2018）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第216地点で、堀之内１式期の住居跡が１軒検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行３ｃ式・千網式の土器片が少量発見されている。また、令和３（2021）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第234地点で、遺構外出土ではあるが、縄文時代晩期～弥生時代初頭に位置づけられる土器片が１点発見されている。以降、市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

３．弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元（2019）年に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡１軒、方形周溝墓１基が検出された。住居跡からは壺、甕、高坏、抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。なお、これらの資料のうち、土器、石器、土製品計44点の城山遺跡10号住居跡出土遺物は、考古資料として、市指定文化財（令和３年７月１日付け）に指定されている。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原

式土器を出土する住居跡が発見されている。平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が670軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅鈴が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の３遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第８地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ１基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20ｍを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の３要素の特徴を示す壺形土器が出土している。なお、鳥形土製品１点と壺形土器４点の計５点は、考古資料として、市指定文化財（平成25年３月１日付け）に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

４．古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第２地点の１号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第８地点の２～８号住居跡は、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成７（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、５世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

５世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に６世紀後葉から７世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い５世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、６世紀後葉以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第８地点で初めて古墳時代後期（７世紀中葉）の住居跡が１軒検出されている。この住居跡は、３×3.5ｍの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、５世紀後葉から７世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で270軒、次いで中野遺跡で67軒、中道遺跡で20軒、田子山遺跡で18軒、新邸遺跡で１軒を数える。

また住居跡以外では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、６世紀後葉以降のものと考えられる4.1×4.7ｍの不整円形で２か所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33ｍの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

５．奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山・富士前遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成８（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」１文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片１点、布目瓦の小破片２点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶（ふじゅしんぽう）が２枚とその近くからは鉄鎌１点と土錘１点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成６（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

最新では、令和元（2019）年と令和３（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、平安時代の住居跡・土壙・溝跡などが検出され、宗岡地区における自然堤防上に立地する遺跡の存在が明らかになりつつある。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか９点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか２点の遺物は、考古資料として、市指定文化財（平成25年３月１日付け）に指定されている。

６．中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』（註１）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記』（註２）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山　1978・2002）。

また、平成７（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土し

ており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成８（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鋳造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鋳造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鋳型、鍋の耳部分の小型鋳型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成６（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鐙（よろい）の札（さね）である鉄製品１点と鉄鏃１点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たに土坑45基・井戸跡２基・溝跡１本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「Ｔ字形」の火葬土坑５基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第２地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成７（1995）年の第37地点からは、人骨と古銭５枚を出土した土坑墓１基と13世紀に比定される青磁盤１点を出土した道路状遺構１条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第１地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の第８地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓２基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院（しょうりんざんかんのんじ だいじゅいん）」関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

最新資料としては、令和２・３年度に発掘調査を実施した西原大塚遺跡第234地点の地下式坑（912号土坑）から、人骨（女性２体）と完形品の擂鉢が共伴する良好な資料が発見された。人骨は「通常とは異なる状況」で埋葬されたと考えられ（田中　2022）、擂鉢は古瀬戸後期Ⅳ古～新段階（藤澤　2008）に比定されることから、時期は中世（15世紀中葉～後葉）のものと考えられる。

また、令和元（2019）年と令和３（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、中・近世の土壙・井戸跡・溝跡などの多くの遺構が検出され、中世における『宗岡宿』の様相や近世における千光寺に関連する墓域群などを知ることができる貴重な成果につながった。

７．近代以降

近代以降の遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治２～５年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

［註］

註１　『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒（なかつね）が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註２　『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18（1486）年６月から10か月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

［引用文献］

神山健吉　1978「「廻回雑記」に現れる　大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第７号　志木市郷土史研究会
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号　志木市郷土史研究会
田中　信　2022「第４章　調査のまとめ　第３節中世以降について」『西原大塚遺跡第234地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第86集　埼玉県志木市教育委員会
藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

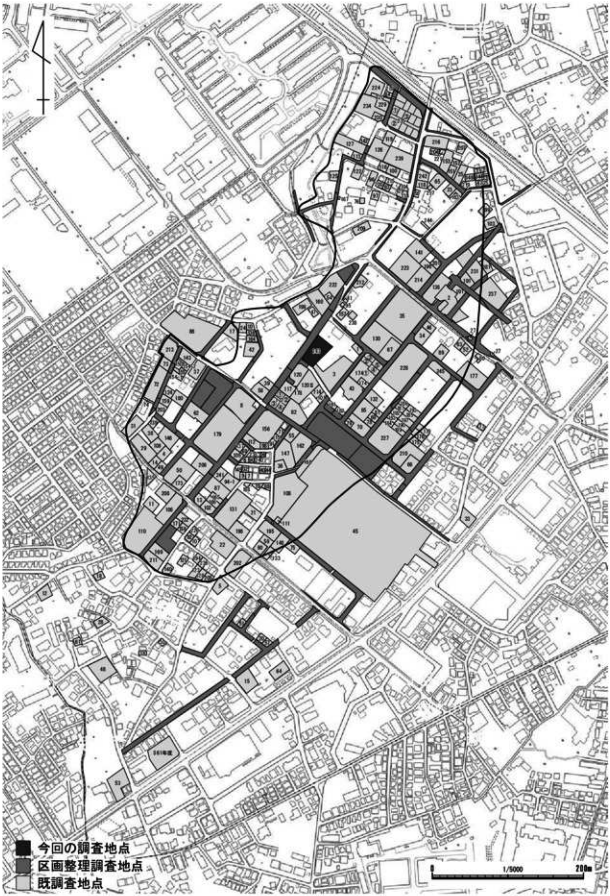
第２節　遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町２～４丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約１㎞に位置している。遺跡の規模は、北東―南西方向に長さ約700ｍ、北西―南東方向に幅約150ｍ、面積164,960㎡に及ぶ。地勢的には、柳瀬川を北西に望む標高約10～18ｍの武蔵野台地北東端周縁部に位置しており、概ね緩やかな傾斜で台地から低地に移行している。

本遺跡では、昭和48（1973）年の調査を嚆矢として、これまでに245回（令和６年６月現在）に亘る調査が実施されてきた。また、平成元～19（1989～2007）年には、西原特定土地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地や保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施され、近年では区画整理事業の完了を受けて、共同住宅や分譲住宅、個人住宅の建設に伴う発掘調査が実施されている。

西原大塚遺跡は、前節の通り、旧石器時代から近世までの複合遺跡である。特に縄文時代中期では200軒以上の住居跡が大規模な環状に分布していることが判明している。また、弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡670軒以上、方形周溝墓38基、掘立柱建築遺構５棟、遺跡の北部では環壕が確認されており、市内最大の集落跡とされる。中世では、第234地点の地下式坑で15世紀の擂鉢を伴う２体の人骨が検出されている。

本書で報告する第243地点は、遺跡中央部のやや台地縁辺寄りに位置し、調査対象面積は601.97㎡、現地標高は約16.5ｍである。新たに確認された主要な遺構は、縄文時代の土坑40基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡１軒・方形周溝墓３基、近世以降の溝跡１本である。方形周溝墓のうち１基は隣接する既往調査地点で確認されていたものである。



令和６年６月30日現在

第２図　西原大塚遺跡の調査地点（１／5,000）

第２章　発掘調査の概要

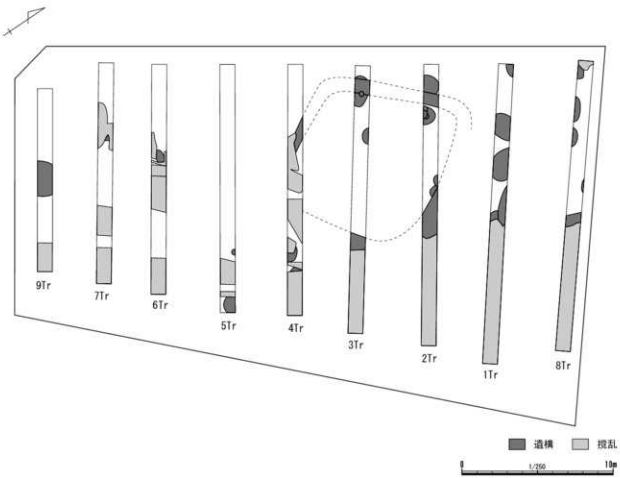
第１節　調査に至る経緯

本地点は、令和５年１月、工事施工責任者である積水ハウス株式会社（以下、施工責任者）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町３丁目7271番の一部（面積816.97㎡）に重量鉄骨造３階建共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228－09－007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1．埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

2．上記１の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。



第３図　確認調査時の遺構分布図（１／250）

令和５年２月15日、教育委員会は土木工事主体者である個人（以下、工事主体者）より確認調査依頼書を受理し、西原大塚遺跡第243地点として、４月10～13日に確認調査を実施した。確認調査は、第３図に示すように調査区の短軸方向に９本のトレンチ（１～９Ｔｒ）を設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の土坑20基・柱穴１本、弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓１基、中世以降の土坑３基・柱穴４本を確認した。教育委員会は、この結果をただちに施工責任者に報告し、保存措置について検討を依頼した。

４月26日に施工責任者と保存措置についての事前打合せを実施した。その後も打合せを重ねた結果、駐車場スペース部分は盛土保存とし、駐車場出入口部分及び表層改良工事が行われる共同住宅部分、敷地南側の浸透トレンチ部分（601.97㎡）については、十分な文化財保護層が確保できないことから、発掘調査を実施することに決定した。

５月９日、教育委員会は、工事主体者より埋蔵文化財発掘調査依頼書が提出されたため、17日に発掘調査の実施に向けた事前協議を実施した。

５月25日、土木工事主体者・教育委員会・民間調査組織である株式会社中野技術（代表取締役　菅原広志）において三者協議を実施し、令和５年５月30日付けで、西原大塚遺跡第243地点埋蔵文化財保存事業に係る三者による協定を締結した。

教育委員会は、５月29日付けで埋蔵文化財発掘の届出及び発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。以上により、教育委員会を調査主体に令和５年５月30日から発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

発掘作業は、令和５年５月30日から同年８月２日まで実施した。調査に際しては、残土置場を用地内に確保するため、概ね調査区の北半・南西部を１区、調査区の南東部を２区とし、工期の前半は１区、後半は２区の順で調査を行った。

調査経過の概要は以下の通りである。各遺構の精査経過は、第２表の発掘工程表に示した。

５月30日　調査用地の整備を開始。

５月31日　安全柵、仮設事務所の設置及び調査機材の搬入。

６月１日　バックホーを使用して、１区の表土剥ぎ作業を開始。並行して遺構検出作業を開始。

６月７日　６月２日の降雨による調査区内の冠水を挟み、遺構の精査を開始。

６月16日　弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓（25方）を含む１区の南西部の調査が完了。当該箇所に残土置き場を設定し、37号方形周溝墓（37方）の本格的な精査を開始。

６月23日　37方の土層断面及び遺物出土状況を写真撮影。

６月27日　37方については完掘後、ドローンを使用して俯瞰写真を撮影。

６月28日　縄文時代のものと考えられる土坑及びピットの調査を開始。１区北部では縄文時代の土坑である1005Ｄで逆位の埋設土器、1011Ｄで横転した略完形の深鉢形土器が出土する。

７月５日　１区の北半部の全景写真を撮影。撮影終了後、３か所の試掘坑（ＴＰ１～３）を設定し、旧石器時代の遺構・遺物の確認調査を行う。

７月７日　１区の埋め戻し作業を行う。

7月10日　２区の表土剥ぎ作業と遺構検出作業を開始。確認調査で検出されていた縄文時代の土坑以外に、弥生時代後期～古墳時代前期の38号方形周溝墓（38方）と住居跡（671Ｙ）のプランが新たに確認される。

7月13日　検出遺構の精査を開始。縄文時代の土坑（1036Ｄ）では逆位の埋設土器が出土する。

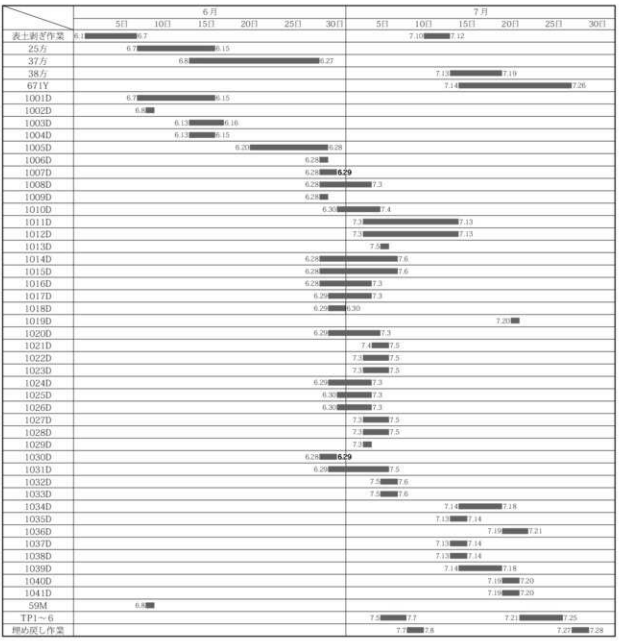
7月19日　38方の調査と671Ｙで検出されていた炭化材の取り上げが終了。

7月21日　２区全景写真を撮影。撮影終了後、３か所の試掘坑（ＴＰ４～６）を設定し、旧石器時代の遺構・遺物の確認調査を開始。

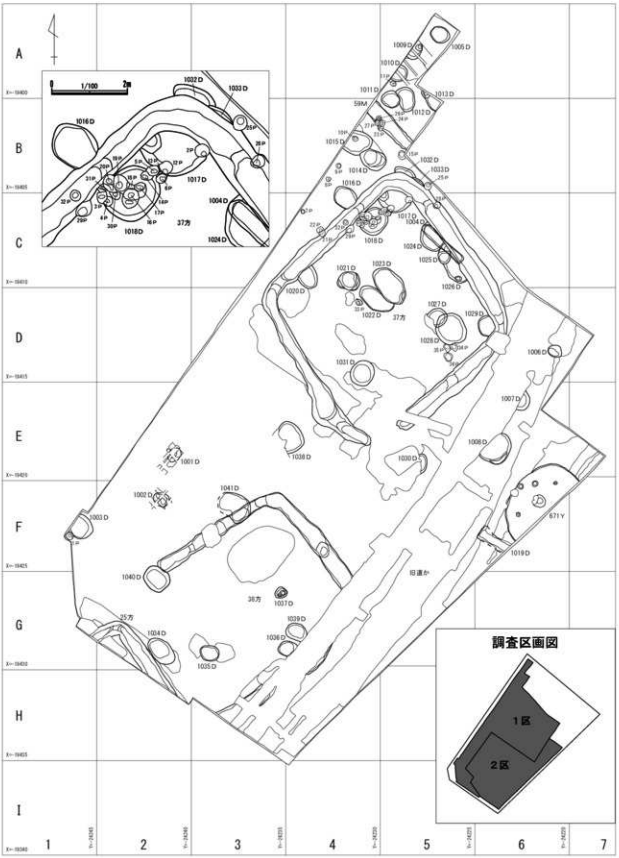
7月25日　671Ｙの掘り方精査と旧石器時代の遺構・遺物の確認調査が終了。

7月27日　２区の埋戻し作業を開始。

8月２日　仮設事務所及び仮囲いを撤去。現地発掘作業の全工程を終了。



第２表　発掘調査工程表



第４図　遺構分布図（１／200）

第３節　基本層序

調査地は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地上に位置する。調査区の現地表面は、標高約16.5ｍでほぼ平坦である。現地表面から深さ約0.4～1.0ｍまでは耕作土を主体とする暗褐灰色の表土が堆積する。表土下のローム層は、調査区全体で標高約15.7～16.1ｍ以下に確認された。

旧石器時代の遺構・遺物の存否確認と基本層序の記録を目的として、６か所の試掘坑（ＴＰ１～６）を設定し、立川ローム層の標準層序第Ｘ層上面（標高14.8～15.0ｍ）までを目安に掘削調査を行った（第５図）。

本地点におけるローム層の上面は、標準層序の第Ⅲ層に相当するソフトロームの貫入が認められるが、ＴＰ１・２では第Ⅳ層下部まで、ＴＰ３～６では第Ⅴ層まで耕起の累積によると思われる面的な撹乱を受けている。このことは各時代の遺構の遺存状況に影響する。

一方、第Ⅴ層下面から第Ⅹ層上面にかけての層理面に自然地形の傾斜や起伏は認められないことから、ヒトによる開発当初から現在に至るまで、台地上の平坦面を活用した土地利用がなされてきたと考えられる。

第５図に示す基本土層の内容は以下の通りである。

第Ⅲ層　黄褐色のソフトローム層。白色粒子を少量、橙色スコリア（φ１㎜以下）・黒色スコリア（φ１㎜以下）を微量含む。

第Ⅳ層　黄褐色のハードローム層。白色粒子・橙色スコリア（φ１～２㎜）・黒色スコリア（φ１～２㎜）を少量含む。

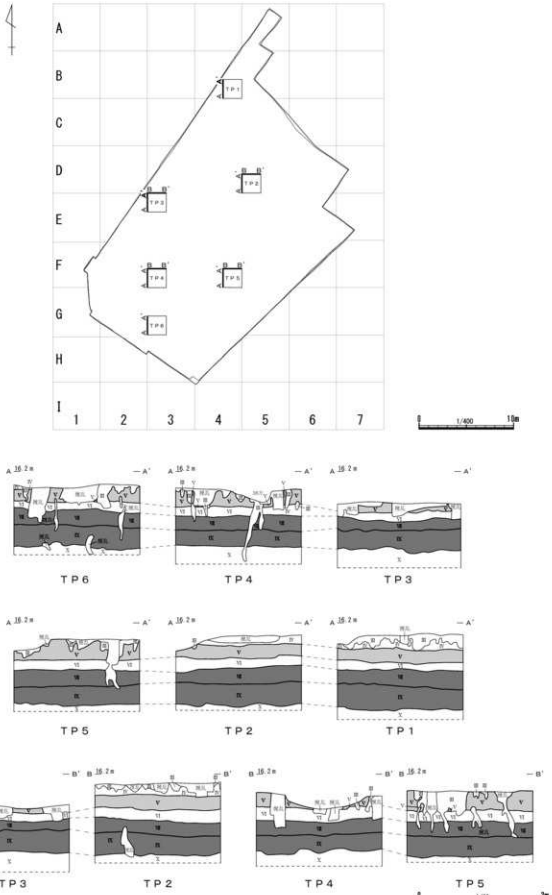
第Ⅴ層　にぶい黄褐色のハードローム層。白色粒子をやや多く、橙色スコリア（φ１～２㎜）・黒色スコリア（φ１～５㎜）を少量含む。第一暗色帯。

第Ⅵ層　黄褐色のハードローム層。明黄褐色土ブロック・白色粒子をやや多く、橙色スコリア（φ１～２㎜）・黒色スコリア（φ１～３㎜）を少量、青灰色スコリア（φ１㎜）を微量含む。

第Ⅶ層　にぶい黄褐色のハードローム層。白色粒子を微～少量、橙色スコリア（φ１～２㎜）・黒色スコリア（φ１～３㎜）を少量含む。第二暗色帯上部。

第Ⅸ層　にぶい黄褐色のハードローム層。上層より暗色。白色粒子を微量、橙色スコリア（φ１～２㎜）をやや多く含む。第二暗色帯下部。

第Ⅹ層　にぶい黄褐色のハードローム層。上層より明色。橙色スコリア（φ１㎜）・黒色スコリア（φ１㎜）を微量含む。



第５図　基本層序（１／400・１／60）

第３章　検出された遺構・遺物

第１節　縄文時代の遺構・遺物

（１）概要

検出された縄文時代の遺構は、土坑40基（1001Ｄ～ 1003Ｄ・1005Ｄ～ 1041Ｄ）、ピット２本（33・36Ｐ）である。土坑は、調査区の北側に比較的多いが、概ね調査区全域から満遍なく検出されている。出土遺物は縄文時代中期後葉を主体とする。

本調査地点における縄文時代の遺構の覆土は、焼土粒や炭化物の混入が非常に少ないものが多い一方、焼土粒や焼礫を含むものが散見される。

特筆されるのは、1005・1011・1036Ｄの３基の土坑である。1005Ｄと1036Ｄは共に大きく攪乱を受けながらも土器の口縁が逆位で遺存する。1011Ｄでは横位で圧潰した略完形の深鉢形土器が出土した。

（２）土坑

1001号土坑

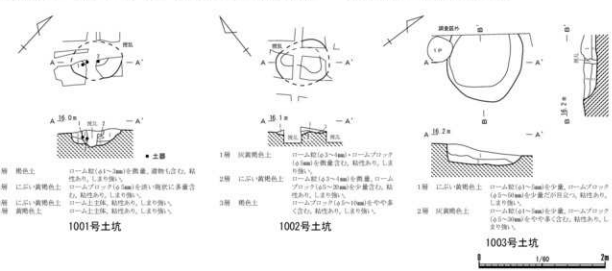
遺　　構（第６図、第24表）

［位　　置］（Ｅ－２）グリッド。

［検出状況］半分以上をトレンチャーで攪乱されており、南東半部のみの検出である。

［構　　造］**平面形：**楕円形。**断面形：**椀形。底面は緩やかな起伏があり、壁面は南西側がほぼ垂直で、北東側が丸く立ち上がり大きく外傾する。**規模：**長軸現況1.34ｍ／短軸1.24ｍ／深さ30㎝。**長軸方位：**Ｎ－50°－Ｅ。

［覆　　土］４層に分層される。１層はしまりの強い褐色土で、遺物を比較的多く含む。２～４層は淡い斑状にロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土やローム土主体の黄褐色土である。



第６図　第１面の土坑１（１／60）

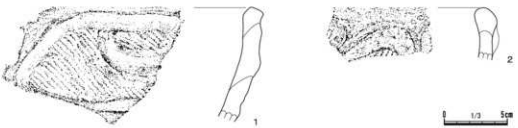
［遺　　物］縄文土器３点が出土し、うち２点を図示した。

［時　　期］縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期）。

遺　　物（第７図、図版19－１、第３表）

［土　　器］（第７図１・２、図版19－１－１・２、第３表）

１・２は深鉢形土器の口縁部破片である。１は単節縄文を地文として、隆帯と沈線による楕円区画文が施されており、加曽利ＥⅡ～Ⅲ式に比定される。２は口縁部直下に隆帯と沈線による隅丸の山形区画が遺存しており、加曽利ＥⅢ式に比定される。



第７図　1001号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第7図1 図版19-1-1	深鉢	口縁部 小破片	高［9.0］	下部は外傾し、上部は直立気味に開く	地文は横位のＲＬ単節縄文／口縁部に隆帯と沈線による楕円区画文／区画文内に隆帯による調整文文はクランク状文を描出	暗灰色／石英・白色砂粒・黄褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅡ～Ⅲ式）	中層
第7図2 図版19-1-2	深鉢	口縁部 小破片	高［4.2］	僅かに内湾する	口縁部に幅広の隆帯と沈線による隅丸の山形区画文	暗灰色／石英・角閃石・黄褐色粒・小石を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	中層

第３表　1001号土坑出土土器一覧

1002号土坑

遺　　構（第６図、第24表）

［位　　置］（Ｆ－２）グリッド。

［検出状況］格子状にトレンチャーによる攪乱を受けており、遺存状態が悪い。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：浅い皿形。底面は狭く、壁面は丸く立ち上がり大きく外傾する。**規模**：長軸0.88ｍ／短軸0.77ｍ／深さ12㎝。**長軸方位**：Ｎ－37°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。１層は灰黄褐色土、２層はローム質土に近いにぶい黄褐色土、３層は立ち上がり際に三角堆積する褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1003号土坑

遺　　構（第６図、第24表）

［位　　置］（Ｆ－１）グリッド。

［検出状況］北西側は調査区外に続く。南西部を１Ｐと根攪乱に壊される。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：皿形。底面は平坦であり、壁面の南側は底面から垂直に屈曲し

て立ち上がり、北側は丸く立ち上がる。**規模**：長軸現況1.10ｍ／短軸現況1.21ｍ／深さ34㎝。**長軸方位**：Ｎ－25°－Ｗ。

［覆　　土］２層に分層される。１層はにぶい黄褐色土、２層は色調が暗めの灰黄褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1005号土坑

遺　　構（第８図、第24表）

［位　　置］（Ａ－５）グリッド。

［検出状況］南側は耕作による攪乱を受けている。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：皿形。底面は緩やかな起伏がある。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。**規模**：長軸1.05ｍ／短軸0.84ｍ／深さ24㎝。**長軸方位**：Ｎ－76°－Ｗ。遺構の西寄りで深鉢形土器の口縁部が逆位で出土した。

［覆　　土］５層に分層される。いずれも強く締まる。直立する土器口縁部破片の内外の１・２層はロームブロックを少量含む黒褐色土が主体。東側の壁面沿いに三角堆積する３層は僅かに焼土を含む灰黄褐色土。土器の下位に堆積する４層の灰黄褐色土と５層のにぶい黄褐色土は、しまりがより強く、淡い斑状にロームブロックを含む。

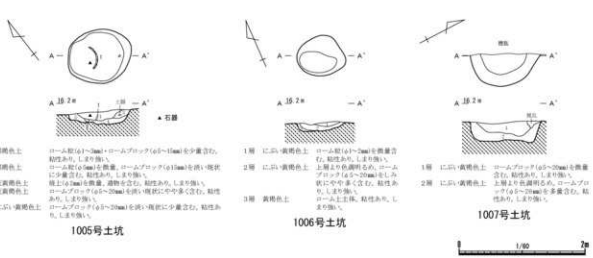
［遺　　物］逆位で出土した深鉢形土器の口縁部は、耕作跡に南北を攪乱されているため、口縁全周の４分の１程度、高さ約10㎝で遺存する。出土状況から、遺構に伴う埋設土器である可能性が高い。他に別個体の土器細片と黒曜石の剥片１点が出土している。

［時　　期］縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）。

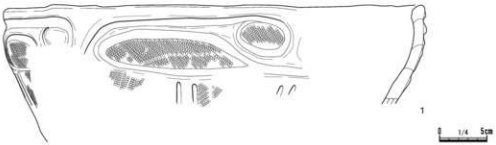
遺　　物（第９図、図版19－２、第４表）

［土　　器］（第９図１、図版19－２－１、第４表）

１が逆位で出土した深鉢形土器である。口縁部はやや内傾している。隆帯による渦巻文は、円形と楕円形に区画文化しており、区画内は無文もしくは単節縄文が施される。胴部には垂下する磨消縄文が遺存する。加曽利ＥⅢ式に比定される。



第８図　縄文時代の土坑２（１／60）



第９図　1005号土坑出土遺物（１／４）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第9図1 図版19-2-1	深鉢	口縁部～胴部 45%	口（42.4） 高［14.5］	内湾する	口縁部は隆帯と沈線により円形と楕円形の区画文を描出／区画内は横位R L単節縄文又は無文／胴部は平行沈線を垂下し、沈線間を擦消し／他は縦位R L単節縄文施文	黄褐色／白色砂粒・赤褐色粒・黒色粒を含む	中期後葉 （加曽利E Ⅲ式）	中層

第４表　1005号土坑出土土器一覧

1006号土坑

遺　　構（第８図、第24表）

［位　　置］（D－６）グリッド。

［検出状況］硬化した撹乱土壌に薄く覆われる。

［構　　造］**平面形**：不整円形。**断面形**：浅い皿形。底面は狭く、丸みがある。壁面は、南西側がやや急傾斜で外傾し、北東側が緩い立ち上がりで大きく外傾する。**規模**：長軸0.78ｍ／短軸0.65ｍ／深さ15㎝。**長軸方位**：Ｎ－59°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。主体となる１・２層はしまりの強いにぶい黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器１点が出土した。

［時　　期］縄文時代中期中葉（阿玉台式期）。

遺　　物（第10図、図版19－３、第５表）

［土　　器］（第10図１、図版19－３－１、第５表）

１は深鉢形土器の胴部破片である。内外面共に無文で、胎土に金雲母を多く含むことから、阿玉台式に比定される。

第10図　1006号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第10図1 図版19-3-1	深鉢	胴部 小破片	厚0.7	僅かに外傾する	内外面無文	にぶい褐色／金雲母を多量・石英・白色砂粒を含む	中期中葉 （阿玉台式）	覆土中

第５表　1006号土坑出土土器一覧

1007号土坑

遺　　構（第８図、第24表）

［位　　置］（Ｅ－６）グリッド。

［検出状況］北西半部を旧道関連と考えられる攪乱に壊されている。

［構　　造］**平面形**：円形と推定。**断面形**：浅い逆台形。底面はほぼ平坦で緩やかな起伏がある。壁面は、丸みをもって立ち上がり、南側がほぼ垂直で、北側がやや外傾する。**規模**：長軸1.10ｍ／短軸現況0.51ｍ／深さ34㎝。**長軸方位**：不明。

［覆　　土］２層に分層される。１層はにぶい黄褐色土、２層はロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1008号土坑

遺　　構（第11図、第24表）

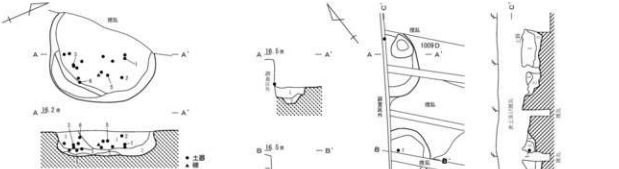
［位　　置］（Ｅ－６）グリッド。

［検出状況］西側に大きく攪乱を受けており、全体の３分の２程度が遺存する。

［構　　造］**平面形**：楕円形と推定。**断面形**：底面は平坦で、壁面は大きな丸みをもって立ち上り、一旦内湾してから外傾する。南東壁の上端は、外側にやや張り出しており、壁面に緩やかな段差が見られる。**規模**：長軸1.81ｍ／短軸現況1.23ｍ／深さ41㎝。**長軸方位**：Ｎ－48°－Ｅ。

［覆　　土］５層に分層される。１層はローム粒とロームブロックをやや多く含む褐色土、２層はローム粒を多く含むにぶい黄褐色土、３・４層はローム粒・ロームブロック共に上層より少なく、色調が暗めのにぶい黄褐色土である。最下層の５層はローム土主体で灰黄褐色土を淡い斑状に含む。

［遺　　物］細片を含め135点の縄文土器が出土した。うち７点を図示した。縄文時代中期中葉の土器以外に、中期後葉に比定される磨消縄文を伴う遺物も認められる。



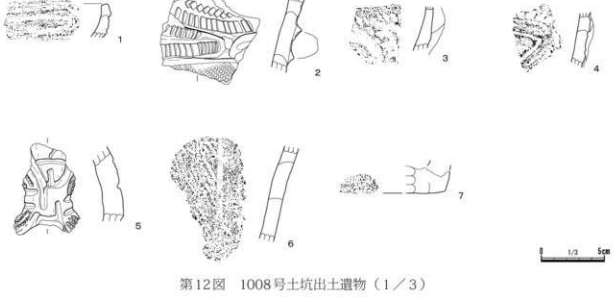
第11図　縄文時代の土坑３（１／60）

［時　　期］縄文時代中期中葉～後葉（阿玉台Ｉｂ～加曽利ＥⅢ式期）。

遺　　物（第12図、図版19－４、第６表）

［土　　器］（第12図１～７、図版19－４－１～７、第６表）

１～７はいずれも深鉢形土器である。１は内湾する口縁部片で、角押文を伴う隆帯による楕円区画が見られ、胎土に金雲母を多く含む。阿玉台Ｉｂ式に比定される。２は角押文もしくはキャタピラー文が沿う断面三角の隆帯で楕円区画が作り出され、その下に単節縄文が見られる。勝坂３式に比定される。３は隆帯による楕円区画が見られ、隆帯上と区画内に連続押圧が施される。勝坂３ｂ式に比定される。４は三角押文と沈線が沿う隆帯による三角区画が見られる。勝坂３式に比定される。５は橋状の把手部片で、断面長方形の粘土紐に対向する弧状の粘土を貼り付け、沈線による幾何学文と複列の三角押文が施される。勝坂２式に比定される。６は単節縄文を地文として、垂下する磨消縄文がみられる。加曽利ＥⅢ式に位置付けられる。７は底部破片で、外面上部に集合沈線が遺存する。加曽利Ｅ式に比定される。



第12図　1008号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第12図1 図版19-4-1	深鉢	口縁部 小破片	高［2.6］	内湾する	隆帯による楕円区画文の内側と外側側部寄り部分に角押文を沿わせる	に.ぶい.黄褐色／金雲母多量・長石・石英・赤褐色粒を含む	中期中葉 （阿玉台Ｉｂ式）	中層
第12図2 図版19-4-2	深鉢	胴部 小破片	厚3.3	僅かに外傾する	隆帯による楕円区画文内外に幅広のキャタピラー文と三角押文を沿わせる／胴下部にＲＬ単節縄文施文	灰黄褐色／石英・長石・黒色粒・黄褐色粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	上層
第12図3 図版19-4-3	深鉢	胴部 小破片	厚1.7	僅かに外傾する	横位隆帯上・楕円区画隆帯側面に連続押圧／楕円区画内に単沈線を沿わせ、斜位の連続押圧を施文	灰黄褐色／石英・角閃石・長石・白色砂粒を多く含む	中期中葉 （勝坂３ｂ式）	中層
第12図4 図版19-4-4	深鉢	胴部 小破片	厚1.2	僅かに外傾する	隆帯による三角区画文の外側に平行する三角押文／内側に沈線を沿わせる	に.ぶい.赤褐色／白色砂粒・黒色粒・赤褐色粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	覆土中
第12図5 図版19-4-5	深鉢	把手 小破片	厚1.6	僅かに外傾する	橋状把手／棒状粘土に対向する弧状粘土紐貼付	中央部に沈線による幾何学文／両端には横位平行沈線を挟み、三角押文を放射状に複列施文	に.ぶい.褐色／チャート・白色砂粒・赤褐色粒・黒色粒を含む	中期中葉 （勝坂２式）	中層
第12図6 図版19-4-6	深鉢	胴部 小破片	厚1.2	僅かに外傾する	地文ＬＲ単節縄文／平行沈線を垂下し、沈線間を磨消し	に.ぶい.黄褐色／石英・チャート・白色砂粒・黒色粒を含む	中期後葉 （加曽利Ｅ式）	上層
第12図7 図版19-4-7	深鉢	胴～底部 小破片	高［2.2］	平底／胴部は僅かに外傾する	胴部外面上部に縦位の集合沈線施文	に.ぶい.褐色／白色砂粒・黒色粒・茶褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利Ｅ式）	覆土中

第６表　1008号土坑出土土器一覧

1009号土坑

遺　　構（第11図、第24表）

［位　　置］（Ａ－５）グリッド。

［検出状況］北西側は調査区外に続く。

［構　　造］**平面形**：楕円形と推定。**断面形**：全体には浅い逆台形で、底面には緩い起伏が認められる。壁面は、南側が丸く立ち上がり、北側が屈曲して立ち上がる。**規模**：長軸現況0.59ｍ／短軸0.92ｍ／深さ28㎝。**長軸方位**：Ｎ－65°－Ｗ。

［覆　　土］２層に分層される。１層はにぶい黄褐色土、２層は淡い斑状にロームブロックを多く含む黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器２点が出土した。無文の胴部破片であるが、図示し得なかった。

［時　　期］出土遺物から縄文時代と考えられる。

1010号土坑

遺　　構（第11図、第24表）

［位　　置］（Ａ－５）グリッド。

［検出状況］北西側は調査区外に続く。中央をトレンチャー痕が横断する。

［構　　造］**平面形**：円形と推定。**断面形**：攪乱により明瞭ではないが、底面は南側が段差をもって落ち込む。壁面は屈曲して立ち上がり、南側がほぼ垂直、北側が大きく外傾する。**規模**：長軸現況0.59ｍ／短軸0.91ｍ／深さ26㎝。**長軸方位**：Ｎ－68°－Ｗ。

［覆　　土］２層に分層される。いずれもローム土を多く含むにぶい黄褐色土で、下層はロームブロックを多く含む。

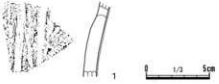
［遺　　物］縄文土器１点が出土した。

［時　　期］縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）。

遺　　物（第13図、図版20－１、第７表）

［土　　器］（第13図１、図版20－１－１、第７表）

１は深鉢形土器の胴部破片である。単節縄文を地文とし、磨消縄文が垂下する。加曽利ＥⅢ式に比定される。



第13図　1010号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第13図1 図版20-1-1	深鉢	胴部 小破片	厚1.1	僅かに外傾する	地文ＲＬ単節縄文／平行沈線を垂下し、沈線間を磨消し	以黄褐色／白色砂粒・黒色粒・淡褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	上層

第７表　1010号土坑出土土器一覧

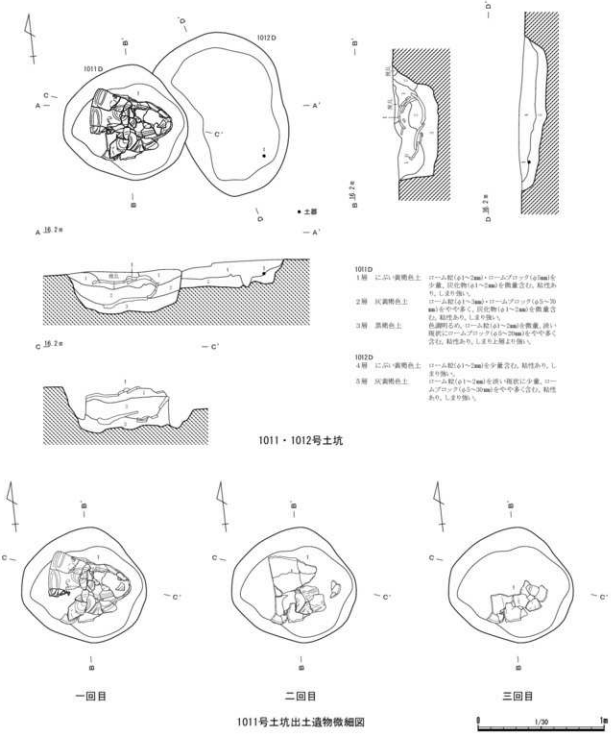
1011号土坑

遺　　構（第14図、第24表）

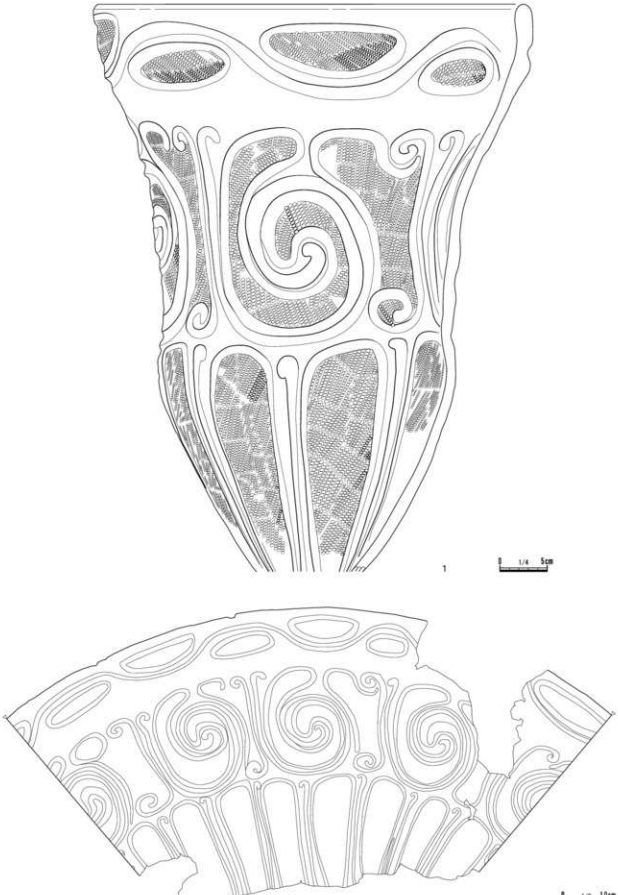
［位　　置］（A・B－5）グリッド。

［検出状況］東側の1012Dを切る。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：底面はやや起伏があるが、概ね平坦である。壁面は丸く立ち上がり、外傾する。東から南側にかけてはほぼ垂直である。**規模**：長軸1.01ｍ／短軸0.93ｍ／深さ57㎝。**長軸方位**：Ｎ－88°－Ｅ。



第14図　縄文時代の土坑４（１／30）



第15図　1011号土坑出土遺物（1／8・1／4）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第15図1 図版20-2-1	深鉢	口縁部～第下部 70％	口 45.0 高 [60.0]	口縁部は直立して開き、頸部との明瞭な境は有せず胴部に至る／頸部は中位より下部分でやや括れ、丸みをもちながら底部に向かってすぼまる／底部は欠失	口縁部は沈線で大小７個の楕円区画を施文し、区画間を縫うように沈線を巡らせる／頸部は無文／胴部は括れを境に文様帯が上下に分かれ、上段は瑞部が蕨手状の沈線による大柄の渦巻文を４単位、文様間に上下端が蕨手状の縦位沈線を施文／下段は沈線による逆U字区画文と瑞部が蕨手状の縦位沈線を交互に施文／全ての区画内に多L単節縄文を多方向に充填	灰黄褐色／小礫多量・長石・石英・チャート・角閃石・白色砂粒を含む	中期後葉 （加曽利E Ⅲ式）	中央中層

第８表　1011号土坑出土土器一覧

［覆　　土］３層に分層される。１層はローム粒の少ないにぶい黄褐色土で、土器の外側と土器内部の上３分の１まで流れ込む。２層はローム粒とロームブロックをやや多く含む灰黄褐色土で、土器の外側と土器内部の下３分の２まで堆積する。３層は土器より下位の堆積で、ロームブロックをやや多く含む色調の明るい黒褐色土である。

［遺　　物］口径45.0㎝、器高60.0㎝を測る深鉢形土器１個体が横位の潰れた状態で出土した。土器は、底面から約２～４㎝浮いた位置で、西を向く口縁側がやや下に傾いた状態で検出された。南側側部の胴部破片は土を挟まずに上下が接しており、当該部が最初に割れて陥没した状況が窺える。

［時　　期］縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）。

遺　　物（第15図、図版20－２、第８表）

［土　　器］（第15図１、図版20－２－１、第８表）

１が倒潰した状態で出土した深鉢形土器である。平口縁のキャリパー形で、口縁部文様帯は沈線による楕円区画間を波状の沈線がぬう。口縁部文様帯下に無文帯を挟み、胴部の文様は二段構成で、蕨手で垂下する沈線と４単位の渦巻状沈線の間に縄文が充填されている。加曽利ＥⅢ式に比定される。

1012号土坑

遺　　構（第14図、第24表）

［位　　置］（Ａ・Ｂ－５）グリッド。

［検出状況］1011Ｄに切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：全体では皿形で、底面は緩やかな起伏がある。壁面は屈曲して立ち上がり、外傾する。**規模**：長軸1.31ｍ／短軸0.87ｍ／深さ41㎝。**長軸方位**：Ｎ－５°－Ｗ。

［覆　　土］２層に分層される。上層はにぶい黄褐色土、下層はロームブロックをやや多く含む灰黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器２点が出土した。うち１点を図示する。

［時　　期］縄文時代中期中葉～後葉。

遺　　物（第16図、図版21－１、第９表）

［土　　器］（第16図１、図版21－１－１、第９表）

１は緩やかな屈曲がみられる浅鉢形土器の胴部片である。内面に赤彩が施されており、外面にも僅かに赤彩の痕跡が認められる。

第16図　1012号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第16図1 図版21-1-1	浅鉢	胴部 小破片	厚 1.2 高〔2.7〕	ゆるやかに屈曲しながら外へ開く	内外面無文／内面赤彩、外面にも僅かに赤彩の痕跡が残る	黒褐色／石英・長石・白色砂粒・小礫を含む	中期中～後葉	中層

第９表　1012号土坑出土土器一覧

1013号土坑

遺　構（第17図、第24表）

［位　　置］（Ａ・Ｂ－５）グリッド。

［検出状況］北から東にかけては調査区外に続く。

［構　　造］**平面形**：不明。**断面形**：浅い皿形。底面はほぼ平坦で北西部がやや落ち込む。壁面の立ち上がりは北西側が丸く南側が急である。**規模**：長軸現況1.29ｍ／短軸現況0.61ｍ／深さ12㎝。**長軸方位**：Ｎ－32°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。１層はにぶい黄褐色土、２層はロームブロックを多く含む灰黄褐色土、立ち上がり際の３層は淡い斑状に褐色土を含む黄褐色土が堆積する。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1014号土坑

遺　構（第17図、第24表）

［位　　置］（Ｂ－４・５）グリッド。

［検出状況］1015Ｄを切る。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：皿形。長軸東側の立ち上がりには緩やかな段差が見られ、西側の底面は狭く平坦である。壁面は屈曲して立ち上がり、大きく外傾する。**規模**：長軸1.45ｍ／短軸1.02ｍ／深さ28㎝。**長軸方位**：Ｎ－71°－Ｗ。

［覆　　土］２層に分層される。１層は黒褐色土、２層はローム粒を多く含む灰黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器２点が出土した。無文の胴部片であるが、図示し得なかった。

［時　　期］出土遺物から縄文時代と考えられる。

1015号土坑

遺　構（第17図、第24表）

［位　　置］（Ｂ－４）グリッド。

［検出状況］1014Ｄ、10Ｐに切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形と推定。**断面形**：浅い皿形。底面は緩やかな起伏があるがほぼ平坦で、壁

面は屈曲して立ち上がり、大きく外傾する。**規模**：長軸現況1.61ｍ／短軸現況1.33ｍ／深さ18㎝。**長軸方位**：Ｎ－77°－Ｅ。

［覆　　土］２層に分層される。上層は灰黄褐色土、下層はローム粒を多く含むにぶい黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器の細片１点が出土したが、図示し得なかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1016号土坑

遺　　構（第17図、第24表）

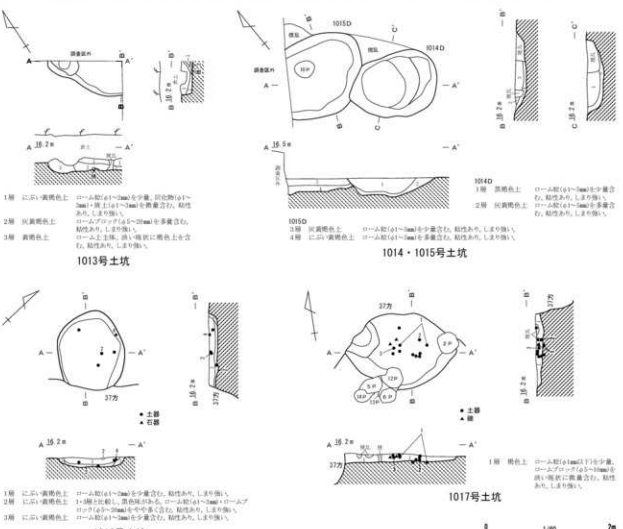
［位　　置］（Ｂ・Ｃ－４）グリッド。

［検出状況］南東側を37方に切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：浅い皿形で底面は平坦である。壁面は丸く立ち上がり、外傾する。**規模**：長軸現況1.24ｍ／短軸1.07ｍ／深さ16㎝。**長軸方位**：Ｎ－38°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。いずれもにぶい黄褐色土であるが、底面を覆う２層はローム粒・ロームブロックをやや多く含み、黒色味がある。３層は立ち上がり際の三角堆積である。

［遺　　物］縄文土器17点、石鏃１点、黒曜石の剥片１点が出土した。うち４点を図示する。



第17図　縄文時代の土坑５（１／60）

［時　　期］縄文時代中期中葉～後葉（阿玉台Ⅰｂ～連弧文系期）。

遺　　物（第18図、図版21－２、第10・11表）

［土　　器］（第18図１～３、図版21－２－１～３、第10表）

１～３はいずれも深鉢形土器の胴部片である。１は横位の隆帯下に等間隔で角押文が垂下し、胎土に金雲母を多く含む。阿玉台Ⅰｂ～Ⅱ式に比定される。２は弧状の隆帯による区画が見られ、隆帯に平行して区画外に深い沈線、区画内に細い沈線が複列で見られる。隆帯の表面には浅い刻みが、区画内にはまばらに刺突文が施される。勝坂２～３式に比定される。３は細かな撚糸文が施される。中期後葉の連弧文系土器に比定されると考えられる。

［石　　器］（第18図４、図版21－２－４、第11表）

４は黒曜石製で凹基無茎の石鏃である。先端部が欠損している。

第18図　1016号土坑出土遺物（１／３・２／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第18図1 図版21-2-1	深鉢	胴部 小破片	厚0.9	僅かに外傾する	横位隆帯直下に等間隔で角押文を垂下	に赤い褐色／金雲母多量・長石・石英・白色砂粒を含む	中期中葉 （阿玉台Ⅰｂ～Ⅱ式）	覆土中
第18図2 図版21-2-2	深鉢	胴部 小破片	厚2.2	僅かに外傾する	外縁に刻みを施した弧状の隆帯で大きく区画し、区画内外に沈線を沿わせる／区画内側の弧状沈線には交互刺突を加える	暗灰黄色／石英・長石・白色砂粒・黒色粒含む	中期中葉 （勝坂２～３式）	上層
第18図3 図版21-2-3	深鉢	胴部 小破片	厚0.8	僅かに外傾する	縦位の細かなＲ撚糸文	暗灰黄色／石英・長石・淡褐色粒を含む	中期後葉 （連弧文系か）	覆土中

第10表　1016号土坑出土土器一覧

挿図番号 図版番号	種別 器種	石材	長さ （cm）	幅 （cm）	厚さ （cm）	重量 （g）	特徴	出土位置
第18図4 図版21-2-4	石鏃	黒曜石	1.8	2.1	0.6	1.0	凹基無茎／鏃身は二角形状／先端部欠損／鋸辺は細かな調整剥離によって潰瘍状を呈する	上層

第11表　1016号土坑出土石器一覧

1017号土坑

遺　　構（第17図、第24表）

［位　　置］（Ｂ－５、Ｃ－４・５）グリッド。

［検出状況］北西側と北東側を37方に、南側上端を２・６・12・13Ｐに切られる。

［構　　造］**平面形**：円形と推定。**断面形**：底面はほぼ平坦で壁面は外傾する。**規模**：長軸現況1.80ｍ／短軸現況1.22ｍ／深さ15㎝。**長軸方位**：不明。

［覆　　土］単層の覆土は、ローム粒を少量含む褐色土である。

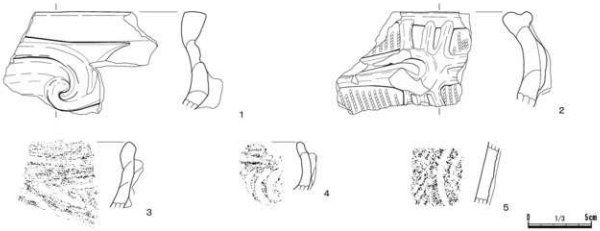
［遺　　物］縄文土器41点、他に礫６点を取り上げた。うち、５点を図示する。

［時　　期］縄文時代中期中葉～後葉（勝坂３～加曽利ＥⅣ式期）。

遺　　物（第19図、図版21－３、第12表）

［土　　器］（第19図１～５、図版21－３－１～５、第12表）

１は浅鉢、２～５は深鉢形土器で、１～４は口縁部片である。１は内湾する口縁部片で、口端部は無文で肥厚して開く、以下には隆帯による渦巻文が施される。勝坂３式に比定される。２も内湾する口縁部片で、口唇部は断面Ｙ字形に窪む。撚糸文を地文とし、縦位の隆帯と横に伸びるアヤピン形の隆帯が交差する。加曽利ＥⅠ式に比定される。３は単節縄文を地文とし、隆帯による区画文が施される。加曽利ＥⅠ式に比定される。４は内湾する口縁部片で口唇部に段をもつ。沈線で重弧文が施され、加曽利ＥⅠ式と曽利式の特徴が認められる。５は胴部破片である。単節縄文を地文として弧状の隆帯が遺存し、隆帯の片側は縄文が磨り消される。加曽利ＥⅣ式に比定される。



第19図　1017号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第19図1 図版21-3-1	浅鉢	口縁部 小破片	高［8.1］	口唇部は肥厚し、口唇部は無文／口縁部には沈線と幅広わずかに外傾／口の隆帯により渦巻文を施文／口縁内側と隆帯下側に煤付着	地文は撚糸文／口縁部に一段凹みをめぐらせる／口縁部に隆帯を縦位に３本、横位に２本貼付け、交点に隆帯による疣手文を施文	明灰黄色／石英・長石・赤褐色粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層から下層
第19図2 図版21-3-2	深鉢	口縁部 小破片	高［8.1］	強く内湾する	地文は撚糸文／口唇部に一段凹みをめぐらせる／口縁部に隆帯を縦位に３本、横位に２本貼付け、交点に隆帯による疣手文を施文	黄灰色／石英・角閃石・長石・白色砂粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅠ式）	下層
第19図3 図版21-3-3	深鉢	口縁部 小破片	高［5.3］	僅かに内湾する	地文はＲＬ単節縄文／隆帯による区画文施文	灰黄褐色／長石・白色砂粒・赤褐色粒・小礫を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅠ式）	中層
第19図4 図版21-3-4	深鉢	口縁部 小破片	高［3.8］	内湾する／口縁部に板状粘土を貼付け、張り出しを作出	沈線による縦位の重弧文	褐色／角閃石・長石・白色砂粒・小石を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅠ式・曽利式折衷）	覆土中
第19図5 図版21-3-5	深鉢	胴部 小破片	厚1.2	僅かに外傾する	地文に縦位のＲＬ単節縄文／平行する弧状の隆帯貼付け／弧の内側は擦消し	黄灰色／石英・角閃石・長石・チャートを含む	中期後葉 （加曽利ＥⅣ式）	覆土中

第12表　1017号土坑出土土器一覧

1018号土坑

遺　　構（第20図、第24表）

［位　　置］（Ｃ－４・５）グリッド。

［検出状況］３～６・13・14・16～20・30・31Ｐに切られているため、遺存状態が良くない。

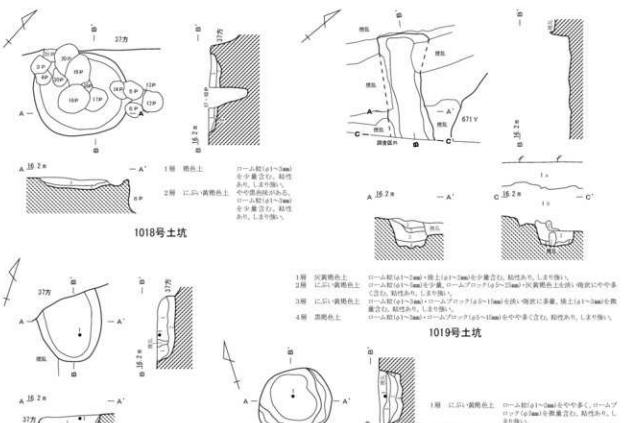
［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：浅い皿形。底面はほぼ平坦で、壁面は丸く立ち上がり大きく外傾する。**規模**：長軸現況1.49ｍ／短軸1.31ｍ／深さ19㎝。**長軸方位**：Ｎ－39°－Ｅ。

［覆　　土］２層に分層される。１層は褐色土、２層は黒色味があるにぶい黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器の細片３点が出土したが、図示し得なかった。
［時　　期］出土遺物から縄文時代と考えられる。

1019号土坑

遺　　構（第20図、第24表）
［位　　置］（Ｆ－６）グリッド。
［検出状況］南東部は調査区外に伸びており、西端を除き上部に攪乱を受ける。
［構　　造］**平面形**：長方形と推定。**断面形**：底面は平坦で、壁面は屈曲してほぼ垂直に立ち上がる。**規模**：長軸現況1.70ｍ／短軸0.80ｍ／深さ41㎝。**長軸方位**：Ｎ－59°－Ｗ。
［覆　　土］４層に分層される。１層はローム粒と焼土を少量含む灰黄褐色土、２層はロームブロックと灰黄褐色土を淡い斑状にやや多く含むにぶい黄褐色土、３層はローム粒とロームブロックを淡い斑状に多く含むにぶい黄褐色土、４層はローム粒とロームブロックをやや多く含む黒褐色土である。
［遺　　物］出土しなかった。
［時　　期］形状は後世の遺構を想起させるが、覆土の土質が他の縄文時代の遺構に似ることから本項に含めた。



第20図　縄文時代の土坑６（１／60）

1020号土坑

遺　　構（第20図、第24表）

［位　　置］（C・D－4）グリッド。

［検出状況］北西部を37方に切られる。深さのある明瞭な掘り込みである。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：底面はほぼ平坦で、壁面は丸く立ち上がり、東西軸では外傾し、南北軸ではほぼ垂直である。**規模**：長軸現況1.03ｍ／短軸1.00ｍ／深さ33㎝。**長軸方位**：Ｎ－35°－Ｗ。

［覆　　土］２層に分層される。１層はローム粒を少量含む黒褐色土、２層はロームブロックをやや多く含む灰黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器１点が出土した。

［時　　期］縄文時代中期中葉（阿玉台Ⅲ式期）。

遺　　物（第21図、図版21－４、第13表）

［土　　器］（第21図１、図版21－４－１、第13表）

１は深鉢形土器の波状口縁部である。口唇部直下に強いナデによる隆帯状の高まりが作り出される。胎土には雲母を多く含み、阿玉台Ⅲ式に比定される。

第21図　1020号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第21図1 図版21-4-1	深鉢	口縁 小破片	高［5.0］	波状口縁／僅かに内湾する	口唇部直下に強い横ナデによる隆帯状の高まりをもつ	灰黄褐色／金雲母多量・石英・長石・黒色粒を含む	中期中葉 （阿玉台Ⅲ式）	上層

第13表　1020号土坑出土土器一覧

1021号土坑

遺　　構（第20図、第24表）

［位　　置］（C・D－4）グリッド。

［検出状況］深さのある明瞭な掘り込みである。

［構　　造］**平面形**：円形。**断面形**：底面は狭い丸底である。壁面は底面から大きく丸みをもって立ち上がり、外傾する。**規模**：長軸1.20ｍ／短軸0.98ｍ／深さ38㎝。長軸方位：Ｎ－90°－Ｅ。

［覆　　土］４層に分層される。１層はローム粒をやや多く含むにぶい黄褐色土、２層はローム粒を少量含む灰黄褐色土、３層は上端付近に見られるローム由来のにぶい黄褐色土、最下層の４層は淡い斑状にロームブロックをやや多く含む灰黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器４点が出土した。磨消縄文が施されたものを含む。うち１点を図示する。

［時　　期］縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅣ式期）。

遺　　物（第22図、図版21－５、第14表）

［土　　器］（第22図１、図版21－５－１、第14表）

１は深鉢形土器の胴部片である。弧状の磨消縄文が見られ、加曽利EⅣ式に比定される。

第22図　1021号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第22図1 図版21-5-1	深鉢	胴部 小破片	厚1.0	外傾する	弧状の平行沈線間を磨消し／磨消し交間にLR単節縄文を充填	にぶい橙色／白色砂粒・黒色粒・黄褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利EⅣ式）	上層

第14表　1021号土坑出土土器一覧

1022号土坑

遺　　構（第23図、第24表）

［位　　置］（Ｃ－４、Ｄ－４・５）グリッド。

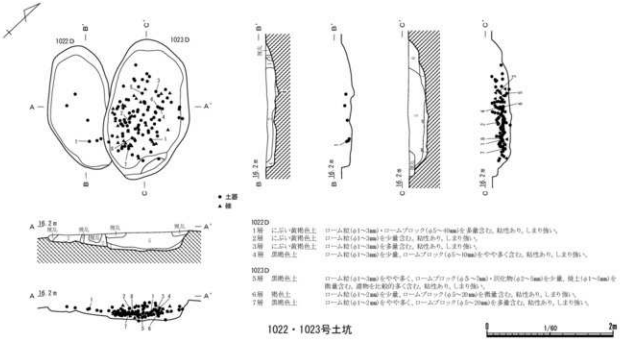
［検出状況］1023Ｄに切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：浅い皿形。底面はほぼ平坦である。壁面は底面から丸く立ち上がり、外傾する。**規模**：長軸2.03ｍ／短軸1.01ｍ／深さ23㎝。長軸方位：Ｎ－58°－Ｗ。

［覆　　土］４層に分層される。１～３層はにぶい黄褐色土、底面を薄く覆う４層はロームブロックをやや多く含む黒褐色土である。

［遺　　物］縄文土器18点が出土した。うち２点を図示する。図示したもの以外には、阿玉台式の破片が認められる。他に黒曜石の剥片２点を取り上げた。

［時　　期］縄文時代中期中葉～後葉（勝坂３式～加曽利Ｅ式期）。



第23図　縄文時代の土坑７（１／60）

遺　　物（第24図、図版22－１、第15表）

［土　　器］（第24図１・２、図版22－１－１・２、第15表）

１・２はいずれも深鉢形土器の胴部片である。１は横位隆帯の直下に縦位の沈線が施される。勝坂３式に比定される。２は縦位の単節縄文が施される。

第24図　1022号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第24図1 図版22-1-1	深鉢	胴部 小破片	厚1.4	僅かに外傾する	横位隆帯の直下に縦位の沈線施文	にぶい黄褐色／石英・角閃石・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層
第24図2 図版22-1-2	深鉢	胴部 小破片	厚1.0	僅かに外傾する	縦位のＲＬ単節縄文	にぶい褐色／角閃石・白色砂粒・赤褐色粒・小石を含む	中期後葉 （加曽利Ｅ式か）	覆土中

第15表　1022号土坑出土土器一覧

1023号土坑

遺　　構（第23図、第24表）

［位　　置］（Ｃ・Ｄ－４・５）グリッド。

［検出状況］南西側の1022Ｄを切る。

［構　　造］**平面形**：長楕円形。**断面形**：底面は北側に高まりがあるが概ね平坦である。壁面は長軸方向では緩い立ち上がりで外傾するが、短軸方向ではやや急な立ち上がりである。**規模**：長軸2.23ｍ／短軸1.34ｍ／深さ33㎝。**長軸方位**：Ｎ－39°－Ｗ。

［覆　　土］３層（５～７層）に分層される。覆土の主体である上層の５層はローム粒をやや多く含む黒褐色土で、遺物を比較的多く含む。６層は北壁付近の堆積で、ローム粒の少ない褐色土である。７層はローム粒とロームブロックを多く含む黒褐色土で、厚さ５㎝程度で底面を覆う。

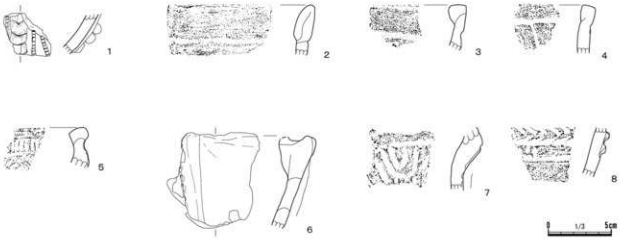
［遺　　物］縄文土器の破片と礫が比較的多く、縄文土器113点、他に礫43点を取り上げた。遺物の大半は覆土５層に伴う。縄文土器のうち８点を図示する。

［時　　期］縄文時代中期中葉（阿玉台Ｉａ～勝坂３式期）。

遺　　物（第25図、図版22－２、第16表）

［土　　器］（第25図１～８、図版22－２－１～８、第16表）

１～８はいずれも深鉢形土器で、１は阿玉台Ｉａ～Ｉｂに、２～８はいずれも勝坂３式に比定される。１～６は口縁部片である。うち１は突起部片である。縦位の隆帯を覆うように半環状の粘土紐を３本貼り付け、その両側に角押文が沿う。２・３は口縁部無文帯下に横位の沈線が巡る。４は口縁部無文帯下に横位と斜位の沈線が見られる。５は内湾する口縁で、横位のキャタピラー文直下に三角押文を沿わせ、以下に斜位のキャタピラー文が見られる。６は口唇部が厚く、側面に刻みを伴う隆帯が口唇部から垂下する。７・８は胴部片である。７は沈線区画内に褶曲文を施し、一部に縦位の隆帯が見られる。８は平行する横位隆帯に矢羽根状刺突と交互刺突が施される。



第25図　1023号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第25図1 図版22-2-1	深鉢	口縁部突起 小破片	厚1.6	大きく外傾する	粘土棒を芯として３本の粘土帯で囲むように貼付け。両脇に縦位の角押文を沿わせる	橙色／石英・チャート・白色砂粒を含む	中期中葉 （阿玉台Ⅰａ～Ⅰｂ式）	中層
第25図2 図版22-2-2	深鉢	口縁部 小破片	高［3.9］	僅かに外傾／口縁部は肥厚する	口縁部無文帯の直下に横位の単沈線を施文	明褐色／石英・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	上層
第25図3 図版22-2-3	深鉢	口縁部 小破片	高［3.6］	僅かに外傾／口縁部は肥厚する	口縁部無文帯の直下に横位の単沈線を施文	灰褐色／石英・白色砂粒・黒色粒・小礫を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層
第25図4 図版22-2-4	深鉢	口縁部 小破片	高［3.7］	僅かに外傾する	口縁部無文帯の直下に横位・斜位の沈線施文	にぶい褐色／石英・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層
第25図5 図版22-2-5	深鉢	口縁部 小破片	高［3.2］	内湾する	丸みのある口辺部直下に横位キャタピラー文と三角押文を沿わせ、以下に斜位のキャタピラー文を施文	赤褐色／白色砂粒・黒色粒・小礫を含む	中期中葉 （勝坂３式）	下層
第25図6 図版22-2-6	深鉢	口縁部 小破片	高［7.6］	外傾する／口辺部は肥厚する	口辺部から隆帯を垂下／隆帯右側面には横位の刻みを連続して施す	灰黄褐色／石英・長石・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層
第25図7 図版22-2-7	深鉢	胴部 小破片	厚1.6	上部は強く外傾する	沈線による区画内に擬由文を施文／区画外の一部に縦位隆帯貼付け	明赤褐色／石英・白色砂粒・黒色粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層
第25図8 図版22-2-8	深鉢	胴部 小破片	厚1.2	外傾する	平行する横位隆帯にそれぞれ矢羽根状刺突と交互刺突を施し、以下は無文	灰黄褐色／石英・角閃石・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層

第16表　1023号土坑出土土器一覧

1024号土坑

遺　　構（第26図、第24表）

［位　　置］（Ｃ－５）グリッド。

［検出状況］37方、1004Ｄに切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形と推定。**断面形**：皿形。底面は僅かに起伏があり、壁面は丸く立ち上がり外傾する。**規模**：長軸現況1.61ｍ／短軸現況1.05ｍ／深さ34㎝。**長軸方位**：Ｎ－19°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。１層はにぶい黄褐色土、２層は褐色土、３層はロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土である。

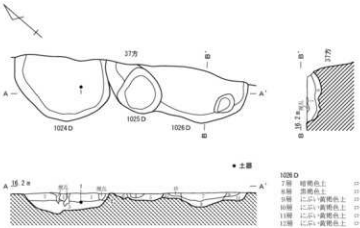
［遺　　物］縄文土器４点が出土した。うち１点を図示した。

［時　　期］縄文時代中期中葉以降。

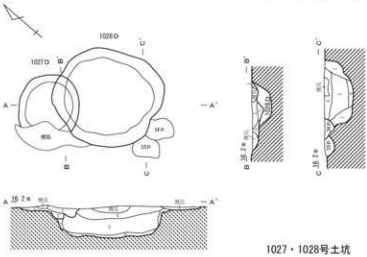
遺　　物（第27図、図版22－３、第17表）

［土　　器］（第27図１、図版22－３－１、第17表）

１は深鉢形土器の胴部片で、内外面無文を特徴とする。中期中葉以降のものと考えられる。



1024・1025・1026号土坑



1027・1028号土坑

第26図　縄文時代の土坑８（１／60）

第27図　1024号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第27図1 図版22-3-1	深鉢	胴部 小破片	厚0.9	僅かに外傾する	内外面無文	黄灰色／石英・白色砂粒を含む	中期中葉以降	中層

第17表　1024号土坑出土土器一覧

1025号土坑

遺　　構（第26図、第24表）

[位　　置]（C－５）グリッド。

[検出状況] 1026Dを切り、1004D、37方に切られる。

[構　　造] **平面形**：楕円形。**断面形**：浅い皿形。底面は南側がやや落ち込む。**規模**：長軸現況1.10ｍ／短軸0.66ｍ／深さ11㎝。**長軸方位**：Ｎ－３°－Ｅ。

［覆　　土］３層（４～６層）に分層される。主体となる５層は、淡い斑状にロームブロックを多く含む暗褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1026号土坑

遺　　構（第26図、第24表）

［位　　置］（Ｃ－５）グリッド。

［検出状況］1004・1025Ｄ、37方に切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形と推定。**断面形**：皿形。底面は大きな起伏があり、南壁際に小穴状の凹みがある。壁面は丸く立ち上がり、外傾する。**規模**：長軸現況1.80ｍ／短軸現況0.82ｍ／深さ23㎝。**長軸方位**：Ｎ－25°－Ｗ。

［覆　　土］６層（７～12層）に分層される。中央上部の７層は暗褐色土、７層下の８層はロームブロックをやや多く含む黒褐色土、以下の堆積はにぶい黄褐色土で、壁面際の堆積である。

［遺　　物］縄文土器の細片２点が出土した。他に礫１点を取り上げたが、図示し得なかった。

［時　　期］出土遺物から縄文時代と考えられる。

1027号土坑

遺　　構（第26図、第24表）

［位　　置］（Ｄ－５）グリッド。

［検出状況］1028Ｄを切る。上端付近は耕作による攪乱を受けている。

［構　　造］**平面形**：楕円形と推定。**断面形**：浅い皿形。底面はほぼ平坦であるが、1028Ｄの覆土上では不規則に落ち込む。壁面は外傾する。**規模**：長軸現況0.86ｍ／短軸1.17ｍ／深さ20㎝。**長軸方位**：Ｎ－41°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。いずれもにぶい黄褐色土であるが、１・３層に挟まれる２層はピット状の断面であるため、下層を基盤とする掘り返し、もしくは攪乱の可能性がある。

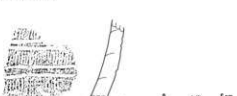
［遺　　物］縄文土器５点が出土した。うち１点を図示した。

［時　　期］縄文時代中期後葉（連弧文系期）。

遺　　物（第28図、図版22－４、第18表）

［土　　器］（第28図１、図版22－４－１、第18表）

１は深鉢形土器の胴部片である。縦位の撚糸文を地文として横位の平行沈線が施される。加曽利ＥⅡ～Ⅲ式並行の連弧文系土器に比定される。



第28図　1027号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第28図1 図版22-4-1	深鉢	胴部 小破片	厚1.2	僅かに内湾しつつ外傾する	地文縄位の R 燃糸文／横位の平行沈線を間隔を空けて複列施文	にぶい赤褐色／角閃石・石英・白色粒粒を含む	中期後葉 （連弧文系）	覆土中

第18表　1027号土坑出土土器一覧

1028号土坑

遺　構（第26図、第24表）

［位　置］（Ｄ－５）グリッド。

［検出状況］1027Ｄに切られる。

［構　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：逆台形。底面はほぼ平坦で、壁面は丸く立ち上がり、外傾する。**規模**：長軸1.80ｍ／短軸1.58ｍ／深さ46㎝。**長軸方位**：Ｎ－47°－Ｗ。

［覆　土］４層（４～７層）に分層される。上部の４層は混入物の少ないにぶい黄褐色土である。覆土の主体となる５層は、ローム粒とロームブロックを少量含む灰黄褐色土。底面を薄く覆う６層は、淡い斑状にロームブロックをやや多く含むにぶい黄褐色土である。７層は壁面添いの堆積で、特に北東及び南西側の壁面を厚く覆うことから、内湾する壁面の崩落土である可能性も考えられる。

［遺　物］縄文土器の細片６点が出土したが、図示し得なかった。

［時　期］本遺構を切る1027Ｄで縄文時代中期後葉の遺物が出土していることから、縄文時代中期後葉以前に位置付けられる。

1029号土坑

遺　構（第29図、第24表）

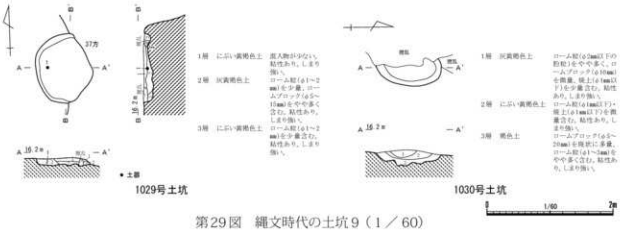
［位　置］（Ｄ－６）グリッド。

［検出状況］東側を37方に切られる。

［構　造］**平面形**：円形と推定。**断面形**：浅い皿形。底面は緩やかな起伏があり、壁面は丸く立ち上がり、やや外傾する。**規模**：長軸現況1.00ｍ／短軸現況0.90ｍ／深さ15㎝。**長軸方位**：Ｎ－3°－Ｅ。

［覆　土］３層に分層される。１層はにぶい黄褐色土、２層はロームブロックをやや多く含む灰黄褐色土である。壁際に、３層のにぶい黄褐色土が厚く三角堆積する。

［遺　物］縄文土器２点が出土した。うち１点を図示した。



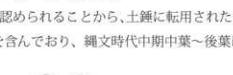
第29図　縄文時代の土坑９（１／60）

［時　　期］縄文時代中期中葉～後葉。

遺　　物（第30図、図版22－５、第19表）

［土 製 品］（第30図１、図版22－５－１、第19表）

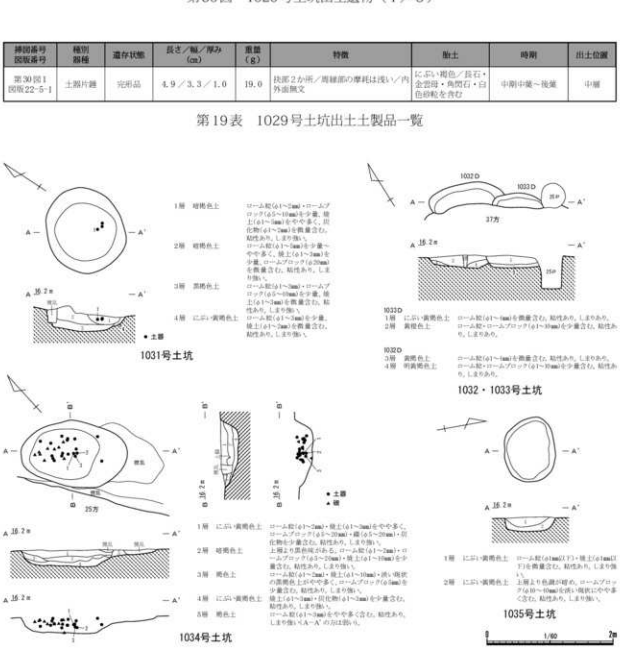
１の土器片は、抉部が２か所に認められることから、土錘に転用されたものと考えられる。母材となった土器は、無文で胎土に金雲母を含んでおり、縄文時代中期中葉～後葉に比定される。



第30図　1029号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	遺存状態	長さ／幅／厚み (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期	出土位置
第30図１ 図版22-5-1	土器片錘	完形品	4.9／3.3／1.0	19.0	抉部２か所／周縁部の摩耗は浅い／内外面無文	にぶい褐色／長石・金雲母・角閃石・白色砂粒を含む	中期中葉～後葉	中層

第19表　1029号土坑出土土製品一覧



第31図　縄文時代の土坑10（１／60）

1030号土坑

遺　　構（第29図、第24表）

［位　　置］（Ｅ－５）グリッド。

［検出状況］西側に攪乱を受ける。

［構　　造］**平面形：**楕円形と推定。**断面形：**皿形。底部中央に大きな起伏が見られるが、丸みのある立ち上がり部分と壁面は比較的凹凸が少ない。**規模：**長軸現況1.05ｍ／短軸現況0.33ｍ／深さ26㎝。**長軸方位：**Ｎ－１°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。１層は焼土を少量含む灰黄褐色土である。２層のにぶい黄褐色土も焼土を微量含む。３層は斑状にロームブロックを多く含む褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1031号土坑

遺　　構（第31図、第24表）

［位　　置］（Ｄ・Ｅ－４）グリッド。

［検出状況］上部に大きく攪乱を受ける。

［構　　造］**平面形：**楕円形。**断面形：**皿形。底面はほぼ平坦で、南壁際にやや高まりがある。壁面は屈曲して立ち上がり、直線的に外傾する。**規模：**長軸1.34ｍ／短軸1.23ｍ／深さ40㎝。**長軸方位：**Ｎ－22°－Ｅ。

［覆　　土］４層に分層される。１層は少量のローム粒とロームブロックのほか、特徴的に焼土をやや多く含む暗褐色土。２層はローム粒と焼土を少量含む暗褐色土。３層はローム粒とロームブロックを少量含む黒褐色土。４層は南壁際に三角堆積する混入物の少ないにぶい黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器４点、黒曜石の剥片２点が出土した。うち１点を図示した。

［時　　期］縄文時代中期中葉（勝坂３式期）。

遺　　物（第32図、図版22－６、第20表）

［土　　器］（第32図１、図版22－６－１、第20表）

１は深鉢形土器の口縁部片である。口縁部の無文帯下を横位沈線で区画し、円形の隆帯が貼り付けられる。隆帯の内周には沈線を伴い、外側面には刻みが施される。勝坂３式に比定される。

第32図　1031号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第32図1 図版22-6-1	深鉢	口縁部 破片	高［6.0］	僅かに外傾する	口縁部無文帯下に横位沈線を施文し、円形の隆帯を貼付け／隆帯内側に沈線をめぐらせ、外側面に連続刻みを施す	に.ぶい黄褐色／石英・角閃石・白色砂粒・黒色粒子を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層

第20表　1031号土坑出土土器一覧

1032号土坑

遺　　構（第31図、第24表）

［位　　置］（Ｂ－５）グリッド。

［検出状況］1033Ｄ、37方に切られる。

［構　　造］**平面形：**楕円形と推定。**断面形：**皿形。底面は平坦で、壁面は屈曲して立ち上がり外傾する。**規模：**長軸現況1.18ｍ／短軸0.31ｍ／深さ22㎝。**長軸方位：**Ｎ－69°－Ｗ。

［覆　　土］２層（３・４層）に分層される。覆土の主体となる上層の３層は黄褐色土。立ち上がり際に三角堆積する下層の４層はローム粒とロームブロックを含む明黄褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1033号土坑

遺　　構（第31図、第24表）

［位　　置］（Ｂ－５）グリッド。

［検出状況］1032Ｄを切り、南西側を37方、25Ｐに切られる。

［構　　造］**平面形：**不明。**断面形：**皿形。底面は平坦で、壁面は丸く立ち上がり外傾する。**規模：**長軸現況0.83ｍ／短軸現況0.18ｍ／深さ20㎝。**長軸方位：**不明。

［覆　　土］２層に分層される。１層はにぶい黄褐色土、２層は黄褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1034号土坑

遺　　構（第31図、第24表）

［位　　置］（Ｇ－２）グリッド。

［検出状況］南東側に浅い攪乱を受けている。

［構　　造］**平面形：**楕円形。**断面形：**皿形。底面はほぼ平坦である。壁面は大きな丸みをもって立ち上がり、外傾する。**規模：**長軸1.68ｍ／短軸1.06ｍ／深さ29㎝。**長軸方位：**Ｎ－27°－Ｗ。

［覆　　土］５層に分層される。１層はローム粒のほか特徴的に焼土粒をやや多く含むにぶい黄褐色土。２層は上層より黒色味の強い暗褐色土。北西寄りに堆積する３層は、10㎜大の焼土をやや多く含む褐色土。底部を覆う４層は焼土と炭化物を少量含むにぶい黄褐色土。大きく外傾する南東壁付近にみられる５層は、ローム粒をやや多く含む粘性のやや弱い褐色土である。

［遺　　物］縄文土器32点が出土した。うち３点を図示した。他に礫９点、黒曜石の剥片２点を取り上げた。まばらな状態で、縄文時代中期中葉～後葉の土器片と共に３～13㎝大の円礫が目立った。被熱により欠損した礫を含む。

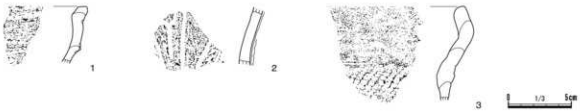
［時　　期］縄文時代中期中葉～後葉（阿玉台Ⅰ～加曽利ＥⅢ式期）。

遺　　物（第33図、図版23－１、第21表）

［土　　器］（第33図１～３、図版23－１－１～３、第21表）

１～３はいずれも深鉢形土器片である。１は内湾する口縁部片で、口唇部が短く外反する。横位隆帯

による区画内外に角押文が沿い、胎土には金雲母を含む。阿玉台Ⅰ～Ⅱ式に比定される。２は胴部片で、沈線による三叉文と、両脇に沈線を伴い表面に刻みが付く隆帯が施される。勝坂３式に比定される。３は口縁から胴部にかけての破片で、断面がキャリパー形を呈する。口縁部は無文で、胴部には単節縄文が施される。加曽利ＥⅢ式に比定される。



第33図　1034号土坑出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第33図1 図版23-1-1	深鉢	口縁部 小破片	高［4.5］	□辨部は外反し、□縁部は内湾する	□辨部と横位隆帯による区画内外に横位の角押文を沿わせる	褐色／金雲母・チャート・石英・白色砂粒を含む	中期中葉 （阿玉台Ⅰ～Ⅱ式）	中層
第33図2 図版23-1-2	深鉢	胴部 小破片	厚1.1	外傾する	沈線による三叉文と刻み付き隆帯の両端に縦位の沈線を施文	褐灰色／チャート・白色砂粒・黒色粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	中層
第33図3 図版23-1-3	深鉢	口縁～胴部 小破片	高［7.4］	□縁部は中位で内屈し、キャリパー形を呈する	□縁部無文／胴部は縦位のＲＬ単節縄文	にぶい褐色／石英・白色砂粒・赤褐色粒・黒色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	中層

第21表　1034号土坑出土土器一覧

1035号土坑

遺　構（第31図、第24表）

［位　置］（Ｇ－３）グリッド。

［検出状況］上部は東西に撹乱を受けている。

［構　造］**平面形：**楕円形。**断面形：**逆台形。底面は平坦である。壁面は南壁がほぼ垂直で、北壁が外傾する。**規模：**長軸1.04ｍ／短軸0.83ｍ／深さ23㎝。**長軸方位：**Ｎ－69°－Ｗ。

［覆　土］２層に分層される。１層はにぶい黄褐色土で焼土を微量含む。２層は上層より暗色で淡い斑状にロームブロックをやや多く含む。

［遺　物］出土しなかった。

［時　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1036号土坑

遺　構（第34図、第24表）

［位　置］（Ｇ－３・４）グリッド。

［検出状況］南東側に撹乱を受けている。

［構　造］**平面形：**楕円形と推定。**断面形：**逆台形。底部はほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾する。**規模：**長軸現況0.84ｍ／短軸0.79ｍ／深さ31㎝。**長軸方位：**Ｎ－73°－Ｗ。

［覆　土］４層に分層される。いずれもローム質土を主体とする。１層は土器の外側にみられる黄褐色土で混入物が少ない。２層は土器の内側に堆積するローム粒をやや多く含む褐色土、３層はローム粒

とロームブロックを少量含むだけのにぶい黄褐色土であることから、先行して１層が土器の外側を覆い、後に２・３層が土器内に堆積した可能性がある。４層は土器を支える底面直上のにぶい黄褐色土で、９㎝以上の厚みがある。

［遺　　物］本土坑の西寄りで口径43.5㎝を測る深鉢形土器（１）が逆位で出土した。遺構検出面に近い土器の胴部下半は削平により失われている。また、植物根が器壁沿いに入り込み、とくに南部分は劣化が著しい。下向きの口縁は水平ではなく北東側がやや浮いて傾いている。埋設された深鉢形土器は、断面キャリパー形で、隆帯による区画文化した渦巻文を特徴とする。また、深鉢形土器の外面に接して打製石斧（３）が出土した。出土位置は４層の堆積（もしくは充填）後に相当する。他に埋設土器とは別個体である10㎝大の深鉢形土器の口縁部破片（２）が出土した。

［時　　期］縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期）。

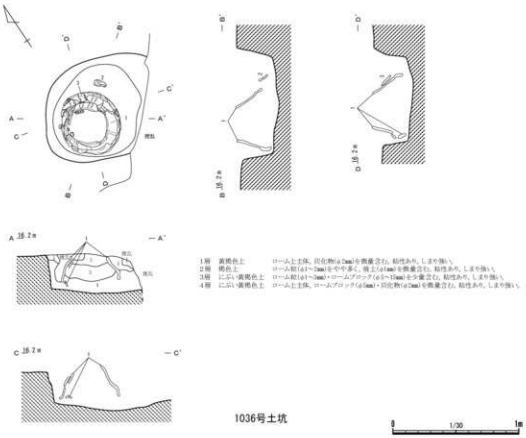
遺　　物（第35図、図版23－２、第22表）

［土　　器］（第35図１・２、図版23－２－１・２、第22・23表）

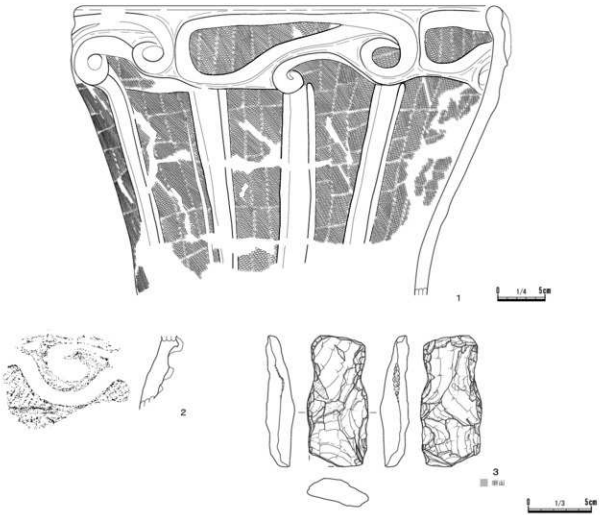
１が埋設されていた深鉢形土器である。隆帯による渦巻文は区画文化しており、区画内は単節縄文が充填される。胴部には磨消縄文が垂下する。加曽利ＥⅢ式に比定される。２は深鉢形土器の口縁部片である。単節縄文を地文とし、隆帯と沈線による渦巻文が見られる。加曽利ＥⅡ～Ⅲ式に比定される。

［石　　器］（第35図３、図版23－２－３、第23表）

３は１の外面に接して出土した砂岩製の打製石斧である。刃部が欠損し、側縁の稜上には敲打整形痕が見られる。



第34図　縄文時代の土坑11（１／30）



第35図　1036号土坑出土遺物（１／４・１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第35図１ 図版23-2-1	深鉢	口縁部～胴部 50％	口　43.5 高〔30.6〕	口縁部は僅かに内湾する／口縁部と胴部の間に弱い稜を有する／胴下部は括れ、以下は欠失	地文は縦位のＲＬ単節縄文／口縁部文様帯は隆帯と沈線により渦巻文と区画文を構成／口縁部と胴部の間で地文の施文範囲を切禁え、文様帯の端を意識したか／胴部は平行沈線を垂下し、沈線文間を擦消し	黒褐色／長石・石英・チャート・白色砂粒を含む	中期後葉 （加曽利Ｅ皿式）	南西寄り中層
第35図２ 図版23-2-2	深鉢	口縁部 小破片	厚1.8	外縁する	地文ＬＲ単節縄文／隆帯と沈線による区画文内に擬手文施文	に赤い褐色／角閃石・白色砂粒・黒色粒を含む	中期後葉 （加曽利Ｅⅱ～皿式）	下層

第22表　1036号土坑出土土器一覧

挿図番号 図版番号	種別 器種	石材	長さ （cm）	幅 （cm）	厚さ （cm）	重量 （g）	特徴	出土位置
第35図３ 図版23-2-3	打製石斧	砂岩	〔10.5〕	4.9	2.2	133.6	刃部欠損／正面に自然面と磨面を僅かに残す／側縁に細かな調整剥離を施し、極上に敲打整形痕がみられる	中層

第23表　1036号土坑出土石器一覧

1037号土坑

遺　構（第36図、第24表）

［位　　置］（Ｇ－３・４）グリッド。

［検出状況］単独。

［構　　造］**平面形：**楕円形。**断面形：**椀形。底部に２つの窪みが見られ、２つの掘り込みが重複している可能性がある。**規模：**長軸0.66ｍ／短軸0.56ｍ／深さ23㎝。**長軸方位：**Ｎ－67°－Ｅ。

［覆　　土］３層に分層される。１・２層はピット状の断面をつくる灰黄褐色土、下層の３層はにぶい黄褐色土で、１・３層に炭化物を少量含む。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1038号土坑

遺　　構（第36図、第24表）

［位　　置］（Ｅ－３・４）グリッド。

［検出状況］縦横にトレンチャーによる攪乱を受けており、西壁は壊されている。

［構　　造］**平面形：**楕円形。**断面形：**浅い皿形。底面は広く平坦である。壁面は丸く立ち上がり外傾する。**規模：**長軸1.68ｍ／短軸1.33ｍ／深さ19㎝。**長軸方位：**Ｎ－13°－Ｗ。

［覆　　土］２層に分層される。いずれもにぶい黄褐色土で、１層はローム粒をやや多く含み、２層は淡い斑状にロームブロックをやや多く含む。

［遺　　物］土器の細片７点が混入する。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1039号土坑

遺　　構（第36図、第24表）

［位　　置］（Ｇ－４）グリッド。

［検出状況］南東側に攪乱を受ける。

［構　　造］**平面形：**楕円形。**断面形：**皿形。底面はやや丸底である。壁面は底面から連続して丸く立ち上がり、外傾する。**規模：**長軸現況1.13ｍ／短軸0.86ｍ／深さ26㎝。**長軸方位：**Ｎ－72°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。主体となる１層は暗褐色土、底面を覆う２層は淡い斑状にロームブロックをやや多く含む褐色土、３層は淡い斑状に灰黄褐色土を少量含むにぶい黄褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1040号土坑

遺　　構（第36図、第24表）

［位　　置］（Ｆ・Ｇ－２）グリッド。

［検出状況］北東部を38方に切られる。

［構　　造］**平面形：**楕円形。**断面形：**皿形。底面はほぼ平坦で緩やかな起伏がある。壁面は丸く立ち上がり、外傾する。**規模：**長軸1.38ｍ／短軸1.23ｍ／深さ31㎝。**長軸方位：**Ｎ－40°－Ｗ。

［覆　　土］２層に分層される。１層はロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土。２層はロームブロックとローム粒を多く含むにぶい黄褐色土である。

［遺　　物］弥生土器１点が混入する。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。

1041号土坑

遺　　構（第36図、第24表）

［位　　置］（Ｆ－３）グリッド。

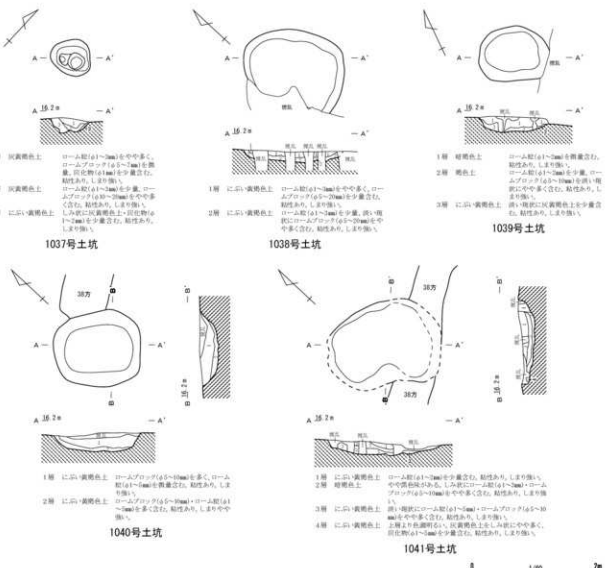
［検出状況］南東上部を38方に切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**断面形**：浅い皿形。底面はやや丸底で、壁面は丸く立ち上がり、大きく外傾する。**規模**：長軸1.87ｍ／短軸1.40ｍ／深さ24㎝。**長軸方位**：Ｎ－59°－Ｗ。

［覆　　土］４層に分層される。１層はにぶい黄褐色土。２層は黒色味のある暗褐色土。底面を覆う３層は淡い斑状にローム粒・ブロックをやや多く含むにぶい黄褐色土。立ち上がり際の４層は淡い斑状に灰黄褐色土を含むにぶい黄褐色土である。

［遺　　物］縄文土器１点が出土したが、図示し得なかった。

［時　　期］覆土の観察から縄文時代と考えられる。



第36図　縄文時代の土坑12（１／60）

遺構名	位置(グリッド)	平面形	規模(m)			主軸方位	覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ				
1001D	E-2	楕円形	(1.34)	1.24	0.30	N-50°-E	4層	縄文土器(加曽利E式)	縄文中期後葉
1002D	F-2	楕円形	0.88	0.77	0.12	N-37°-W	3層	遺物無し	縄文
1003D	F-1	楕円形	(1.10)	(1.21)	0.34	N-25°-W	2層／1Pより古	遺物無し	縄文
1005D	A-5	楕円形	1.05	0.84	0.24	N-76°-W	5層／加曽利E III式期の深鉢形土器が逆位で出土	縄文土器(加曽利E式)	縄文中期後葉
1006D	D-6	不整円形	0.78	0.65	0.15	N-59°-W	3層	縄文土器(阿玉台式)	縄文中期中葉
1007D	E-6	推定円形	1.10	(0.51)	0.34	—	2層	遺物無し	縄文
1008D	E-6	推定楕円形	1.81	(1.23)	0.41	N-48°-E	5層	縄文土器(勝坂式・加曽利E式)	縄文中期中～後葉
1009D	A-5	推定楕円形	(0.59)	0.92	0.28	N-65°-W	2層	縄文土器	縄文
1010D	A-5	推定円形	(0.59)	0.91	0.26	N-68°-W	2層	縄文土器(加曽利E式)	縄文中期後葉
1011D	A・B-5	楕円形	1.01	0.93	0.57	N-88°-E	3層／加曽利E III式期の深鉢形土器が横位の潰れた状態で出土，1012Dより新	縄文土器(加曽利E式)	縄文中期後葉
1012D	A・B-5	楕円形	1.31	0.87	0.41	N-5°-W	2層／1011Dより古	縄文土器	縄文中期中～後葉
1013D	A・B-5	不明	(1.29)	(0.61)	0.12	N-32°-W	3層	遺物無し	縄文
1014D	B-4・5	楕円形	1.45	1.02	0.28	N-71°-W	2層／1015Dより新	縄文土器	縄文
1015D	B-4	推定楕円形	(1.61)	(1.33)	0.18	N-77°-E	2層／1014D・10Pより古	縄文土器	縄文
1016D	B・C-4	楕円形	(1.24)	1.07	0.16	N-38°-W	3層	縄文土器(阿玉台式・勝坂式)	縄文中期中～後葉
1017D	B-5, C-4・5	推定円形	(1.80)	(1.22)	0.15	—	単層／礫を比較的多く伴う，2・6・12・13Pより古	縄文土器(勝坂式・加曽利E式)	縄文中期中～後葉
1018D	C-4・5	楕円形	(1.49)	1.31	0.19	N-39°-E	2層	縄文土器	縄文
1019D	F-6	推定長方形	(1.70)	0.80	0.41	N-59°-W	4層	遺物無し	縄文
1020D	C・D-4	楕円形	(1.03)	1.00	0.33	N-35°-W	2層／37方より古	縄文土器(阿玉台式)	縄文中期中葉
1021D	C・D-4	円形	1.20	0.98	0.38	N-90°-E	4層	縄文土器(加曽利E式)	縄文中期後葉
1022D	C-4, D-4・5	楕円形	2.03	1.01	0.23	N-58°-W	4層／1023Dより古	縄文土器(勝坂式)	縄文中期中～後葉
1023D	C・D-4・5	長楕円形	2.23	1.34	0.33	N-39°-W	3層／1022Dより新	縄文土器(阿玉台式・勝坂式)	縄文中期中葉
1024D	C-5	推定楕円形	(1.61)	(1.05)	0.34	N-19°-W	3層／1004D・37方より古	縄文土器	縄文中期中葉以降
1025D	C-5	楕円形	(1.10)	0.66	0.11	N-3°-E	3層／1026Dより新，1004D・37方より古	遺物無し	縄文
1026D	C-5	推定楕円形	(1.80)	(0.82)	0.23	N-25°-W	6層／1004D・1025D・37方より古	縄文土器	縄文
1027D	D-5	推定楕円形	(0.86)	1.17	0.20	N-41°-W	3層／1028Dより新	縄文土器(連弧文系)	縄文中期後葉
1028D	D-5	楕円形	1.80	1.58	0.46	N-47°-W	4層／1027Dより古	縄文土器	縄文
1029D	D-6	推定円形	(1.00)	(0.90)	0.15	N-3°-E	3層／37方より古	縄文土器	縄文中期中～後葉
1030D	E-5	推定楕円形	(1.05)	(0.33)	0.26	N-1°-W	3層	遺物無し	縄文
1031D	D・E-4	楕円形	1.34	1.23	0.40	N-22°-E	4層／焼土を伴う	縄文土器(勝坂式)	縄文中期中葉
1032D	B-5	推定楕円形	(1.18)	0.31	0.22	N-69°-W	2層／1033D・37方より古	遺物無し	縄文
1033D	B-5	不明	(0.83)	(0.18)	0.20	—	2層／1032Dより新，37方・2SPより古	遺物無し	縄文
1034D	G-2	楕円形	1.68	1.06	0.29	N-27°-W	5層／焼土を伴う	縄文土器(勝坂式・加曽利E式)	縄文中期中～後葉
1035D	G-3	楕円形	1.04	0.83	0.23	N-69°-W	2層	遺物無し	縄文
1036D	G-3・4	推定楕円形	(0.84)	0.79	0.31	N-73°-W	4層／加曽利E III式期の深鉢形土器が逆位で出土	縄文土器(加曽利E式)	縄文中期後葉
1037D	G-3・4	楕円形	0.66	0.56	0.23	N-67°-E	3層	遺物無し	縄文
1038D	E-3・4	楕円形	1.68	1.33	0.19	N-13°-W	2層	遺物無し	縄文
1039D	G-4	楕円形	(1.13)	0.86	0.26	N-72°-W	3層	遺物無し	縄文
1040D	F・G-2	楕円形	1.38	1.23	0.31	N-40°-W	2層／38方より古	遺物無し	縄文
1041D	F-3	楕円形	1.87	1.40	0.24	N-59°-W	4層／38方より古	縄文土器	縄文

第24表　縄文時代の土坑一覧

(3)ピット

覆土の観察から縄文時代に帰属すると判断されるピットは33Pと36Pの２本である。

33号ピット

遺　　構（第37図）

［位　　置］（Ｄ－４）グリッド。

［検出状況］単独。

［構　　造］**平面形**：不整楕円形。**断面形**：片段形。**規模**：長軸0.43ｍ／短軸0.32ｍ／深さ29㎝。

［覆　　土］２層に分層される。いずれもしまりの強いにぶい黄褐色土である。下位の２層は１層より多くローム土・ローム粒を含む。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土はしまりが強く、覆土の観察から縄文時代と考えられる。

36号ピット

遺　　構（第37図）

［位　　置］（Ｄ－５）グリッド。

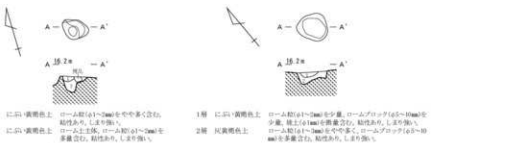
［検出状況］単独。

［構　　造］**平面形**：不整円形。**断面形**：片段形。**規模**：径0.46ｍ／深さ22㎝。

［覆　　土］２層に分層される。いずれもしまりが強い。１層はにぶい黄褐色土、２層は暗色の灰黄褐色土にローム粒とロームブロックを多く含む灰黄褐色土である。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土はしまりが強く、覆土の観察から縄文時代と考えられる。



第37図　縄文時代のピット（１／60）

第２節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

（１）概要

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、住居跡１軒（671Ｙ）、方形周溝墓３基（25・37・38方）が検出された。671Ｙは調査区の南東壁に重なるため部分的な調査に止まったが、覆土から炭化材が多く検出された点が特筆される。３基の方形周溝墓は、台地縁辺の等高線に沿う北東―南西方向に並ぶ形で確認された。主体部は確認されなかったが、いずれもほぼ全体の形状を確認できた事例となる。うち、25方は、南西側に隣接する区画整理第70地点（佐々木ほか　2009）で確認されていた遺構であることから、既往調査分と合わせて掲載する。

（２）住居跡

671号住居跡

遺　　構（第38 ～ 40図）

［位　　置］（E・F－6・7）グリッド。

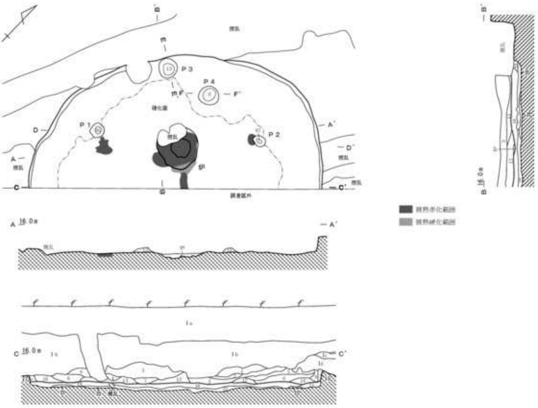
［検出状況］遺構の南東部は調査区外に続く。西壁付近は貼床上面と同レベルまで攪乱を受けている。床面上では炭化材が多く検出された。

［構　　造］**平面形**：北東の上端がやや直線的であることから、楕円形になると考えられる。**断面形**：壁面は、ほぼ平坦な床面から内角100°で立ち上がり、高さ約18㎝で遺存する。**規模**：主軸現況2.04ｍ／短軸4.67ｍ／遺構確認面から床面までの深さ19㎝／調査区壁面で確認される覆土最上部から掘り方底面までの深さ0.48ｍ。**主軸方位**：Ｎ－40°－Ｗ。**壁溝**：調査範囲内では確認されない。**床面**：貼床の厚みは約10 ～ 15㎝。壁際から内側６～ 24㎝の掘り方は中央部よりも若干浅く、特に北側隅の壁際では掘り方面を床面としている。**硬化面**：壁面付近を除く柱穴の内側全域に確認される。**炉**：長軸0.67ｍ／短軸0.66ｍ／深さ７㎝。炉の底面は赤化しており、周辺の貼床土は被熱により硬化している。なお、炉の南東側の床面にも赤化が認められる。**柱穴**：主柱穴はＰ１・２の２本が確認された。柱穴の掘り方全体は一連の貼床構築土で覆われており、床面上で確認できるのは黒褐色土を覆土とする柱痕跡（はしらこんせき）のみである。柱痕跡の径はＰ１が約20㎝、Ｐ２が約17㎝である。Ｐ１の南東側、Ｐ２の西側の床面には小規模に被熱した赤化面が認められた。柱穴の掘り方は、床面上からではなく、住居の掘り方底面から掘り込まれており、その規模はＰ１が長軸0.83ｍ／短軸0.62ｍ／深さ83㎝、Ｐ２が長軸0.83ｍ／短軸0.74ｍ／深さ74㎝。Ｐ２の底面には硬化した柱当りが認められた。柱痕跡を含む柱穴の床面からの深さはＰ１が95㎝、Ｐ２が87㎝を測る。Ｐ１・２の柱痕と掘り方の間にはローム質のにぶい黄褐色土が充填される。充填土の最上層には厚さ約10㎝の黒褐色土が特徴的に認められる。

［覆　　土］覆土は17層、貼床構築土は７層に分層される。１～２層はローム粒を含む黒褐色土。その下の３層はローム粒を多く含む灰黄褐色土である。その下４層の灰黄褐色土とローム粒をやや多く含む黒褐色土の５層は外周からの流れ込みと考えられる薄い三角堆積で、焼土・炭化物を伴わない。その下の６～８層は焼土と炭化物の混入が認められる黒褐色土である。９層は壁面際に三角堆積する灰黄褐色土でローム粒をやや多く含む。10・11層は住居縁辺の床面に接する黒褐色土で炭化物をやや多く含む。12層は住居跡の中央付近で山なりに堆積する黒褐色土で、炭化物と焼土をやや多く含む。Ａ－Ａ’に図示した13層は焼土を多く含むにぶい赤褐色土層で、住居跡の中程を囲うように島状で点在する。一部の炭化材は13層下での検出である。14層は床面に接する黒色味の強い黒褐色土であるが、焼土が少なく炭化材も残存しない。15 ～ 17層は壁面際の堆積でローム粒を多く含む。18 ～ 24層は貼床構築土である。黒褐色土の薄層を所々に挟みながらにぶい黄褐色土を主体とする。

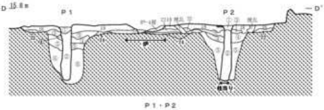
炉の深さは約７㎝と浅く、覆土は２層に分層される。１層は焼土と炭化物をやや多く含む黒褐色土、２層は黒褐色土を基調として多量の焼土を含む暗赤褐色土である。３～６層は赤色化もしくは黄色化した貼床構築土の被熱範囲とその度合いを示すものである。

［遺　　物］弥生土器はいずれも破片で、22点が出土した。うち、２点を図示した。折返し口縁でヘラ磨き調整された15㎝大の壺形土器の破片（１）は、炉の南東で出土した。この他、ハケ目調整された甕形土器の胴部破片（２）が出土した。なお、縄文土器79点、石製品１点が混入する。貼床構築土からは加曽利ＥⅣ式の縄文土器片が出土している。



A－A'～D－D'

1a層	暗褐色土	上部15cm程は近年の耕作土。ロームブロックを多量含む。粘性あり。しまり強い。
1b層	黒褐色土	ロームブロック(φ5～10mm)を微量。ローム粒(φ1～3mm)・焼土(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
1c層	黒褐色土	黒色味が強い。しみ状に灰黄褐色土・ローム粒(φ1～2mm)をやや多く。ロームブロック(φ5～15mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
1d層	黒褐色土	ローム粒(φ1～5mm)・ロームブロック(φ5～100mm)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。
1e層	灰黄褐色土	黒褐色土を基調とし、ローム粒(φ1～5mm)を多量。ロームブロック(φ5～40mm)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。
1 層	黒褐色土	色調明るめ。ローム粒(φ1～2mm)をやや多く。焼土(φ3mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
2 層	黒褐色土	色調明るめ。ローム粒(φ1～3mm)を少量。ロームブロック(φ30mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
3 層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～2mm)を多量。ロームブロック(φ5～25mm)を少量含む。下部に焼土(φ1～2mm)を少量。炭化物(φ1～5mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
4 層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
5 層	黒褐色土	色調明るめ。ローム粒(φ1～2mm)をやや多く。ロームブロック(φ15mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
6 層	黒褐色土	黒色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)・焼土(φ1～3mm)をやや多く。炭化物(φ1～2mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
7 層	黒褐色土	黒色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)・焼土(φ1～3mm)をやや多く。炭化物(φ1～2mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
8 層	黒褐色土	色調明るめ。ローム粒(φ1～2mm)をやや多く。焼土(φ1～3mm)・炭化物(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
9 層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～2mm)をやや多く。ロームブロック(φ10～25mm)を少量。炭化物(φ1～3mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
10層	黒褐色土	黒色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)・炭化物(φ20～30mm)をやや多く。焼土(φ1～5mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
11層	黒褐色土	ローム粒(φ1～3mm)を多量。ロームブロック(φ5～15mm)少量。炭化物(φ5～10mm)をやや多く。焼土(φ1～5mm)を微量含む。特徴的に焼土の混入が少ない。粘性あり。しまり強い。
12層	黒褐色土	ローム粒(φ1～2mm)を少量。焼土(φ1～5mm)をやや多く。炭化物(φ1～5mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
13層	にぶい赤褐色土	焼土(φ5～25mm)を多量。炭化物(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。
14層	黒褐色土	黒色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)を少量。焼土(φ1～3mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
15層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3mm)を多量。焼土(φ1～3mm)・炭化物(φ1～2mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
16層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～2mm)をやや多く。ロームブロック(φ5～30mm)・炭化物(φ1～3mm)を少量。焼土(φ1～3mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
17層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3mm)を多量。ロームブロック(φ3mm)・炭化物(φ1～3mm)を少量。焼土(φ1～2mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
18層	にぶい黄褐色土	上面、黒褐色土の薄層を伴い硬くしまる。ローム粒(φ1～5mm)・ロームブロック(φ5～40mm)・焼土(φ1～3mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。貼床。
19層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～5mm)を多量。ロームブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。貼床。
20層	黒褐色土	黒色味が強い。ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～30mm)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。貼床。
21層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～5mm)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。貼床。
22層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3mm)・斑状にロームブロックが多量。焼土(φ1～3mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。貼床。
23層	黒褐色土	黒褐色土を基調とし、ロームブロック(φ5～30mm)を多量。ローム粒(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。貼床。
24層	にぶい黄褐色土	ローム土主体。焼土(φ1～2mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。貼床。



P 1・P 2

P 3　　P 4

D－D' P 1

①層	暗褐色土	ロームブロック(φ15mm)を微量。ローム粒(φ1～2mm)・焼土(φ1～5mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
②層	黒褐色土	色調明るめ。ローム粒(φ1～2mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり(強くない)。
③層	黒褐色土	ローム粒(φ1～2mm)を多量。ロームブロック(φ5～20mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
④層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3mm)をやや多く。ロームブロック(φ10mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
⑤層	にぶい黄褐色土	上層より暗色。ローム粒(φ1～2mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
⑥層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3mm)を多量含む。粘性あり。しまり上層より弱い。

D－D' P 2

①層	暗褐色土	ローム粒(φ1～5mm)・ロームブロック(φ15mm)・焼土(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
②層	黒褐色土	色調明るめ。ローム粒(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
③層	黒褐色土	ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～30mm)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。
④層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～20mm)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。
⑤層	にぶい黄褐色土	上層より暗色。ローム粒(φ1～2mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。

E－E' P 3

1 層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～2mm)をしみ状にやや多く。ロームブロック(φ5～10mm)をしみ状に少量。炭化物(φ1～7mm)・焼土(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
2 層	黒褐色土	ローム粒(φ1～2mm)をやや多く。ロームブロック(φ5～10mm)をしみ状に多量。焼土(φ2mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。

F－F' P 4

1 層	黒褐色土	ローム粒(φ1～3mm)をやや多く。ロームブロック(φ5～10mm)を少量。焼土(φ1～3mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
2 層	灰黄褐色土	黒褐色土をしみ状にやや多く。焼土(φ1～2mm)を微量含む。粘性あり。しまり強い。

0　1/60　2m

第38図　671号住居跡１（１／60）

床面上で検出された炭化材は比較的遺存状態が良く、最大のものは径5.5㎝、長さ52㎝の丸材である。

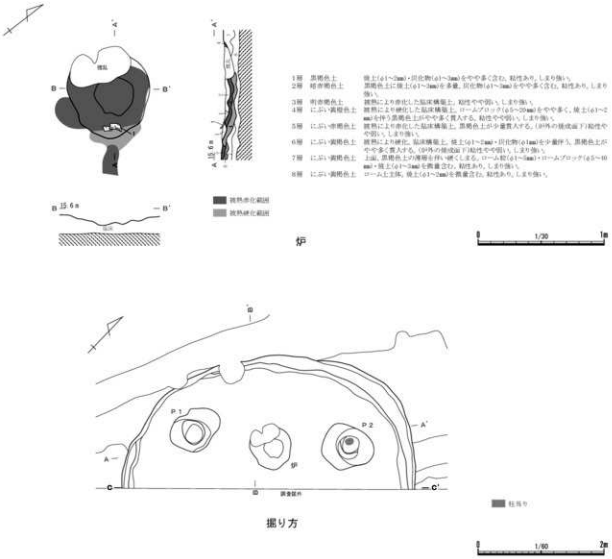
出土した炭化材56点について、年代測定と樹種同定を目的として自然科学分析を実施した（第４章参照）。放射性炭素年代測定の結果、試料No.6が123-226 cal AD（95.17％）および227-228 cal AD（0.28％）、試料No.28が211-255 cal AD（59.04％）および285-325 cal AD（36.41％）、試料No.38が129-238 cal AD（95.45％）の暦年代範囲を示した。また、樹種同定ではクヌギ節44点、コナラ節５点、クリ４点、ハンノキ亜属２点が確認された。

［時　　期］弥生時代後期後葉～末葉。

遺　　物（第41図、図版24－１、第25表）

［土　　器］（第41図１・２、図版24－１－１・２、第25表）

１は広口の壺形土器で、外反する口縁部の端部は折返し成形である。内面はヘラ磨き調整、外面の頸部以下は、ヘラナデ後のヘラ磨き調整が認められる。２は甕形土器の胴部片である。内面はヘラナデ調整、外面にはハケ目調整が見られる。



第39図　671号住居跡２（１／60・１／30）

第40図　671号住居跡遺物出土状態（１／60）

第41図　671号住居跡出土遺物（１／４・１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	出土位置
第41図1 図版24-1-1	壺	口縁～胴部 破片	口［17.0］ 高［8.5］	口縁部は折返し／緩やかに外反する	内面：横位ヘラ磨き調整／外面：折返し部横位ナデ，頸部から胴部は縦位ヘラナデ調整後横位ヘラ磨き調整	にぶい橙色／赤褐色粒・黒色粒を含む	炉内
第41図2 図版24-1-2	甕	胴部 破片	厚0.7	強く外傾する	内面：ヘラナデ調整／外面：目の細かなハケ目調整／内外面保持	にぶい褐色／石英・白色砂粒・黒色粒を含む	中層

第25表　671号住居跡出土土器一覧

（３）方形周溝墓

25号方形周溝墓

遺　　構（第43図）

［位　　置］（Ｇ－１・２、Ｈ－２）グリッド。

［検出状況］25方は、平成16年調査の区画整理第70地点で確認されていたが、今回の調査で北東隅部が確認されたことで全容が明らかとなった。今回の調査箇所は、上部全体に耕作による攪乱を受けている。

［構　　造］平面形：区画整理第70地点の調査で本遺構は、南西側に位置する26方の拡張部と考えられており、周溝は南西側に掘り込みを持たないコの字形に配される。溝に囲まれる方台部は北東―南西

軸が狭い長方形を呈する。**断面形**：溝の底面は平坦である。壁面は丸みのある立ち上りで外傾する。溝は隅角部付近で浅くなる。**規模**：今回検出された規模は、長さ5.62ｍ、幅1.56ｍの範囲に止まる。北西溝は中心長1.38ｍまでの確認で、上幅0.59～0.73ｍ、下幅最大0.37ｍ、深さ55㎝を測る。屈曲して南東に伸びる北東溝は主軸方位をＮ－34°－Ｗにとり、中心長約3.7ｍまでの確認で、上幅0.65～0.89ｍ、最大下幅0.55ｍ、深さ72㎝を測る。区画整理第70地点の調査成果を合わせると、25方全体の規模は、長軸8.15ｍ、短軸5.90ｍ。方台部は長軸6.15ｍ、短軸3.65ｍとなる。**埋葬施設**：確認されていない。

［覆　　土］各土層観察面で、概ね５層に分層される。最上層はローム粒を少量含む黒褐色土、その下にローム粒をやや多く含む黒褐色土、その下にローム粒を多く含むにぶい黄褐色土もしくは褐色土が厚く堆積し、その下にローム粒やロームブロックを多く含む黒褐色土が壁面際に三角堆積をみせる。最下層はロームブロックを多く伴うにぶい黄褐色土が堆積する。

［遺　　物］弥生土器の破片が10点出土した。うち２点を図示した。縄文土器は20点が混入する。なお、区画整理第70地点の調査では、棒状浮文を伴う複合口縁の壺形土器や、鍔状口縁高坏形土器（完形）等が出土している。

［時　　期］弥生時代後期後葉～末葉。

遺　　物（第42・44図、図版24－２、第26表）

［土　　器］（第42図１・２、図版24－２－１・２、第26表）

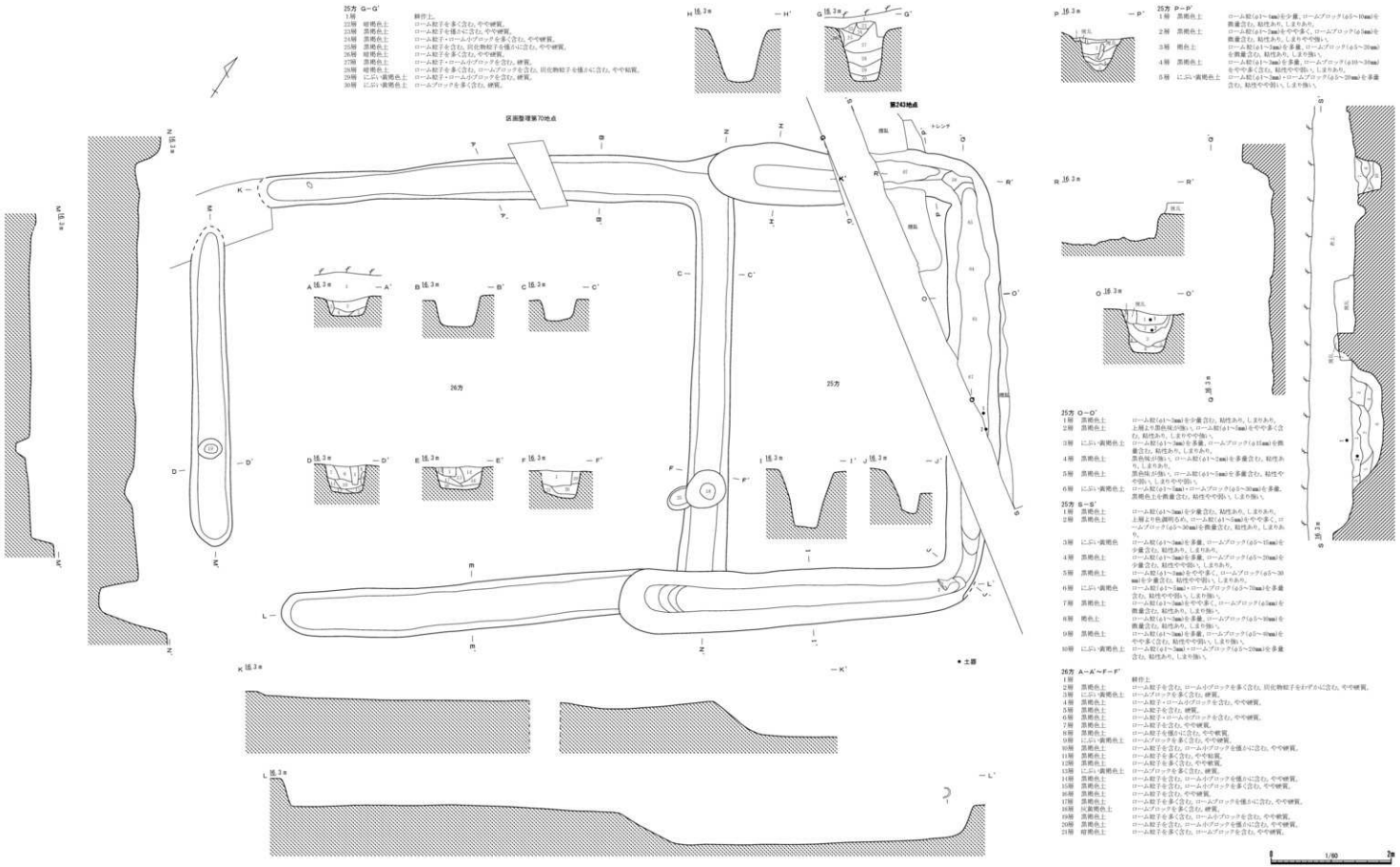
１～２はいずれも甕形土器である。１は頸部から肩部にかけての破片で、丸みがある。内面にヘラナデ調整、外面の頸部に横ナデ、肩部に縦ナデの調整が見られる。一部に二次的な煤が残る。２は胴部下半の破片で、内面に横位ヘラナデ調整、外面には斜位のヘラナデ調整と、その後のナデ調整が一部に見られる。内面には煤が付着している。

第44図に、区画整理第70地点の事前調査の際に25方から出土した遺物を再掲載した。１は方形周溝墓の東コーナー下層から出土した、鍔状口縁の高坏形土器である。坏部内外面共に丁寧なヘラ磨きと赤彩が施される。２は壺形土器の複合口縁部破片で、外面に単節縄文と棒状浮文が施される。口縁部下端には刻みが見られる。３・４はいずれも甕形土器で、３は口唇部外面に刻みが施された口縁部片である。内外面共にヘラナデ調整されるが、ハケ目が残る。４は体部破片で、内外面共にヘラナデ調整されるが外面にハケ目が残る。

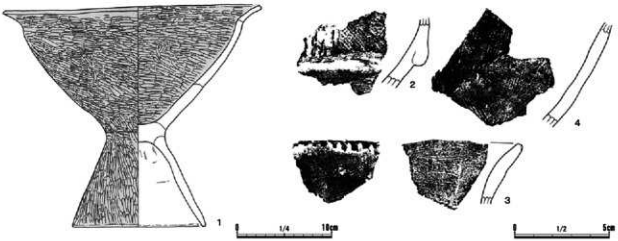
第42図　25号方形周溝墓出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	出土位置
第42図1 図版24-2-1	甕	頸～肩部 小破片	厚0.7	頸部はやや立ち上がり、肩部は丸みをもつ	内面：ヘラナデ調整／外面：頸部は横位ハケ目調整、肩部は縦位ハケ目調整／外面の一部に煤が残る	橙色／橙色粒・淡褐色粒を含む	北東溝上層
第42図2 図版24-2-2	甕	胴部下半 小破片	厚0.6	強く外傾する	内面：横位ヘラナデ調整／外面：斜位ヘラナデ調整後、一部ナデ調整／内面煤付着	にぶい褐色／白色砂粒・赤褐色粒を含む	北東溝中層

第26表　25号方形周溝墓出土土器一覧



第43図　25号方形周溝墓（1／60）



第44図　区画整理第70地点25号方形周溝墓出土遺物（１／４・１／２）

37号方形周溝墓

遺　　構（第46・47図）

［位　　置］（Ｂ－４・５、Ｃ・Ｄ－３～６、Ｅ－４・５）グリッド。

［検出状況］方台部の北隅部周辺は1004Ｄや２・20・21・25・28・29・31・32Ｐに切られる。周溝は1016・1017・1020・1024～1026・1029・1032・1033Ｄを切る。方台部で確認された土坑は、いずれも本遺構に先行する縄文時代の遺構である。

［構　　造］**平面形**：全体の形状は完全な正方形ではなく、東西に若干潰れた平行四辺形もしくは菱形を呈する。南隅角部は周溝が途切れている。但し、他の隅角部で溝の掘り込みが急に浅くなる傾向が認められることから、本来は全周型であり、上部が後世の攪乱で壊されて深さのある箇所のみが遺存している可能性も考えられる。**規模**：周溝の外縁は、北西一南東軸で約11.15ｍ、北東一南西軸は張出部を含めると約11.70ｍ、方台部は北西一南東軸で約9.16ｍ、北東一南西軸で約9.35ｍの規模である。**長軸方向**：Ｎ－47°－Ｅ。**北東溝**：Ｎ－35°－Ｗ方向に伸び、中心長さ9.61ｍ、上幅0.94～1.26ｍ、下幅最大0.71ｍ、深さ82㎝を測る。底面はほぼ平坦で、法面の傾斜は方台部側が急である。周溝の隅角部付近は浅くなる。**南東溝**：Ｎ－48°－Ｅ方向に伸び、中心長さ7.65ｍ、上幅0.70～1.12ｍ、下幅最大0.59ｍ、深さ74㎝を測る。底面はほぼ平坦で、法面の傾斜は方台部側が急である。底面中央に高低差14㎝の段差があり、南側が深く落ち込む、底部両端は攪乱を受けており判然としないが、浅くなっていたと考えられる。**南西溝**：Ｎ－29°－Ｗ方向に伸び、中心長さ9.44ｍ、上幅0.55～1.41ｍ、下幅最大1.02ｍ、深さ49㎝を測る。底面はほぼ平坦で、法面の傾斜は方台部側が急である。南部分の溝幅が1.41ｍと広く、外縁が南西に張り出している。底面もやや落ち込む。別の掘り込みが重複している可能性も考えられたが、土層断面では一連の覆土に覆われていたことから、同一の掘り込みと判断した。南端の上部は攪乱を受けている。**北西溝**：Ｎ－46°－Ｅ方向に伸び、中心長さ9.42ｍ、上幅0.69～1.05ｍ、下幅最大0.67ｍ、深さ60㎝を測る。底面はほぼ平坦で法面の傾斜は方台部側が急である。南端部は方台部に耕作関連の攪乱を受けているため、上端幅が一定しない。溝の両端は浅い。**埋葬施設**：主体部は確認されなかった。

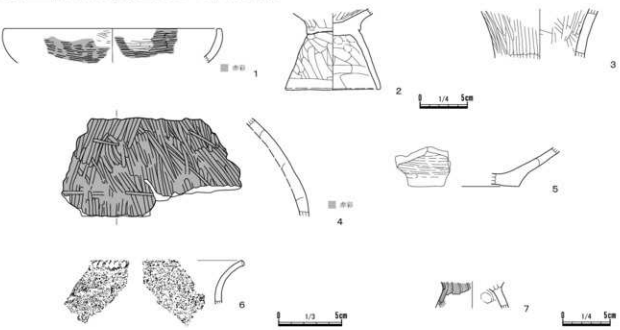
［覆　　土］周溝各辺の中央と隅角部で土層観察を行った。ロームの剥落土を伴う壁面際の堆積を除くと、各土層観察面の覆土は概ね５層に分層できる。上層には断面Ｕ字形で黒色味の強い黒褐色土、その

下に色調が明るめの黒褐色土が厚く堆積し、その下にローム粒を比較的多く含む黒褐色土、さらにその下にロームブロックを含む黒色味の強い黒褐色土、最下層はロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土もしくは褐色土が堆積する。なお、下部の黒色味の強い黒褐色土に前後して、ローム粒を多く含む堆積が壁面沿いに認められる。以上の覆土構成は25方に似る。

［遺　　物］遺構の規模に反して、弥生時代の遺物は細片が多く、また、縄文土器の混入が目立つ。弥生土器は130点が出土し、北東溝の北寄り上層で壺形土器片が集中して出土したほか、南東溝中央中層で高坏形土器の脚部破片、このほか口唇部に刻みのある甕形土器、赤彩が施された高坏形土器や壺形土器の破片が出土した。うち、７点を図示した。なお、縄文土器322点、石製品３点、黒曜石の剥片１点、陶磁器類４点が混入する。

［時　　期］弥生時代後期末葉。

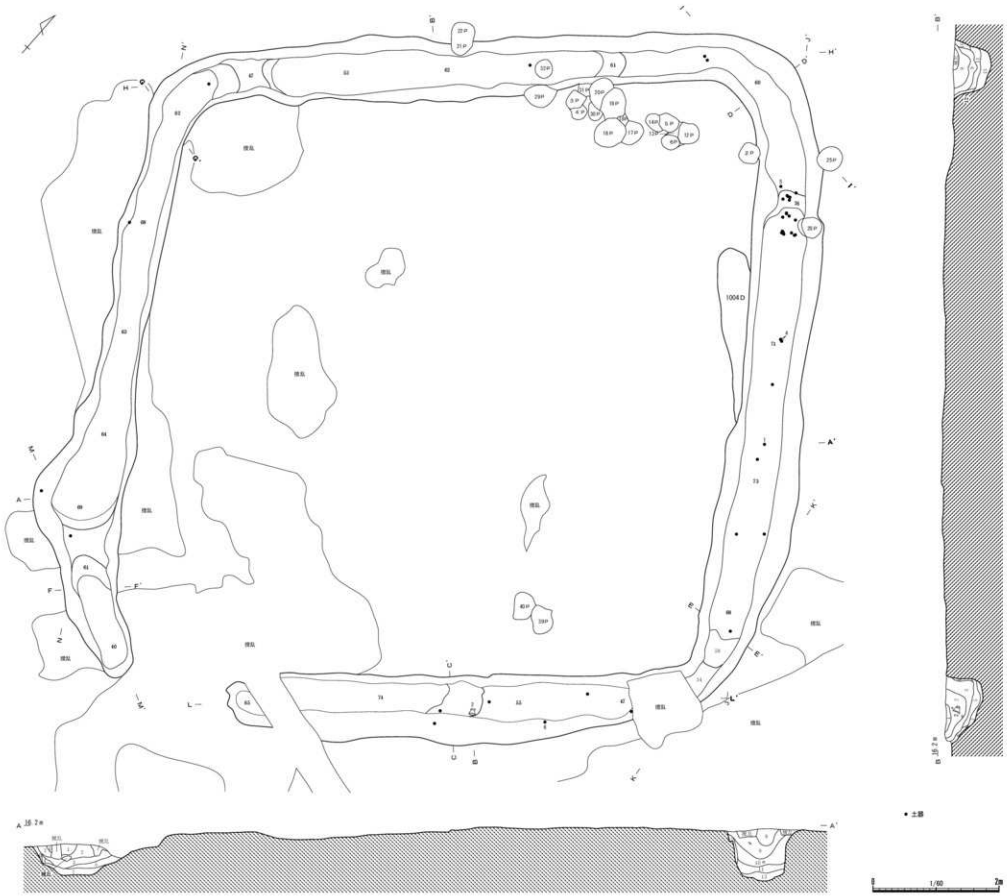
遺　　物（第45図、図版24－３、第27表）



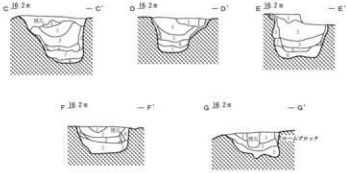
第45図　37号方形周溝墓出土遺物（１／４・１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	出土位置
第45図1 図版24-3-1	高坏	口縁部 小破片	口〔22.2〕 高〔3.7〕	内湾する	内面：横位ヘラ磨き調整／内外面赤彩／器面は摩滅が著しい	明褐灰色／石英・赤褐色粒・黒色粒を含む	北東溝中層
第45図2 図版24-3-2	高坏	坏底～脚台部 40％	底〔8.6〕 底10.0	脚台部は「ハ」の字状／坏部粘土を脚台部との接合部に被せるように圧着	坏内面：ヘラ磨き調整／脚内面：ヘラナデ調整、指頭押圧痕／坏外面：縦位ヘラナデ調整／脚外面：斜位ヘラナデ調整、縦部横ナデ	にぶい褐色／チャート・白色砂粒・淡褐色粒を含む	南東溝上層
第45図3 図版24-3-3	壺	頸部 破片	厚0.8	外反する	内面：縦・斜位のヘラ磨き調整／外面：縦位のヘラ磨き調整／内面は保ける	褐灰色／チャート・白色砂粒・淡褐色粒を含む	覆土中
第45図4 図版24-3-4	壺	胴部 小破片	厚1.0	内湾する	内面：横位ヘラナデ調整／外面：縦→横位ヘラ磨き調整／内面の器面剥落顕著／外面赤彩	にぶい橙色／長石・淡褐色粒・赤色粒を含む	北東溝中層
第45図5 図版24-3-5	壺	胴～底部 小破片	高〔3.1〕	平底／胴部は直線的に外傾する	内面：ヘラナデ調整／外面：横位ヘラ磨き調整／外面は摩滅しており、調整不明瞭	橙色／灰色粒・黒色粒を含む	北東溝中層
第45図6 図版24-3-6	甕	口縁～頸部 小破片	高〔3.5〕	口縁部は外反／口唇部にハケ状工具による刻み	口縁部内外面：日の細かい横位ハケ目調整／頸部外面：縦位ハケ目調整／内面保ける	にぶい橙色／石英・白色砂粒・淡褐色粒を含む	南東溝上層
第45図7 図版24-3-7	甕	脚台部 小破片	厚1.4	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内面：ヘラナデ調整、指頭押圧／外面：縦位のハケ目調整／外面下部は器面荒れる	橙色／白色砂粒・小礫を含む	覆土中

第27表　37号方形周溝墓出土土器一覧



第46図　37号方形周溝墓１（１／60）



A－A′

1層　黒褐色土　黄色味が強い。ローム粒(φ1mm以下)を少量含む。粘性あり、しまりあり。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)を少量、土器より多く含む。粘性あり、しまりあり。
3層　黒褐色土　ローム粒(φ1～2mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
4層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)をやや多く、ロームブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり、しまり強い。
5層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)を多量、ロームブロック(φ5～30mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
6層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く、ロームブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり、しまり強い。
7層　暗色土　ローム粒(φ1～2mm)・ロームブロック(φ5～30mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。
8層　黒褐色土　黄色味が強い。ローム粒(φ1mm以下)を少量含む。粘性あり、しまりあり。
9層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)を少量、土器より多く、遺物を含む。粘性あり、しまりあり。
10層　黒褐色土　ローム粒(φ1～2mm)をやや多く、遺物を含む。粘性あり、しまり強い。
11層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～3mm)を多量、ロームブロック(φ5～50mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
12層　暗色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量、ロームブロック(φ5～30mm)をや多量含む。粘性あり、しまり強い。
13層　暗色土　ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～60mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。

B－B′

1層　黒褐色土　黄色味が強い。ローム粒(φ1mm以下)を少量含む。粘性あり、しまりあり。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)を少量、遺物をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
3層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
4層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
5層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～15mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
6層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を少量、ロームブロック(φ5～35mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
7層　暗色土　ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～15mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。
8層　黒褐色土　黄色味が強い。ローム粒(φ1mm以下)を少量、焼土(φ1mm以下)を微量含む。粘性あり、しまり強い。
9層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
10層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～2mm)を多量、ロームブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり、しまり強い。
11層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)をやや多く、ロームブロック(φ5～20mm)を少量含む。粘性あり、しまり強い。
12層　暗色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量含む。粘性あり、しまりあり。
13層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～30mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。

C－C′

1層　黒褐色土　黄色味が強い。ローム粒(φ1mm以下)を少量含む。粘性あり、しまりあり。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)を少量、遺物をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
3層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
4層　灰黄褐色土　土師の上は下層に黄色味が強い。土師より0.4m粘土(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
5層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
6層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
7層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～30mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
8層　暗色土　ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～15mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。

D－D′

1層　黒褐色土　黄色味が強い。ローム粒(φ1mm以下)・焼土(φ1mm以下)を微量含む。粘性あり、しまりあり。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)を少量含む。粘性あり、しまりあり。
3層　黒褐色土　ローム粒(φ1～2mm)をやや多く、焼土(φ1～2mm)を微量含む。粘性あり、しまり強い。
4層　灰黄褐色土　ローム粒(φ1～2mm)をやや多く、ロームブロック(φ5mm)を微量含む。粘性あり、しまり強い。
5層　灰黄褐色土　ローム粒(φ1～2mm)を少量、焼ノ焼炭(ロームブロック(φ5～20mm))をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
6層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
7層　暗色土　ローム粒(φ1～2mm)を多く、ロームブロック(φ5～10mm)をや多量含む。粘性あり、しまり強い。

E－E′

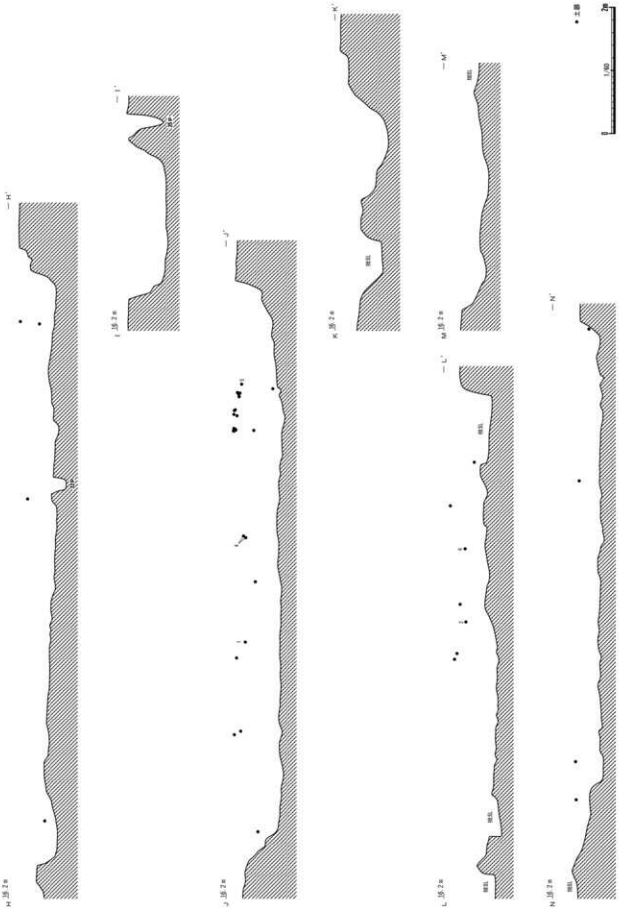
1層　黒褐色土　黄色味が強い。ローム粒(φ1mm以下)を少量含む。粘性あり、しまりあり。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)を少量、焼土(φ1mm以下)を微量含む。粘性あり、しまりあり。
3層　黒褐色土　ローム粒(φ1～2mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
4層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～2mm)・ロームブロック(φ5～25mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
5層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量、ロームブロック(φ5～20mm)をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
6層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。
7層　灰黄褐色土　ローム粒(φ1～2mm)を多量、ロームブロック(φ10mm)を少量含む。粘性あり、しまり強い。
8層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～30mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。

F－F′

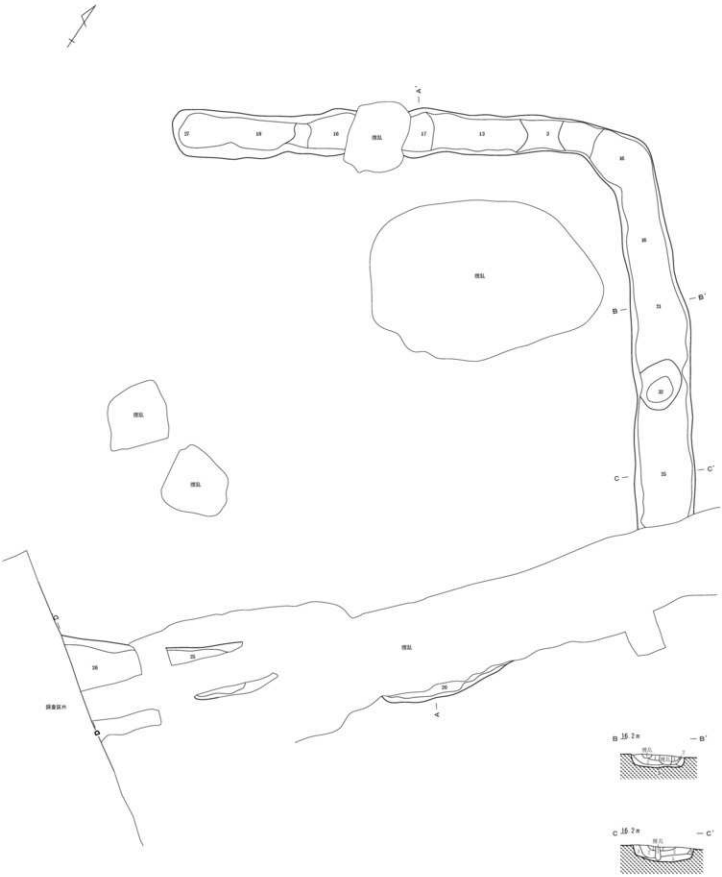
1層　黒褐色土　黄色味が強い。ローム粒(φ1mm以下)を少量含む。粘性あり、しまりあり。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
3層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～3mm)をやや多く、ロームブロック(φ3mm)を少量含む。粘性あり、しまり強い。
4層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量、ロームブロック(φ5mm)を微量含む。粘性あり、しまり強い。
5層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり、しまり強い。
6層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。
7層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～30mm)を多量含む。粘性あり、しまり強い。

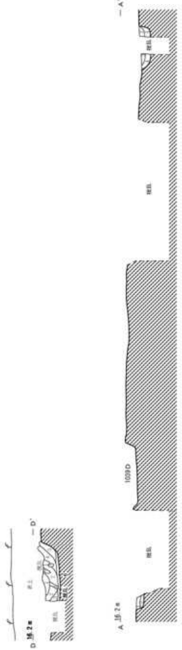
G－G′

1層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
2層　黒褐色土　土師の上は黄色味が強い。ローム粒(φ1～3mm)をやや多く、ロームブロック(φ5～30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり強い。
3層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)・ロームブロック(φ5～15mm)を多量含む。粘性あり、しまりあり。



第47図　37号方形周溝墓２（１／60）


22
18
16
埋孔
17
13
3
16
18
埋孔
B
B'
21
20
C
C'
埋孔
埋孔
埋孔
16
15
埋孔
19
B
16.2m
B'
埋孔
C
16.2m
C'
埋孔



A－A'

1層	黒褐色土	ローム粒(φ1～2㎜)をやや多く、ロームブロック(φ5～10㎜)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
2層	にぶい黄褐色土	薄い帯状にローム粒(φ1～3㎜)を多量、灰黄褐色土も含む。粘性あり。しまり強い。
3層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～2㎜)を多量、ロームブロック(φ5～10㎜)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。
4層	にぶい黄褐色土	灰黄褐色土をベースにローム粒(φ1～3㎜)を多量、ロームブロック(φ5～25㎜)をやや多く含む。粘性あり。しまり強い。

B－B'

1層	黒褐色土	色調明るめ。ローム粒(φ1～2㎜)をやや多く、焼土(φ1㎜)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
2層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3㎜)を多量、ロームブロック(φ5～30㎜)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
3層	にぶい黄褐色土	灰黄褐色土をベースにローム粒(φ1～3㎜)・ロームブロック(φ5～20㎜)を薄い帯状に多量含む。粘性あり。しまり強い。

C－C'

1層	黒褐色土	色調明るめ。ローム粒(φ1㎜)をやや多く、焼土(φ1㎜)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
2層	灰黄褐色土	ローム粒(φ1～2㎜)をやや多く、炭化物(φ1～2㎜)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
3層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3㎜)・ロームブロック(φ5～10㎜)を多量含む。粘性あり。しまり強い。
4層	にぶい黄褐色土	ローム土主体。薄い帯状に灰黄褐色土がやや多く混ざる。粘性あり。しまり強い。
5層	灰黄褐色土	ベースの土は黒色味がある。ローム粒(φ1～2㎜)を少量、ロームブロック(φ5～20㎜)を多量含む。粘性あり。しまり強い。

D－D'

1層	黒褐色土	ローム粒(φ1㎜)をやや多量含む。粘性あり。しまり強い。
2層	黒褐色土	上層より色調明るい。ローム粒(φ1～3㎜)をやや多く、礫(φ10㎜)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
3層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～2㎜)をやや多く、ロームブロック(φ10㎜)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
4層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～2㎜)をやや多く、ロームブロック(φ5～10㎜)を微量含む。粘性あり。しまり強い。
5層	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ1～3㎜)を多量、ロームブロック(φ5～10㎜)を少量含む。粘性あり。しまり強い。
6層	灰黄褐色土	薄い帯状にローム粒(φ1～3㎜)をやや多く、薄い帯状にロームブロック(φ5～10㎜)を少量含む。粘性あり。しまり強い。

0　1/60　2m

第48図　38号方形周溝墓（1／60）

［土　　器］（第45図１～７、図版24－３－１～７、第27表）

１・２は高坏形土器である。１は内湾する口縁部片で、内面はヘラ磨き調整、内外面に赤彩が施される。２は坏底から脚台部にかけての破片で、脚台部はハの字に開く。坏部と脚台部の接合部に段差のある接合痕を明瞭に残す。坏部内面はヘラ磨き調整、坏部外面と脚部内外面はヘラナデ調整が見られる。３～５は壺形土器である。３は頸部片である。内外面にヘラ磨き調整が見られる。４は胴部破片で内面に横位ヘラナデ調整、外面にヘラ磨き調整が見られる。５は胴部から底部にかけての破片で、内面はヘラナデ調整、外面に横位ヘラ磨き調整が見られる。６・７は甕形土器である。６は口縁から頸部にかけての破片で、口唇部にハケ状工具による刻みが施される。口縁部は横位、頸部は縦位のハケ目調整が見られる。内面に煤が残る。７は脚台部片で、脚台部はハの字に開く。内面はヘラナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は縦位のハケ目調整が見られる。

38号方形周溝墓

遺　　構（第48図）

［位　　置］（Ｆ～Ｈ－２～４）グリッド。

［検出状況］南東部は大きく攪乱を受けている。1040・1041Ｄを切る。方台部で確認された1034～1037・1039Ｄはいずれも縄文時代の土坑である。

［構　　造］**平面形**：南西側に位置する25方の北東溝を利用するように、周溝は南西側に掘り込みを持たないコの字形に配される。但し、25方の周溝に接続はされていない。**規模**：周溝の外縁は北西―南東軸で約9.35ｍ、北東―南西軸は約10.13ｍまでの確認である。方台部は北西―南東軸で約7.80ｍ、北東―南西軸は25方北東溝際までを含めると約10.31ｍの長方形となる。**主軸方位**：Ｎ－54°－Ｅ（短軸方位：Ｎ－36°－Ｗ）。**北西溝**：Ｎ－57°－Ｅ方向に伸び、中心長さ7.33ｍ、上幅0.52～0.77ｍ、下幅最大0.62ｍ、深さ18㎝を測る。25号の周溝と比較すると浅い。特に北隅部付近が浅くなる。底面はほぼ平坦である。壁面は丸みをもって立ち上り、外傾する。**北東溝**：Ｎ－39°－Ｗ方向に伸びる。南端が攪乱を受けているため、長さ（中心長さ）は5.84ｍまでの確認である。上幅0.69～0.97ｍ、下幅最大0.82ｍ、深さは南東部がやや深い27㎝を測る。底面はほぼ平坦である。**南東溝**：大きく攪乱を受けているため、断続的に確認された。やや南東側に弧状に張り出すと推定されるが、確認範囲内ではＮ－57°－Ｅ方向に伸びる。長さ7.20ｍまでの確認で、調査区壁面の土層断面では上端幅が1.00ｍ以上、下幅が0.75ｍ以上になる。深さは調査区南西壁で37㎝を測る。底面はほぼ平坦である。**埋葬施設**：主体部は確認されなかった。

［覆　　土］周溝各辺の中央と調査区南西壁で土層観察を行った。比較的深さのある北東溝中央と南東溝南端の覆土は概ね４層に分層できる。最上部に断面椀形に確認される色調が明るめの黒褐色土層、その下に灰黄褐色土層、その下にローム粒を多く含むにぶい黄褐色土層が壁面際に三角堆積し、最下層には、黒褐色土にローム土が混ざった灰黄褐色土が堆積する。

［遺　　物］壺形土器の口縁部破片、ヘラ磨き調整を伴う壺形土器の底部破片など弥生土器６点が出土した。うち１点を図示した。他に打製石斧１点が出土している。なお、縄文土器19点が混入する。

［時　　期］弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭に位置付けられ、遺構の分布状況から25方に後続する時期と考えられる。

遺　　物（第49図、図版24－４、第28表）

［土　　器］（第49図１、図版24－４－１、第28表）

１は大きく外反する壺形土器の複合口縁部片である。内面と口唇部には細かな単節縄文が施され、口唇部の下端には刻みが施される。帯状の複合部には斜位のハケ目調整が見られる。

第49図　38号方形周溝墓出土遺物（１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	出土位置
第49図1 図版24-4-1	壺	口縁部 小破片	高［1.3］	幅狭の複合口縁／強く外傾	内面：細かなLR単節縄文／外面：口唇部面取り後LR単節縄文、下端部にハケ状工具による刻み。以下は斜位のハケ目調整	に示い黄褐色／白色砂粒・黒色粒を含む	覆土中

第28表　38号方形周溝墓出土土器一覧

第３節　中世以降の遺構

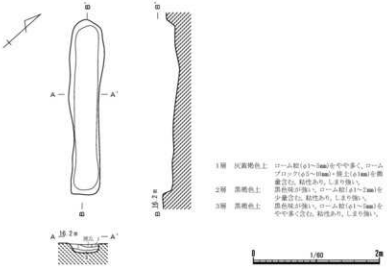
当該期の遺物は少なく、覆土の土質と混入物及びしまり具合から判断して中・近世以降に位置付けられる遺構は、土坑１基（1004Ｄ）、溝跡１本（59Ｍ）、ピット34本（１～32・34・35Ｐ）である。なお、調査区の東側で北東から南西に伸びる溝状の攪乱が複数重複して認められた（第４図）。その埋土はローム土や砂礫を多く含む。攪乱の分布域は土地区画整理事業が実施される以前の旧道に重なる。

（１）土坑

1004号土坑

遺　構（第50図）

［位　　置］（Ｆ・Ｇ－２）グリッド。



第50図　1004号土坑（１／60）

［検出状況］1024 ～ 1026Ｄと37方を切る。

［構　　造］**平面形**：溝状。**断面形**：逆台形。底面は細かな起伏が見られるが概ね平坦である。僅かに北側が低い。壁面は丸い立ち上がりでほぼ垂直である。**規模**：長軸2.78ｍ／短軸0.51ｍ／深さ15㎝。**長軸方位**：Ｎ－48°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。後世の耕作による灰黄褐色土の染み込み以外は、黒色味の強い黒褐色土が自然堆積する。１層はローム粒をやや多く含む灰黄褐色土、２層はローム粒を少量含む黒褐色土、３層はローム粒をやや多く含む黒褐色土である。

［遺　　物］弥生土器２点、縄文土器５点が混入する。

［時　　期］37方を切ることと灰黄褐色の覆土の様相から、中世以降に位置付けておく。

（２）溝跡

59号溝跡

遺　　構（第51図）

［位　　置］（Ｂ－４・５）グリッド。

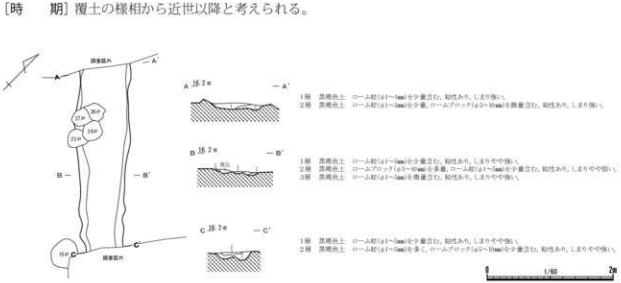
［検出状況］両端は調査区外に続く。北西に隣接する区画整理25Ⅳ地点（佐々木ほか　2009）では、59Ｍの延長上に溝状の掘り込みが検出されている。

［構　　造］**平面形**：やや不定形の溝状。**断面形**：浅い皿形。遺存する深さに対し底面の幅が広い。底面は緩やかな起伏がある。壁面は底面から連続して丸く立ち上がり、外傾する。**規模**：長軸現況2.90ｍ／短軸0.59 ～ 0.83ｍ／深さ８㎝。**長軸方位**：Ｎ－44°－Ｗ。

［覆　　土］３層に分層される。主体を成す１層はローム粒を少量含む黒褐色土である。下層の２・３層はローム粒もしくはロームブロックを多く含む。

［遺　　物］縄文土器２点が混入して出土した。

［時　　期］覆土の様相から近世以降と考えられる。



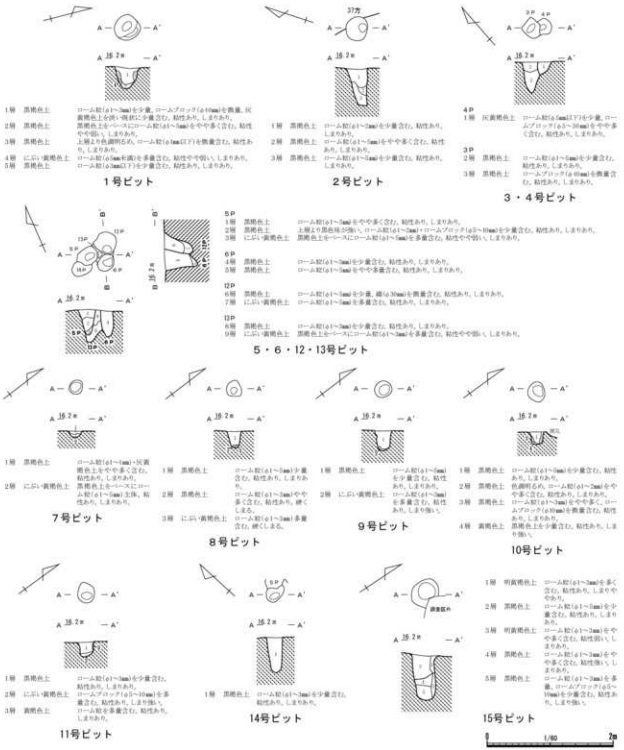
第51図　59号溝跡（１／60）

（３）ピット

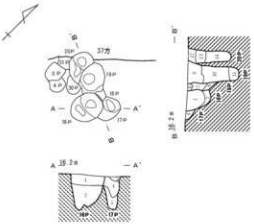
中世以降に位置付けられる34本のピットを、第52 ～ 54図、第29表に示す。うち、調査区北西壁

際の７～11Ｐは、いずれも黒褐色の覆土を伴い、１列で並ぶように見受けられる。しかし、調査範囲が限定されるため詳細は不明である。また、Ｃ－４・５グリッドとＢ－４・５グリッドとの２か所で深度のある小穴が重複する。それらの切合い関係を模式的に示すと（旧→新）、23・26Ｐ→24Ｐ、27Ｐ→26Ｐ、３Ｐ→４Ｐ、17・18Ｐ→16Ｐ、18・20Ｐ→19Ｐ、22Ｐ→21Ｐである。

なお、周辺の歴史的環境を反映するように、２Ｐに赤彩のある弥生土器片、５・16・18・19・29・34Ｐに縄文土器片の混入が見られた。



第52図　中世以降のピット１（１／60）



16P
1層　灰黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く、ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性やや弱い。しまりやや弱い。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く、ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性やや弱い。しまりあり。

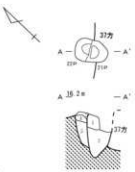
17P
3層　灰黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)・ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
4層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)・ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
5層　黒褐色土　上層より黒色味が強い。ローム粒(φ1～5mm)をやや多く含む。粘性あり。しまりあり。

18P
6層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり。しまりあり。
7層　黒褐色土　上層より黒色味が強い。ローム粒(φ1～5mm)・ローム ブロックを少量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
8層　黒褐色土　黒い斑状の褐色ブロック(φ5～15mm)をやや多く含む。粘性あり。しまりやや強い。

19P
9層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)・ローム ブロック(φ5～10mm)をやや多く含む。粘性やや強い。しまりやや弱い。
10層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)を少量含む。粘性やや弱い。しまりやや弱い。
11層　灰黄褐色土　ローム粒(φ1～5mm)・ローム ブロック(φ5～20mm)を多量含む。粘性やや強い。しまりやや弱い。

20P
12層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)を少量、ローム ブロック(φ5～15mm)を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
13層　黒褐色土　上層より黒色味が強い。ローム粒(φ1～5mm)・ローム ブロック(φ5～30mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
14層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)を多量含む。粘性あり。しまりあり。

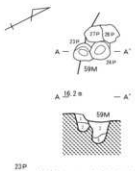
16・17・18・19・20号ピット



21P
1層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
2層　黒褐色土　上層より黒色味が強い。ローム粒(φ1～5mm)をやや多く、ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。

22P
3層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)をやや多く含む。粘性あり。しまりやや強い。
4層　にぶい黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量含む。粘性やや弱い。しまりあり。
5層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量、ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性やや弱い。しまりあり。

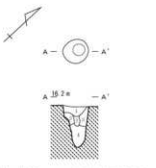
21・22号ピット



23P
1層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。
2層　明黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多く含む。粘性あり。しまりやや強い。

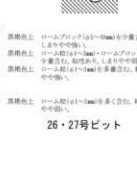
24P
3層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を少量、ローム ブロック(φ5～10mm)を多く含む。粘性あり。しまりあり。
4層　黒褐色土　ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。

23・24号ピット



1層　黒褐色土　ローム粒(φ1mm以下)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1～2mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
3層　灰黄褐色土　ローム粒(φ1～5mm)をやや多く含む。粘性あり。しまりあり。
4層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)をやや多く含む。粘性あり。しまりあり。

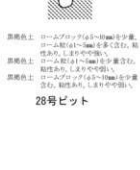
25号ピット



26P
1層　黒褐色土　ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)・ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
3層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多量含む。粘性あり。しまりやや強い。

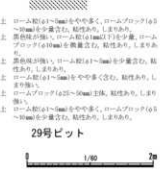
27P
4層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を多く含む。粘性あり。しまりやや弱い。

26・27号ピット



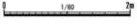
1層　黒褐色土　ローム ブロック(φ5～10mm)を少量、ローム粒(φ1～3mm)を多く含む。粘性あり。しまりやや強い。
2層　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。
3層　黒褐色土　ローム ブロック(φ5～10mm)を少量含む。粘性あり。しまりやや弱い。

28号ピット

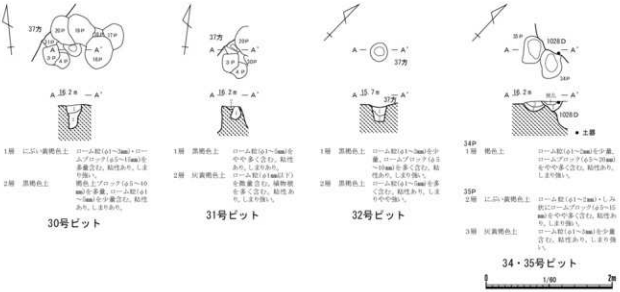


1層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)をやや多く、ローム ブロック(φ5～20mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
2層　黒褐色土　黒褐味が強い。ローム粒(φ1mm以下)を少量、ローム ブロック(φ10mm)を微量含む。粘性あり。しまりあり。
3層　黒褐色味が強い。ローム粒(φ1～5mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
4層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)をやや多く含む。粘性あり。しまりやや強い。
5層　黒褐色土　ローム ブロック(φ25～50mm)主体。粘性あり。しまりやや強い。
6層　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)をやや多く、ローム ブロック(φ5～20mm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。

29号ピット



第53図　中世以降のピット２（１／60）



第54図　中世以降のピット３（１／60）

遺構名	位置(グリッド)	平面形	規模(m)			覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ			
1P	F-1	円形	0.41	0.40	0.44	5層	遺物無し	中世以降
2P	C-5	円形	0.38	0.35	0.73	3層	弥生土器混入	中世以降
3P	C-4	楕円形	0.34	0.28	0.58	2層／4Pより古	遺物無し	中世以降
4P	C-4	円形	0.26	0.18	0.22	単層／3Pより新	遺物無し	中世以降
5P	C-5	円形	0.31	0.31	0.64	3層／13・14Pより新	縄文土器混入	中世以降
6P	C-5	楕円形	0.29	0.23	0.57	2層／12・13Pより新	遺物無し	中世以降
7P	C-4	円形	0.24	0.21	0.11	2層	遺物無し	中世以降
8P	B-4	不整円形	0.26	0.26	0.26	3層	遺物無し	中世以降
9P	B-4	円形	0.28	0.27	0.40	2層	遺物無し	中世以降
10P	B-4	円形	0.30	0.27	0.21	4層	遺物無し	中世以降
11P	A-5	楕円形	0.34	0.28	0.25	3層	遺物無し	中世以降
12P	C-5	円形	0.37	0.36	0.49	2層／6Pより古	遺物無し	中世以降
13P	C-5	推定楕円形	0.24	0.17	0.51	2層／5・6Pより古	遺物無し	中世以降
14P	C-4・5	楕円形	0.33	0.23	0.57	単層／5Pより古	遺物無し	中世以降
15P	B-5	楕円形	0.47	0.42	0.73	5層	遺物無し	中世以降
16P	C-4	楕円形	0.53	0.42	0.62	2層／17・18Pより新	縄文土器混入	中世以降
17P	C-4・5	楕円形	0.41	0.31	0.69	3層／16Pより古	遺物無し	中世以降
18P	C-4	楕円形	0.17	0.13	0.74	3層／16・19Pより古	縄文土器混入	中世以降
19P	C-4	楕円形	0.47	0.42	0.96	3層／18・20Pより新	縄文土器混入	中世以降
20P	C-4	不整楕円形	0.45	0.28	0.68	3層／19Pより古	遺物無し	中世以降
21P	C-4	楕円形	0.35	0.30	0.73	2層／37方・22Pより新	遺物無し	中世以降
22P	C-4	円形	0.36	0.23	0.61	3層／21Pより古	遺物無し	中世以降
23P	B-4・5	楕円形	0.31	0.30	0.30	2層／59M・24Pより古	遺物無し	中世以降
24P	B-4・5	不整円形	0.35	0.30	0.48	2層／59Mより古、23・26Pより新	遺物無し	中世以降
25P	B-5	円形	0.41	0.38	0.67	4層	遺物無し	中世以降
26P	B-4・5	不整円形	0.29	0.28	0.31	3層／59M・24Pより古、27Pより新	遺物無し	中世以降
27P	B-4	不整円形	0.29	0.25	0.40	単層／59M・26Pより古	遺物無し	中世以降
28P	C-5	円形	0.38	0.33	0.65	3層／37方より新	遺物無し	中世以降
29P	C-4	楕円形	0.52	0.36	0.53	6層／37方より新	縄文土器混入	中世以降
30P	C-4	楕円形	0.27	0.19	0.47	2層	遺物無し	中世以降
31P	C-4	楕円形	0.20	0.18	0.22	2層	遺物無し	中世以降
32P	C-4	円形	0.30	0.28	0.25	2層／37方より古	遺物無し	中世以降
34P	D-5	楕円形	0.44	0.41	0.19	単層／1028D・35Pより新	縄文土器混入	中世以降
35P	D-5	楕円形	0.45	0.35	0.20	2層／34Pより古	遺物無し	中世以降

第29表　中世以降のピット一覧

第４節　遺構外出土遺物

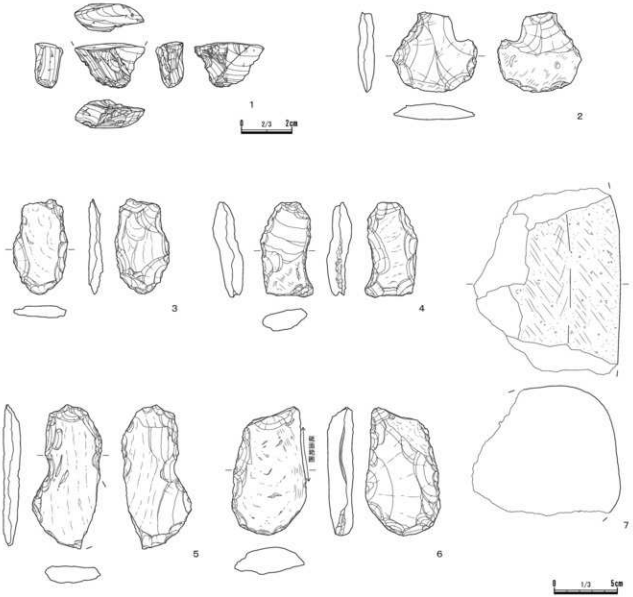
本節では、表土や撹乱の堆積中から採取した遺物と、遺構の覆土に二次的に混入したと考えられる遺物を一括して報告する。なお、各遺物の出土位置は遺物一覧の末列に記した。

（１）縄文時代の石器（第55図１～７、図版25－１～７、第30表）

１は二次加工のある剥片である。四角錘状で正面下端部と裏面左側縁に二次的な剥離が見られる。２は横形の石匙である。刃部正面下部と裏面は調整剥離後滑らかに摩耗している。

３～６はいずれも頁岩製の打製石斧である。両側面に抉りのある３・５の撥形、側面の抉りが目立たない４・６の短冊形のものが出土している。

７は閃緑岩製の石皿と考えられる。縁が角丸形で、表面に斜位の擦痕が認められる。



第55図　遺構外出土遺物１（１／３・２／３）

（２）縄文時代の土器（第56～58図８～43、図版25・26－８～43、第31表）

８は波状口縁となる深鉢形土器の突起部である。刻みを伴う隆帯に角押文が沿う。縄文時代中期中葉に位置付けられる。

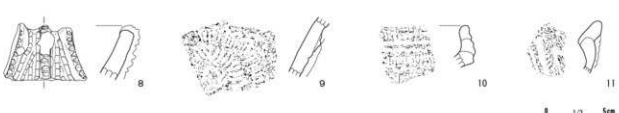
９～18はいずれも縄文時代中期中葉に位置付けられ、10の浅鉢形以外は全て深鉢形土器である。９は弧状の隆帯の両脇にキャタピラー文と小波状沈線が沿う。10は浅鉢形土器で、口縁部に平行するキャタピラー文間に波状の沈線を施す。11は波状口縁で、両脇に沈線を伴う刻み付きの隆帯が施される。12は内湾する口縁部片で単節縄文を地文とし口唇部は強い横ナデ調整が見られる。13は波状口縁で幅広の無文帯下に単節縄文が施される。14は内湾する口縁部片でＬ撚糸文が斜位に施される。15・16は内外面に横位のヘラナデ調整が見られる。17は内湾する胴部から外反する頸部にかけての破片で、撚糸文を地文とし、２条の蕨手状隆帯の一つは刻みを伴う。18は爪形文で面された楕円区画内に縦位の沈線を充填する。

19～39は中期後葉に位置付けられる深鉢形土器である。19は内湾する口縁部片で、縦位の撚糸文を地文とし、口縁部に横位の隆帯を巡らす。口唇部は強いナデ調整が見られる。20は撚糸文を地文とし、横位平行沈線と隆帯で画された文様帯に平行沈線による連弧文が施される。21は撚糸文を地文とし、横位平行沈線と波状沈線が施される。22は撚糸文を地文とし、横位隆帯と垂下する蛇行隆帯が施される。23は直立気味の口縁部片で沈線と隆帯による区画内に単節縄文を充填する。24は幅広の口縁部無文帯を沈線で画し、下に単節縄文が施される。25は幅広の口縁部文様帯下に単節縄文を施した後、横位沈線で無文帯を画す。26は波状口縁部で、単節縄文を地文とし、横位沈線で幅広の無文帯を画す。27～31は単節縄文を地文とし、磨消懸垂文が施される。32は縦位の集合沈線が施される。33はヘラ状工具による横位の「ハ」の字文とその下に沈線が見られる。34～36は底部片である。34は撚糸文を地文とし、隆帯による懸垂文がまばらに施される。35は縦位の条線を地文とし、隆帯による懸垂文がまばらに見られる。36は粗いナデ調整が認められる。37は沈線によるＵ字区画内に単節縄文が充填される。38は垂下する沈線区画内に単節縄文を施す。39は沈線による弧状の区画内に単節縄文を充填し、区画外はナデと磨き調整が見られる。

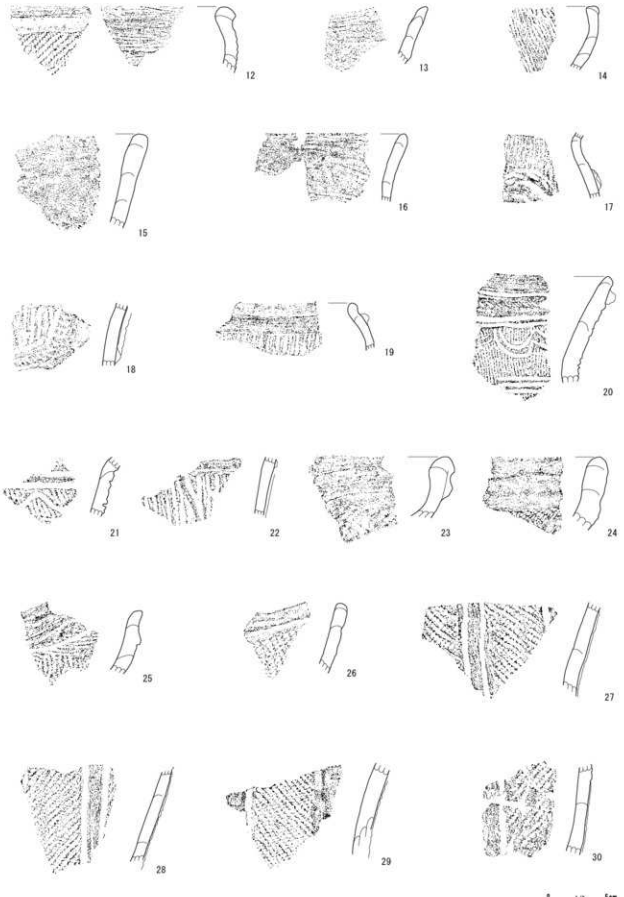
40は深鉢形土器の口縁部破片で、口縁内に横位沈線が巡る。口縁外は無文で、その下に横位平行沈線と弧状あるいは斜位の沈線が施される。後期前葉に位置付けられる。

41は縄文を地文とし、丸棒状工具で押圧した組織文を横位に貼り付け、その下に粗い横位沈線を施す。後期中葉に位置付けられる。

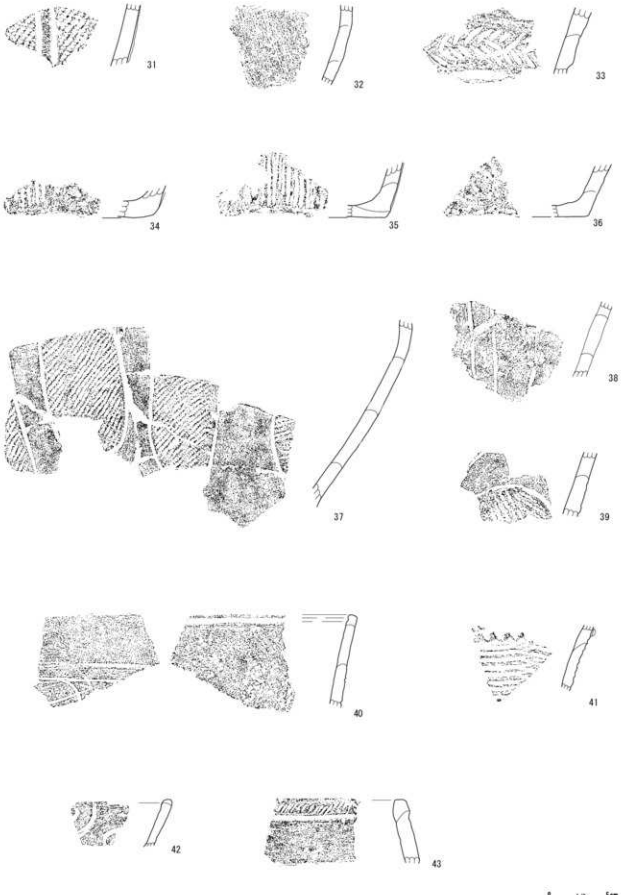
42は表面が黒色を呈し、無文部分が丁寧に磨き調整された深鉢形土器の口縁部片である。沈線による入り組み区画内に細かな単節縄文を充填する。晩期前葉に位置付けられる。43は内傾する口縁部片である。口縁部を横位沈線で画して斜位の刻みを施す。晩期前葉に位置付けられる。



第56図　遺構外出土遺物２（１／３）



第57図　遺構外出土遺物３（１／３）



第58図　遺構外出土遺物４（１／３）

（３）弥生時代後期～古墳時代後期の土器（第59図44～46、図版26－44～46、第32表）

44は壺形土器の頸部から胴部にかけての細片である。頸・胴部境に上面に赤彩を伴う凸帯が巡る。凸帯直下の胴部に刻み、以下に端末結節縄文が施される。45は壺形土器の胴部破片である。内面はヘラナデ、外面にヘラ磨き調整が見られる。46は甕形土器の口縁部片である。内面上部と外面にハケ目調整が見られる。口唇部には丸棒状工具による刻みが施される。

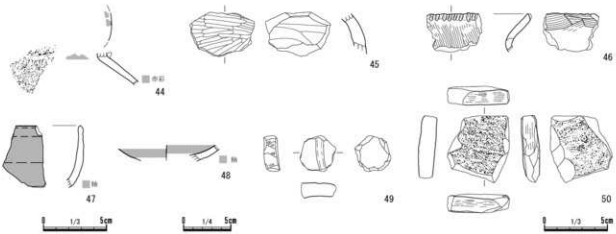
（４）近世の陶器（第59図47・48、図版26－47・48、第33表）

47は瀬戸・美濃系陶器碗の口縁部破片である。口縁は直立気味で、内外面に飴釉が施される。天目碗のような口縁の括れは認められない。17世紀後葉～18世紀後葉に位置付けられる。

48は瀬戸・美濃系陶器皿の細片である。内面と体上部に灰釉が施され、見込みの釉剥ぎ跡が僅かに遺存する。18世紀前葉～後葉に位置付けられる。

（５）土器を転用した土製品（第59図49・50、図版26－49・50、第34表）

49・50は土器片を母材として二次利用された製品であり、転用された時期は不明である。49は縄文時代中期中葉～後葉に位置付けられる深鉢形土器の胴部破片を二次加工したもので、周縁を粗く打ち欠き、径2.9㎝、厚さ1.2㎝の円盤形に整形している。50は平行叩き目と同心円の当て具痕が残る須恵器甕の胴部破片を砥石に転用したもので、不整方形に遺存する。表裏と小口に擦痕が認められる。



第59図　遺構外出土遺物５（１／４・１／３）

挿図番号 図版番号	種別 器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第55図1 図版25-1	二次加工のある剥片	黒曜石	[1.8]	2.8	1.1	4.0	上部欠損、下端部がすぼまる四角錐状。正面下端部と裏面左側縁に二次的な剥離	遺構外
第55図2 図版25-2	石鏃	ホルンフェルス	6.2	6.5	1.2	54.5	横形／つまみ部の抉りは左右非対称／刃部正面下部と裏面は調整剥離後滑らかに摩耗	37方
第55図3 図版25-3	打製石斧	頁岩	7.6	4.2	1.1	38.7	撥形／正面に原礫面あり／刃部は弧状／側縁に敲打剥離が認められる	38方
第55図4 図版25-4	打製石斧	頁岩	7.3	3.7	1.5	74.0	撥形／正面に礫面あり／側縁に粗い調整剥離／弧状の抉れ部に敲打痕がみられる	671Y
第55図5 図版25-5	打製石斧	頁岩	11.4	4.4	1.3	99.0	撥形／片側縁欠損／正面に原礫面あり／刃部は弧状／両側縁に敲打剥離が認められる	遺構外
第55図6 図版25-6	打製石斧	頁岩	10.2	5.5	2.0	159.0	短冊形／正面に原礫面を残す／側縁を中心に調整剥離が施され、一部に紙面・敲打痕がみられる	遺構外
第55図7 図版25-7	石皿か	閃緑岩	[14.8]	[11.6]	[10.3]	2700.0	縁は隅丸形、残存部に斜位の擦痕がみられ、滑らかに摩耗する	37方

第30表　遺構外出土石器一覧

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第56図8 図版25-8	深鉢	口縁部 小破片	高［4.5］	波状口縁の突起部／外傾する	刻みを付けた隆帯を中心と両端部に貼付け，隆帯間に２列の角押文を沿わせる	褐色／石英・長石・金雲母・白色砂粒を含む	中期中葉 （阿玉台Ⅱ式）	16Ｐ
第56図9 図版25-9	深鉢	胴部 小破片	厚1.6	外傾する	弧状の隆帯の両脇に幅広のキャタピラー文と小波状沈線を沿わせる	褐色／石英・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂２式）	37 方
第56図10 図版25-10	浅鉢	口縁～胴部 小破片	高［3.3］	強く屈曲して内傾する	口縁部に平行する幅広のキャタピラー文施文，間に幅狭のキャタピラー文と沈線による波状文を施文／胴部は無文	黒色／白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂２～３式）	37 方
第56図11 図版25-11	深鉢	口縁部 小破片	高［4.1］	波状口縁／口縁部は強く外傾し，口縁部は内湾する	口縁上部無文帯から刻み付き隆起を垂下，隆帯の両端に沈線を沿わせる	にぶい橙色／石英・チャート・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	37 方
第57図12 図版25-12	深鉢	口縁部 小破片	高［5.4］	内湾する	地文は横位のＬＲ単節縄文／口縁部直下に強い横ナデ調整を施す／内面に強い横位ミガキ調整	にぶい黄褐色／石英・白色粒・黄褐色粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	遺構外
第57図13 図版25-13	深鉢	口縁部 小破片	高［4.5］	波状口縁／外傾する	幅広の無文帯下に横位ＬＲ単節縄文	褐色／石英・チャート・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	59Ｍ
第57図14 図版25-14	深鉢	口縁部 小破片	高［5.0］	内湾する	Ｌ撚糸文を斜位施文	にぶい赤褐色／長石・白色砂粒・黒色粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	37 方
第57図15 図版25-15	深鉢	口縁部 小破片	高［7.5］	外傾する	内外面横位ヘラナデ調整／外面の一部保ける	灰黄褐色／チャート・白色砂粒・黒色粒を含む	中期中葉 （勝坂２～３式）	表土
第57図16 図版25-16	深鉢	口縁部 小破片	高［5.4］	外傾する	内外面横位ヘラナデ調整	にぶい褐色／チャート・白色砂粒を含む	中期中葉 （勝坂２～３式）	表土
第57図17 図版25-17	深鉢	頸～胴部 小破片	厚1.3	頸部は僅かに内湾する	地文に縦位のＬＲ撚糸文／２本一組の隆帯を縦手状に貼付け，外側の隆帯に刻みを施文	褐色／チャート・白色砂粒・小礫を含む	中期中葉 （勝坂３式）	37 方
第57図18 図版25-18	深鉢	胴部 小破片	厚1.6	外傾する	隆帯に爪形の刻みが施された楕円区画内に沈線を沿わせ，内側に縦位沈線を充填	にぶい褐色／石英・白色砂粒・黒色粒を含む	中期中葉 （勝坂３式）	表土
第57図19 図版25-19	深鉢	口縁部 小破片	高［3.7］	内湾する	地文にＲ撚糸文を縦位施文／口縁部直下に強いナデ調整を施し，横位隆帯貼付け	にぶい褐色／白色砂粒・赤褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ～Ⅳ式）	37 方
第57図20 図版25-20	深鉢	口縁～胴部 小破片	高［8.3］	強く外傾する	地文にＬＲ撚糸文／横位平行沈線と隆帯に区画された口縁部文様帯に平行沈線による逆弧文施文	にぶい黄褐色／石英・長石・白色砂粒を含む	中期後葉 （連弧文系）	37 方
第57図21 図版25-21	深鉢	口縁部 小破片	厚1.0	上部は強く外傾し，下部はやや傾く	地文縦位のＬＲ撚糸文／上部に横位平行沈線，下部に波状沈線施文	灰黄褐色／石英・チャート・白色砂粒を含む	中期後半 （連弧文系）	37 方
第57図22 図版25-22	深鉢	胴部 小破片	厚1.1	僅かに外傾する	地文縦位のＲ撚糸文／縦位隆帯と垂下する蛇行隆帯を貼付け	褐色／チャート・白色砂粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	37 方
第57図23 図版25-23	深鉢	口縁部 小破片	高［4.8］	内湾する	沈線と隆帯による区画内に横位ＬＲ単節縄文を充填	暗灰黄色／白色砂粒・淡黄褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	グリッド
第57図24 図版25-24	深鉢	口縁部 小破片	高［5.8］	僅かに外傾する	幅広の口縁部無文帯直下に横位のＲＬＲ単節縄文	暗灰黄色／石英・白色砂粒・小礫を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	遺構外
第57図25 図版26-25	深鉢	口縁部 小破片	高［5.0］	波状口縁／外傾する	幅広の口縁部無文帯直下にＲＬＲ単節縄文を横・縦位に施文／横位沈線を口縁に沿わせて弧状に施文	オリーブ黒色／石英・白色砂粒・赤褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	671Ｙ
第57図26 図版26-26	深鉢	口縁～体部 小破片	高［5.5］	波状口縁／外傾する	地文縦位ＬＲ単節縄文／幅広の口縁部無文帯直下に横位沈線施文	灰黄褐色／石英・白色砂粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	37 方
第57図27 図版26-27	深鉢	胴部 小破片	厚1.2	外傾する	地文縦位のＬＲ単節縄文／平行沈線を垂下し，沈線文間を磨消し	黄灰／石英・白色砂粒・赤褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	遺構外
第57図28 図版26-28	深鉢	胴部 小破片	厚1.1	外傾する	地文縦位のＬＲ単節縄文／平行沈線を垂下し，沈線文間を磨消し／内面は擦け，器面は荒れる	灰褐／長石・石英・チャートを含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	37 方
第57図29 図版26-29	深鉢	胴部 小破片	厚1.3	外反する	地文縦位のＬＲ単節縄文／平行沈線を垂下し，沈線文間を磨消し	にぶい黄褐色／石英・白色砂粒・黒色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	37 方
第57図30 図版26-30	深鉢	胴部 小破片	厚1.2	外傾する	地文縦位のＲＬＲ単節縄文／平行沈線を垂下し，沈線文間を磨消し	にぶい褐色／石英・チャート・白色砂粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	37 方
第58図31 図版26-31	深鉢	胴部 小破片	厚1.3	僅かに外傾する	地文縦位のＲＬＲ単節縄文／平行沈線を垂下し，沈線文間を磨消し	にぶい黄橙色／石英・白色砂粒・黒色粒・赤褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	1004Ｄ
第58図32 図版26-32	深鉢	胴部 小破片	厚1.0	内湾する	縦位の集合沈線	にぶい褐色／石英・チャート・白色砂粒・赤褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	37 方
第58図33 図版26-33	深鉢	胴部 小破片	厚1.3	外傾する	ヘラ状工具による「ハ」の字文を横位に連続施文，直下に横位沈線を施す	にぶい褐色／石英・白色砂粒・黒色粒を含む	中期後葉 （曽利Ｖａ式）	遺構外

第31表　遺構外出土縄文土器一覧（１）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第58図34 図版26-34	深鉢	胴～底部 小破片	高［2.5］	平底／胴部は外傾する	地文は縄位のＬ撚糸文／隆帯を間隔を空けて垂下する	灰黄褐色／石英・チャート・白色砂粒・小礫を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅠ～Ⅱ式）	37方
第58図35 図版26-35	深鉢	胴～底部 小破片	高［4.4］	平底／胴部は外傾する	地文は縄位の条線／隆帯を間隔を空けて垂下する	にぶい褐色／長石・チャート・白色砂粒・黒色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅡ式）	37方
第58図36 図版26-36	深鉢	胴～底部 小破片	高［4.2］	平底／胴部は外傾する	粗いナデ調整	暗灰色黄色／チャート・白色砂粒・黒色粒を含む	中期後葉 （加曽利Ｅ第～Ⅳ式か）	37方
第58図37 図版26-37	深鉢	胴部 破片	厚1.0	下部は強く外傾し、上部は立ち上がる	沈線による U字状区画内に縄位のＲＬ単節縄文充填／区画外は磨き調整とナデ調整による磨消し／内外面煤付着	灰黄褐色／石英・角閃石・白色砂粒・赤褐色粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅣ式）	671Ｙ
第58図38 図版26-38	深鉢	胴部 小破片	厚1.0	外傾する	平行沈線を垂下し、沈線文間磨消し／文様間に縄位ＲＬ単節縄文を施文	灰黄褐色／石英・白色砂粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅣ式）	遺構外
第58図39 図版26-39	深鉢	胴部 小破片	厚1.0	外傾する	弧状の沈線による区画内は磨き調整とナデ調整による磨消し／区画外に縄位のＬＲ単節縄文充填／渦巻文又は主胴き文か	灰黄褐色／チャート・白色砂粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅣ式）	遺構外
第58図40 図版26-40	深鉢	口縁～胴部 小破片	高［7.4］	外傾する	内面：口縁上部に横位沈線がめぐる／外面：口縁部無文、以下横位並行沈線と弧状・斜位の沈線を施文	褐灰色／石英・角閃石・チャート・白色砂粒を含む	後期前葉 （堀之内式）	37方
第58図41 図版26-41	深鉢	胴部 小破片	厚1.0	外傾する	地文は縄文施文／上部に横位隆帯を結付けた後、丸棒状工具による押圧／以下に横位沈線を粗く施す	灰黄褐色／石英・白色砂粒・赤褐色粒を含む	後期中葉 （加曽利Ｂ2式接続文系）	37方
第58図42 図版26-42	深鉢	口縁部 小破片	高［3.8］	外傾する／口辺部に横長の楕状突起が付く	沈線による入組文区画内に縄かなＬＲ単節縄文を充填、無文部分に丁寧な磨き調整を施す／内外面黒色処理	灰黄褐色／石英・白色砂粒を含む	晩期前葉 （安行３ａ～ｂ式）	671Ｙ
第58図43 図版26-43	深鉢	口縁～体部 小破片	高［5.0］	内傾する／外面煤付着	口縁部を横位沈線で区画し、上部に斜位の刻み／無文部ナデ調整	灰褐色／石英・チャート・白色砂粒を含む	晩期前葉 （安行３ａ式）	37方

第31表　遺構外出土縄文土器一覧（２）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量（cm）	器形・形態	文様・特徴	胎土	出土位置
第59図44 図版26-44	壺	頸～胴部 小破片	高［2.5］	小型壺／頸部は直立し、胴部はやや直線的に張り出す	内面：頸部横位ヘラ磨き調整、胴部横位ナデ調整／外面：頸部に突帯取付け、直下の胴部に縄位の刻み／以下に端未結節縄文（ＬＲ＋Ｚ）施文／胴部内面、突帯上面赤彩	褐灰色／長石・白色砂粒を含む	遺構外
第59図45 図版26-45	壺	胴部 小破片	厚1.0	優かに内湾する	内面：ヘラナデ調整／外面：ヘラ磨き調整	にぶい橙色／石英・白色砂粒・黒色粒を含む	1004Ｄ
第59図46 図版26-46	壺	口縁部 小破片	高［3.0］	強く外傾する	内面：上部ハケ目調整、下部ナデ調整／外面：口辺部直横状工具による刻み。以下ハケ目調整／外面煤付着	灰黄褐色／白色砂粒・黒色粒を含む	遺構外

第32表　遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期土器一覧

挿図番号 図版番号	種別	器種	法量（cm）	製作の特徴	推定産地	時期	出土位置
第59図47 図版26-47	陶器	碗	高［4.9］	丸碗／内外面に施釉／胎土：淡黄橙色、砂粒を含む／口縁部～体部破片	瀬戸・美濃	近世 （17c後葉～18c後葉）	遺構外
第59図48 図版26-48	陶器	皿	高［1.7］	内面及び体上部に灰釉、見込釉剥ぎ／胎土：にぶい黄橙色、砂粒を含む／体部破片	瀬戸・美濃	近世 （18c前葉～18c後葉）	遺構外

第33表　遺構外出土陶器一覧

挿図番号 図版番号	種別 器種	遺存状態	長さ／幅／厚み （cm）	重量 （g）	特徴	胎土	時期	出土位置
第59図49 図版26-49	土製円盤	完形品	2.9／2.9／1.2	11.0	隅丸の八角形／周縁の一部に磨耗がみられる／深鉢胴部片	にぶい黄橙色／チャート・白色砂粒・黒色粒を含む	縄文中期中葉以降の土器を転用	671Ｙ
第59図50 図版26-50	転用硬石	破片	5.2／4.7／1.3	44.0	不整方形／表裏面と割れ口に擦痕がみられる／内面に同心円状で鳳眼、外面に平行四ミ目が残る／南北企画産鹿の胴部片	橙赤褐色／長石・白色砂粒・小礫・白色針状物質を含む	弥生・平安の遺構を転用	遺構外

第34表　遺構外出土土製品一覧

第４章　自然科学分析

第１節　炭化材の樹種同定

１．はじめに

志木市の西原大塚遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料では放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２．試料と方法

試料は671号住居跡（671Y）から出土した炭化材56点である。調査所見による遺構の推定時期は弥生時代後期であり、年代測定でも整合的な年代が得られている。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製　VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

３．結果

樹種同定の結果、広葉樹のクリとコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、ハンノキ属ハンノキ亜属（以下、ハンノキ亜属）の４分類群が確認された。このほかに種類が特定できない不明炭化植物遺体が１点みられた。樹種同定結果を第35表、結果の一覧を第36表に示す。

樹種	合計
クリ	4
コナラ属クヌギ節	44
コナラ属コナラ節	5
ハンノキ属ハンノキ亜属	2
不明	1
合計	56

第35表　樹種同定結果

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版27に示す。

（１）クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科　図版27　１a－１c（No.10）、２a（No.28）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

（２）コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　図版27　３a－３c（No.1）、４a（No.65）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の２種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靭で、加工困難である。

（３）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版27　５ａ－５ｃ（No.14）、６ａ（No.33）

大型の道管が年輪のはじめに１列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の２種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

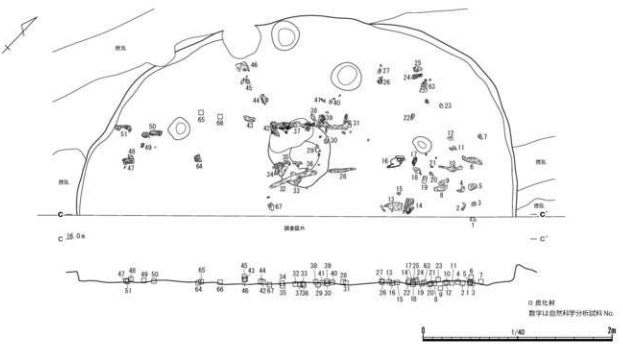
（４）ハンノキ属ハンノキ亜属　*Alnus* subgen. *Alnus*　カバノキ科　図版27　７ａ－７ｃ（No.7）

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織は単列同性で、集合放射組織が存在する。

ハンノキ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキやヤマハンノキなど７種がある。材は全般に硬さおよび重さが中庸で、加工は容易である。

（５）不明　Unknown　図版27　８ａ（No.39）

道管などの木材組織がみられず、状態も悪かったため不明とした。



第60図　671号住居の炭化材分布図（１／40）

４．考察

671Ｙの炭化材は、クヌギ節が44点で最も多く確認された。その他は、コナラ節が５点とクリが４点、ハンノキ亜属が２点であった。試料の形状は、破片になっており不明の試料が多いが、角材状やみかん割り状、丸木もみられた。クヌギ節の試料は年輪数が多く、特に辺材部では年輪が密に詰まった試料が多く確認された。試料は住居内で出土しており、建築部材であると考えられる。

クヌギ節とコナラ節、クリの材は重厚で加工困難で、ハンノキ亜属の材は軽軟で加工容易である（平井　1996）。埼玉県内の遺跡から出土した弥生時代の建築部材は、クヌギ節やコナラ節が多く確認されており（伊東・山田編　2012）、今回の分析結果も周辺地域の木材利用傾向と類似している。

[引用文献]
平井信二　1996『木の大百科』p.394　朝倉書店
伊東隆夫・山田昌久編　2012『木の考古学―出土木製品用材データベース―』p.449　海青社
伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂　2011『日本有用樹木誌』p.238　海青社

No.	遺　構	樹　種	形状(部位)	残存径(最大個体)(接線径×放射径)	残存年輪	年代測定番号
1	671Y	コナラ属クヌギ節	不明(節)	2.0×2.0cm	不明	—
2	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.8×1.2cm	8	—
3	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.8×1.5cm	10	—
4	671Y	コナラ属クヌギ節	不明(節)	3.0×2.0cm	不明	—
5	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.0×2.0cm	20	—
6	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	2.0×2.2cm	22	PLD-51475
7	671Y	ハンノキ属ハンノキ亜属	丸木?	直径1.2cm	7	—
8	671Y	コナラ属クヌギ節	角材状	2.0×4.0cm	45	—
9	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.0×2.0cm	30	—
10	671Y	クリ	みかん割り状(節)	1.5×1.3cm	3	—
11	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.0×2.0cm	6	—
12	671Y	ハンノキ属ハンノキ亜属	不明	0.1×0.2cm	2	—
13	671Y	コナラ属クヌギ節	角材状	1.5×2.5cm	20	—
14	671Y	コナラ属コナラ節	みかん割り状	半径4.0cm	22	—
15	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.3×1.2cm	10	—
16	671Y	コナラ属クヌギ節	角材状	2.3×3.0cm	47	—
17	671Y	コナラ属コナラ節	半割	直径4.0cm	23	—
18	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.2×0.3cm	1	—
19	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.0×2.5cm	26	—
20	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.2×0.5cm	8	—
21	671Y	クリ	不明	0.5×0.5cm	2	—
22	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.8×1.0cm	12	—
23	671Y	コナラ属クヌギ節	角材状	2.0×4.0cm	48	—
24	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.5×1.5cm	23	—
25	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.0×1.2cm	10	—
26	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.5×2.0cm	14	—
27	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.2×1.8cm	6	—
28	671Y	クリ	みかん割り状	半径3.5cm	9	PLD-51476
29	671Y	コナラ属クヌギ節	角材状	2.5×2.5cm	40	—
30	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.0×2.0cm	17	—
31	671Y	コナラ属コナラ節	丸木?	直径1.2cm	2	—
32	671Y	クリ	丸木	直径5.5cm	10	—
33	671Y	コナラ属コナラ節	丸木	直径0.9cm	2	—
34	671Y	コナラ属クヌギ節	角材状	2.5×2.5cm	5	—
35	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.0×2.0cm	32	—
36	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.6×1.2cm	20	—
37	671Y	コナラ属クヌギ節	みかん割り状	半径0.7cm	19	—
38	671Y	コナラ属クヌギ節	丸木	直径1.1cm	2	PLD-51477
39	671Y	不明	—	—	—	—
40	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.2×3.0cm	10	—
41	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.5×1.2cm	8	—
42	671Y	コナラ属クヌギ節	角材状	2.0×5.5cm	57	—
43	671Y	コナラ属クヌギ節	みかん割り状	半径4.5cm	15	—
44	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	2.5×2.5cm	8	—
45	671Y	コナラ属コナラ節	不明	0.8×1.5cm	8	—
46	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	0.5×1.0cm	4	—
47	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	2.0×2.5cm	18	—
48	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.3×2.3cm	12	—
49	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.0×1.3cm	16	—
50	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.7×2.7cm	30	—
51	671Y	コナラ属クヌギ節	みかん割り状	1.8×5.0cm	28	—
63	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.5×2.2cm	17	—
64	671Y	コナラ属クヌギ節	角材状	2.5×3.0cm	18	—
65	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	2.0×1.3cm	5	—
66	671Y	コナラ属クヌギ節	みかん割り状	1.6×3.5cm	10	—
67	671Y	コナラ属クヌギ節	不明	1.5×2.5cm	10	—

第36表　樹種同定結果一覧

第２節　放射性炭素年代測定

１．はじめに

志木市の西原大塚遺跡第243地点から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

試料は、671号住居跡（671Y）から出土した炭化材３点である。試料No.6（PLD-51475）は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。試料No.28（PLD-51476）と試料No.38（PLD-51477）は最終形成年輪が残存していた。

測定試料の情報、調製データは第37表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51475	遺構：671Y 試料No. 6	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51476	遺構：671Y 試料No. 28	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51477	遺構：671Y 試料No. 38	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

第37表　測定試料および処理

３．結果

第38表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、第61図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、

OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-51475 試料No. 6	−27.90±0.13	1874±19	1875±20	129−144 cal AD (15.85%) 154−194 cal AD (42.46%) 199−209 cal AD (9.96%)	123−226 cal AD (95.17%) 227−228 cal AD (0.28%)
PLD-51476 試料No. 28	−26.08±0.12	1806±19	1805±20	219−250 cal AD (49.63%) 295−309 cal AD (18.64%)	211−255 cal AD (59.04%) 285−325 cal AD (36.41%)
PLD-51477 試料No. 38	−33.36±0.11	1848±19	1850±20	133−137 cal AD (3.02%) 166−187 cal AD (18.00%) 202−236 cal AD (47.25%)	129−238 cal AD (95.45%)

第38表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

４．考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち２σ暦年代範囲（確率95.45％）に着目して結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については藤尾（2013）、古墳時代の暦年代については赤塚（2009）を参照した。

試料No.6（PLD-51475）は、123−226 cal AD（95.17％）および227−228 cal AD（0.28％）の暦年代範囲を示した。これは弥生時代後期に相当する。

試料No.28（PLD-51476）は、211−255 cal AD（59.04％）および285−325 cal AD（36.41％）の暦年代範囲を示した。これは弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。

試料No.38（PLD-51477）は、129−238 cal AD（95.45％）の暦年代範囲を示した。これは弥生時代後期に相当する。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料No.6（PLD-51475）は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。試料No.28（PLD-51476）と試料No.38（PLD-51477）は、最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は、木が伐採もしくは枯死した年代を示していると考えられる。

[引用文献]

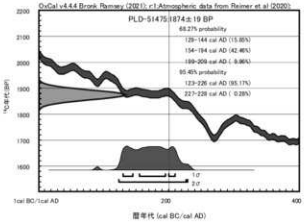
赤塚次郎　2009「弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代」『日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集』pp.14−20　日本文化財科学会

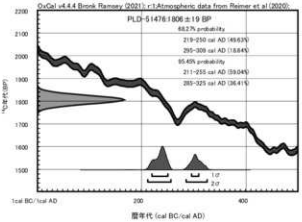
Bronk Ramsey, C.　2009『Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1)』pp.337−360

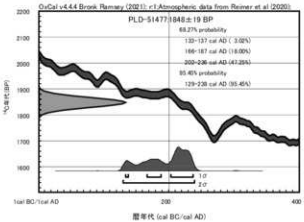
藤尾慎一郎　2013『弥生文化像の新構築』p.275　吉川弘文館

中村俊夫　2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編『日本先史時代の^{14}C年代』pp.3−20　日本第四紀学会

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S.　2020「The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0−55 cal kBP)」『Radiocarbon』62(4)：pp.725−757
doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-51475 1874±19 BP
68.2% probability
128-144 cal AD (15.85%)
154-194 cal AD (42.46%)
199-209 cal AD (9.96%)
95.4% probability
123-226 cal AD (95.17%)
227-228 cal AD (0.28%)
14C年代(BP)
1cal BC/1cal AD
200
400
暦年代 (cal BC/cal AD)


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-51476 1806±19 BP
68.2% probability
219-250 cal AD (49.63%)
295-309 cal AD (18.64%)
95.4% probability
211-255 cal AD (59.04%)
283-325 cal AD (36.41%)
14C年代(BP)
1cal BC/1cal AD
200
400
暦年代 (cal BC/cal AD)


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-51477 1848±19 BP
68.2% probability
133-137 cal AD (3.02%)
166-187 cal AD (18.00%)
202-236 cal AD (47.25%)
95.4% probability
129-238 cal AD (95.45%)
14C年代(BP)
1cal BC/1cal AD
200
400
暦年代 (cal BC/cal AD)

第61図　暦年較正結果

第３節　遺構採取土のリン・カルシウム分析

１．はじめに

志木市幸町に所在する西原大塚遺跡第243地点の縄文時代中期の遺構より採取した土について、蛍光Ｘ線分析によるリン・カルシウム分析を行い、骨が存在した可能性を検討した。

２．試料と方法

分析対象となる試料は、1011Ｄと1036Ｄの土器内より採取した土計３点である（第39表）。

分析No.	遺　構	層　位
1	1011D	胴部北側
2	1036D	3層（下層）
3		4層

第39表　分析対象試料

分析は、藤根ほか（2008）の方法に従って行った。この方法は、元素マッピング分析により、リン、カルシウムを多く含む箇所を面的に検出し、直接測定できるという利点がある。測定には、乾燥後、極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20ｔ・１分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-9000を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管が最大50kV、1000μAのロジウム（Rh）ターゲット、キャピラリ径が100μmまたは15μm、検出器はSDD検出器で、検出可能元素は炭素（C）～アメリシウム（Am）である。また、試料ステージを走査させながら測定して元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析が可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得た上で、リン（P）のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1000μA、キャピラリ径100μm、パルス処理時間Process3、ピクセルタイム30ms、20.992mm四方の範囲をピクセル数256×256pixで、ポイント分析では50kV、管電流自動設定、キャピラリ径100μm、測定時間100s、パルス処理時間Process5に設定した。マッピング図は、ピーク分離を行った。定量計算は、ナトリウム（Na_2O）、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al_2O_3）、ケイ素（SiO_2）、リン（P_2O_5）、硫黄（SO_3）、カリウム（K_2O）、カルシウム（CaO）、チタン（TiO_2）、マンガン（MnO）、鉄（Fe_2O_3）、ルビジウム（Rb_2O）、ストロンチウム（SrO）、イットリウム（Y_2O_3）、ジルコニウム（ZrO_2）の15元素について行った。値は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で算出された半定量値である。値は酸化物の形に換算し、検出元素の合計が100％になるようノーマライズされている。

３．結果および考察

試料のリンおよびカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った各５カ所の位置を示した図を図版28に示す。また、ポイント分析による半定量値と、元素マッピング分析の際に得られたマッピングエリア全体のスペクトルから算出した半定量値を、第40表に示す。なお、元素マッピング図は、元素ごとに輝度を相対的に比較できるように、各試料のブライトネスとコントラストを正規化した。

ヒトを含む動物の骨や歯は、ハイドロキシアパタイト$Ca_5(PO_4)_3OH$が主成分であり、すなわち蛍光Ｘ線分析ではリン（P）とカルシウム（Ca）がともに高く検出される。ただし、土壌中のリンとカルシウム

No.	ポイント	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO_2	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2
1	a	0.06	0.98	32.41	39.43	**1.27**	0.44	1.11	**1.05**	2.15	0.27	20.77	0.01	0.01	0.01	0.03
	b	0.06	0.96	32.89	41.37	**1.15**	0.34	0.96	**1.01**	1.94	0.25	19.03	0.01	0.01	0.01	0.02
	c	0.12	0.97	30.20	41.42	**1.26**	0.32	0.90	**1.89**	2.14	0.28	20.41	0.01	0.02	0.01	0.03
	d	0.17	0.99	27.56	45.44	**0.98**	0.60	1.06	**1.15**	2.00	0.29	19.70	0.02	0.01	0.01	0.03
	e	0.04	1.77	31.95	41.09	**1.02**	0.36	1.03	**1.80**	1.89	0.43	18.55	0.01	0.01	0.01	0.03
	エリア	0.01	1.08	30.64	42.40	**0.92**	0.34	1.01	**1.24**	2.09	0.29	19.93	0.02	0.01	0.00	0.02
2	a	0.03	0.99	30.62	39.29	**2.35**	0.35	1.08	**2.00**	2.01	0.40	20.82	0.01	0.01	0.01	0.03
	b	0.04	1.10	32.56	38.73	**1.29**	0.47	0.91	**1.57**	2.05	0.31	20.88	0.01	0.02	0.01	0.03
	c	0.08	1.00	31.23	37.96	**2.87**	0.36	0.90	**1.92**	2.07	0.32	21.23	0.01	0.01	0.01	0.03
	d	0.04	0.97	29.55	39.65	**1.92**	0.44	1.02	**2.38**	2.05	0.34	21.54	0.01	0.01	0.01	0.05
	e	0.21	1.53	23.87	49.32	**0.70**	0.30	0.70	**3.94**	1.66	0.32	17.41	0.01	0.01	0.01	0.03
	エリア	0.02	1.10	30.63	42.23	**0.76**	0.42	1.00	**1.51**	2.07	0.31	19.92	0.02	0.01	0.00	0.02
3	a	0.15	1.34	32.83	38.63	**1.56**	0.51	0.70	**1.13**	2.17	0.24	20.68	0.01	0.01	0.01	0.03
	b	0.20	0.90	30.28	43.23	**1.03**	0.51	0.96	**1.24**	1.95	0.24	19.38	0.01	0.02	0.01	0.03
	c	0.11	0.96	29.81	41.41	**1.31**	0.55	0.93	**1.49**	2.07	0.32	20.98	0.01	0.01	0.01	0.03
	d	0.43	0.82	27.93	46.65	**0.90**	0.42	1.35	**3.69**	1.55	0.18	16.01	0.01	0.01	0.01	0.02
	e	0.11	1.00	30.16	38.42	**0.96**	0.60	0.85	**1.17**	2.28	0.42	23.97	0.02	0.01	0.01	0.04
	エリア	0.02	1.10	30.65	42.13	**0.96**	0.50	0.95	**1.38**	2.06	0.27	19.93	0.02	0.01	0.00	0.02

第40表　半定量分析結果（mass％）

は鉱物由来の可能性も考慮する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素で、注意を要する。さらに、貝殻はもちろん、炭化材なども蛍光Ｘ線分析では高いカルシウム含有量を示す。このように、カルシウムのみの検出では骨由来であるか骨以外のもの由来であるかを判断し難いため、分析ではリンを中心に検討した。また、埋没した時には骨が存在していたが、埋没中に分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されない場合や、骨からビビアナイト$Fe_3(PO_4)_2 \cdot 8H_2O$が析出しているケースのように骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという場合もある。なお、骨や歯以外でリン、カルシウムがともに極めて多く含まれる物質として、尿の析出物がある。また、植物灰などもカルシウムとともにリンが多少含まれる。そのため、遺構の性格については、他の自然科学分析の結果、および遺物の出土状況や類例などの考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

以下、遺構ごとに結果をまとめる。

［1011D］（分析No.1）

1011Dの土器内の胴部北側の土である分析No.1は、リン（P_2O_5）が0.98 ～ 1.27％、カルシウム（CaO）が1.01 ～ 1.89％の値を示した。

リンとカルシウムがともに１％を超える、やや多い箇所が複数認められた。これらは骨や歯に由来する可能性がある。

［1036D］（分析No.2、3）

1036Dの土器内の３層（下層）の土（分析No.2）と４層の土（分析No.3）は、リン（P_2O_5）が0.70 ～ 2.87％、カルシウム（CaO）が1.13 ～ 3.94％の値を示した。

土器内の土２点（分析No.2、3）ともに、リンとカルシウムがともにやや多い箇所が複数認められた。これらは骨や歯に由来する可能性がある。

４．おわりに

西原大塚遺跡第243地点の1011D、1036Dより採取した土について、蛍光Ｘ線分析によるリン・カルシウム分析を行った結果、各遺構の土から、リンとカルシウムがともにやや多い箇所が検出された。これらは骨や歯に由来する可能性がある。遺構の性格については、遺物の出土状況や類例など、考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

[引用文献]
藤根　久・佐々木由香・中村賢太郎　2008「蛍光Ｘ線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析」『日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集』pp.108-109　日本文化財科学会

第５章　調査のまとめ

西原大塚遺跡第243地点で確認された主要な遺構は、縄文時代中期を主体とする土坑40基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡１軒・方形周溝墓３基である。

当該地においては、これまでの調査により、縄文時代中期と弥生時代後期～古墳時代前期の二つの時期に活発な土地活用がなされたことがわかってきている。本章では、この二つの時期に焦点を当て、周辺遺跡の調査成果の中に今回検出された遺構と遺物の位置付けを行いたい。

第１節　縄文時代中期

（１）縄文時代の遺構の分布状況

縄文時代の遺構は、土坑40基（1001 ～ 1003・1005 ～ 1041Ｄ）・ピット２本（33・36Ｐ）が検出された。住居跡は確認されていない。西原大塚遺跡では、これまでの調査の結果、縄文時代中期の住居跡が200軒以上で大規模な環状集落を形成していることが判明している。徳留彰紀氏が集成した縄文時代中期遺構の分布図（徳留　2015ａ）によれば、今回の調査地点は住居群の環状帯に囲まれた広場の中央付近に位置し（第62図）、住居跡群まで北東側は約70ｍ、南西側は約40ｍ、北西側は約50ｍ、南東側は約30ｍ離れている。今回、面積約600㎡の調査で住居跡が確認されなかったことは、環状集落の存在を追認する形となった。

（２）土坑の分布

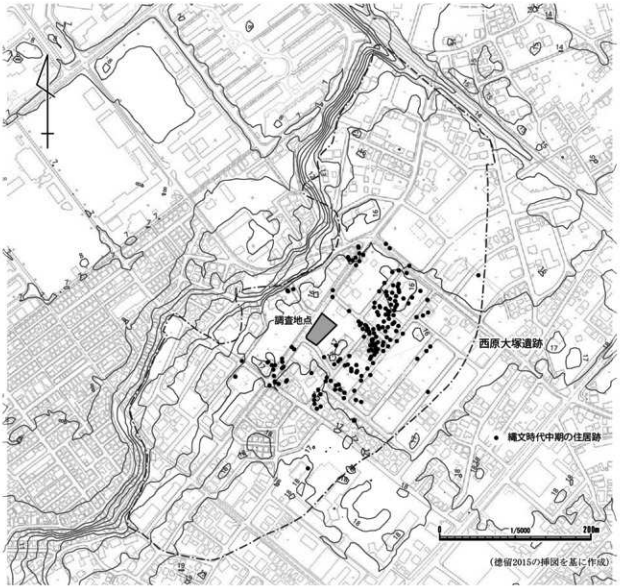
縄文時代の墓制研究史上、環状集落の中央空間は土壙墓群が残された例が多く、墓域として意識されていたと考えられている（谷口　2013）。本地点においては、40基の土坑がおよそ調査区全体に満遍なく分布し、本調査区の西側に近接する第120地点でも、縄文時代の土坑（496 ～ 557Ｄ）が多数検出されている（佐々木ほか　2008）。

今回の調査では、1011Ｄで状態の良い深鉢形土器（第15図１）が出土し、1036Ｄでも大型の深鉢形土器（第35図１）が逆位で出土した。さらに、1011Ｄと1036Ｄの土器内の覆土についてリン・カルシウム分析を行った結果、比較資料を欠く点で課題を残したが、ともに骨や歯由来と考えられるリンとカルシウムがやや多い箇所が認められ（第４章）、墓域であった可能性を示す事例となった。特に1036Ｄ１の土器と共に出土した、渦巻文が目立つ別個体の土器片１点（第35図２）と、打製石斧１点（第35図３）は、副葬された可能性も考えられ、特筆される。

（３）出土土器について

西原大塚遺跡第243地点で図示できた縄文土器は土坑と遺構外から出土している。中でも1005・1011・1036Ｄからは各土坑に埋設されたと考えられる縄文土器の深鉢が出土し、小破片が大半を占める今回の出土土器の中にあって、この３点のみ復元実測が可能であった。

西原大塚遺跡の所在する武蔵野台地北東部の縄文時代中期の土器については、近年徳留氏が既存の土



第62図　西原大塚遺跡における縄文時代中期住居跡の分布状況（１／5,000）

器編年研究や新地平編年（小林・中山・黒尾　2004、黒尾　2016）、新地平編年との対比が明らかな編年論（中山・宇佐美・武川・黒尾　2004、大網　2016、櫛原　2016）を枠組みに用いて土器様相を示しており（徳留　2015ａ・2015ｂ・2019）、西原大塚遺跡第174地点において、出土土器を１～10期の各期に比定されている（徳留　2022）。

第174地点の時期区分は西原大塚遺跡１期～４期が勝坂式期、５～10期以降が加曽利Ｅ式期である。1005・1011・1036Ｄの３点は本文で述べたように加曽利Ｅ式期後半のものであり、全て９期：加曽利Ｅ２ｃ～３ｂ式期の範囲に収まるとみられる。

しかしながら、３点の文様構成や施文の順序などには相違点が認められるため、ここでは現時点で多摩丘陵・武蔵野台地の縄文時代中期全体を16期、37細別し、徳留氏の論考の大枠にもなっている新地平編年に準拠することでより詳細な位置づけを行い、３点の土器様式の差異を明確に示して西原大塚遺跡出土土器の基礎資料追加への一助となすことを目的とし以下に考察を試みる。なお、上記の９期は新地平編年に対照すると、11ｃ期・12ａ期・12ｂ期に相当すると考えられる。

1005号土坑出土土器（第９図１）

遺構の削平を受け、口縁部以下を大きく欠失している。口縁部はキャリパー形で、隆帯と沈線により円形と楕円形区画文を描出し、区画内は横位ＲＬ単節縄文を施文するものと無文のものがある。胴部は平行沈線を垂下し、沈線間を磨消す他は、縦位ＲＬ単節縄文を施文している。加曽利Ｅ式後半期の特徴である磨消懸垂文を有し、口縁部文様帯に渦巻文は描出されず、地文の縄文を施文した後に隆帯や沈線による主文様を描出することから、新地平編年12ｂ期に比定される。

1011号土坑出土土器（第15図１）

底部を欠失しており、遺存率は70％程度とみられる。口縁部は直立して開くキャリパー形で、頸部との明瞭な境は無く胴部に至る。胴部は中位より下部分でやや括れ、丸みをもちながら底部に向かってすぼまる形状である。口縁部は沈線で大小７個の楕円区画を施文し、区画間を縫うように沈線を巡らせる。頸部は無文帯を有し、胴部は括れを境に文様帯が上下に分かれ、上段は端部が蕨手状の沈線による大柄の渦巻文が４単位、文様間に上下端が蕨手状の縦位沈線を施文する。下段は沈線による逆Ｕ字区画文と端部が蕨手状の縦位沈線が交互に施文され、全ての区画内にＲＬ単節縄文が多方向に充填される。口縁部に沈線のみによる単純な楕円区画を横位に配列し、加曽利Ｅ式期前半に特徴的である口縁部へ隆帯と沈線による様々な文様を集約する意識が希薄となってきている様相がみられるが、頸部無文帯は幅狭ながら維持している。胴部は大柄渦巻文の梶山類（神沢　1970）と括れを有する器形と磨消懸垂文・蕨手文を組み合わせる吉井城山類（岡本　1963）の特徴を融合させた文様構成である。口縁部文様帯は維持しつつ、主文様を施文した後に縄文を充填する特徴などから新地平編年12ｂ期でも後出の部類に比定される。

1036号土坑出土土器（第35図１）

口縁部は僅かに内湾するキャリパー形で、胴下部は括れ、以下は欠失。地文は縦位のＲＬ単節縄文。口縁部文様帯は隆帯と沈線により渦巻文と区画文を構成し、口縁部と胴部の間に弱い稜を有している。加えて、口縁部と胴部の間で地文の施文範囲を切替えることにより、文様帯の境を表しているとみられる。胴部は平行沈線を垂下し、沈線文間を磨消している。1005・1011Ｄ出土土器と比べ、口縁部文様帯が強調されて渦巻文が残り、主文様より先に地文として縄文が施されている点などが他の２点よりも古相を示しており、口縁部キャリパー形を呈し、渦巻隆帯モチーフの加曽利ＥⅡ式を踏襲していることからも新地平編年12ａ期に比定される。

以上、1005・1011・1036Ｄ出土土器の編年的位置付けを行った結果、1036Ｄ（12ａ期）→1005Ｄ（12ｂ期）→1011Ｄ（12ｂ期後出）の順で施文への意識の変容が見て取れた。また、小破片を含む第243地点全体の様相としては、中期中葉の阿玉台式期の土器が僅かに混入する程度である点、その後中期中葉から後葉まで資料が認められ、特に中期中葉末の勝坂３式期の資料が豊富である点、後葉の加曽利Ｅ式期には曽利式や連弧文系の異系統土器も混じる点など、過去に調査されてきた西原大塚遺跡の縄文時代中期土器の様相に沿う状況を示していると言える。加えて、土坑から出土した復元個体縄文土器が全て中期後葉のほぼ同時期の加曽利Ｅ式期の土器である事が西原大塚遺跡の集落構成における当地点の特徴的な様相なのか、興味深い成果を得ることができたと言えよう。

第２節　弥生時代後期～古墳時代前期

（1）検出遺構の概要

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、住居跡１軒（671Ｙ）・方形周溝墓３基（25・37・38方）が検出された。西原大塚遺跡で当該期に属する住居跡は今回で671軒目を数える。671Ｙは、南東が調査区境にかかっているため、全体の３分の１程度が確認できたのみで、出土遺物も少ないが、炭化材がまとまって検出された点は特筆される。

方形周溝墓の１基については、平成16年調査の区画整理第70地点で確認されていた25方（佐々木ほか　2009）の続き部分の調査であり、今回の調査で遺構の全容が判明した。37・38方は、調査区内にほぼ全体が収まる調査環境に恵まれたものの、出土遺物は概して少ない。

以下で用いる弥生時代後期～古墳時代前期における土器の編年・様式区分名については、比田井克仁氏による南武蔵の編年案（比田井　2001・2008）を基本とした。

（2）住居跡に見られる付属施設と主柱穴の構築法について

671Ｙは、短軸4.67ｍで遺存する。本住居跡は炉の周辺と主柱穴２本が確認できたのみで全容が判然としないが、本遺跡における宅間清公氏と遠藤知成両氏による分類では（宅間　2021・遠藤　2021）、平面形が円形もしくは小判形となるⅠ、Ⅱａ、Ⅱｂ類のいずれかに属する。宅間氏が集成した「西原大塚遺跡　弥生住居規模散布図」に短軸規模を当てはめると、本遺跡においては平均的な規模の住居跡であると言えよう。

遺構に伴う遺物は少なく、炉の南東手前側の赤化面上で検出された広口壺形土器の口縁部破片（第41図１）が主なものである。折返し口縁でヘラ磨き調整が見られる。弥生時代後期Ⅲ段階に位置付けられると考えられる。炉の手前側に半冠状の土器破片が遺棄・埋設されている例には、管見でも川口市小谷場貝塚遺跡第22次調査地点の第11号竪穴建物跡（小林ほか　2021）、板橋区志村坂上西方遺跡第５地点の第２号竪穴建物跡（下岡　2024）等があり、土器片は炉に伴う付属施設と見なすことができる。

671Ｙの主柱穴（Ｐ１・Ｐ２）は、貼床上では小径（17～20㎝）の柱痕跡のみが確認された。土層断面の観察では、柱穴の掘り方本体（径約80㎝）は貼床上からではなく、掘り方底面から掘り込まれており、柱材に寄せるように築立てられた貼床構築土に覆われている（第38図、写真図版10－１・５）。柱材の設置に際しては、粗掘りされた掘り方の底面に大径の柱穴を掘り込み、その中に仮架構した柱材を据えて柱穴との隙間に土を充填し、その後に貼床構築土を盛り立てたと考えられる。当該期の調査報告では、床面上から主柱穴が掘り込まれたように見受けられる実測図が多い。しかし、貼床構築に先行して掘り方底面に柱穴を掘り込む例は、大宮台地に位置する小谷場貝塚遺跡の調査でも複数の事例（註１）が認められることから（小林ほか　2024）、一般的な構築法の一つであったと考えられる。

（3）住居跡から検出された炭化材について

671Ｙの床面直上では、炭化材と島状に点在する焼土が検出された。炭化材は最大で径5.5㎝、長さ52㎝のものがある。

放射性炭素年代測定の結果、試料No.6が123-226 cal AD（95.17％）および227-228 cal AD（0.28％）、

試料No.28が211-255 cal AD（59.04％）および285-325 cal AD（36.41％）、試料No.38が129-238 cal AD（95.45％）の暦年代範囲を示した。最終形成年輪が残存する後者２試料が示した２世紀前葉～４世紀前葉は、比田井氏による暦年代観では、弥生時代後期中葉（弥生時代後期Ⅱ段階新相）～古墳時代前期中葉（古墳時代前期Ⅱ段階）に相当する（比田井　1997）。

炭化材56点を対象に、自然科学分析による樹種同定を実施した結果は、クヌギ節44点、コナラ節５点、クリ４点、ハンノキ亜属２点、不明１点であった。本遺跡ではクヌギ節の利用が主体的であることが指摘されている（大久保　2020）。第４章によれば、埼玉県内の遺跡から出土した弥生時代の建築部材はクヌギ節とコナラ節が多く確認されており、今回の分析結果も周辺地域の木材利用動向と類似するという。今回の分析試料においては丸木の他に割材、板材の存在が指摘されている。クヌギ節・コナラ節・クリは割裂性が良いとされる樹種であり（伊東ほか　2011）、同定結果は周辺の植生環境を反映するのみならず、割り加工に適した樹種が選択的に利用されたことを示している可能性がある。

なお、主柱穴のＰ１とＰ２の直近の床面には小規模な赤化が認められた。先述のように、貼床の築立てに先行して柱材を設置した場合、可燃材の直近で床を焼き固めたとは考えにくく、床面の赤化は柱材の罹災状況を間接的に示すと考えられるが、柱材を狙った意図的な着火の可能性も捨てきれず、今後の調査事例を待ちたいと思う。

（４）方形周溝墓の形態について

今回検出された３基の方形周溝墓の軸線方向は、各北東溝で比較すると、25方がＮ－34°－Ｗ、37方がＮ－35°－Ｗ、38方がＮ－39°－Ｗとほぼ同様である。

本地点で最も主要な遺構となった37方は、周溝外縁で約11ｍ四方の規模を測る。全体形状は完全な正方形ではなく歪みがある。但し、周溝の対辺がほぼ平行となっている。特定の縄張り方法によるものか、同様な歪みは本遺跡の16・30方で認められる。

37方の周溝について断面の立ち上がりを見ると（第46図）、方台部側の傾斜が急である。同様な傾向は17方の調査等でも指摘されている（佐々木ほか　2000）。また、覆土の最下層には多量のロームブロックを伴う褐色土やにぶい黄褐色土の堆積が認められた。周溝の掘削に際しては、粗掘りの後、底面のならしが行われた結果と考えられる。これらの諸傾向は、方形周溝墓の一部が検出された際に遺構性格を特定する上での目安となると思われる。

方形周溝墓の平面分布をみると、25方は、調査区南西側の区画整理70地点で確認された26方の北東側にコの字形の溝を連結させた拡張部である（第43図）。25方の構築時期は26方に後続することになる。さらに38方は、25方の北東溝を共有する形で北東側に構築されたと考えられる。従って、３基の方形周溝墓は26方、25方、38方の順で構築時期を異にしながらも、並立する期間があり、廃絶年代はほぼ同じであった可能性がある。

26方は西隅と南隅に掘り残しのブリッジが造り出されている。25方を単独で見ると周溝が26方に連結されているためにブリッジを持たないが、26方と惣体として見れば南西側にブリッジを伴うことになる。改めて26方の形状を確認すると、周溝外周で規模9.0×7.8ｍの長方形を呈しており、正方形では無い。25号方形周溝墓を継ぎ足した結果も規模13.4×8.1ｍの長方形となっている。これは、高橋学氏が指摘する、拡張した方形周溝墓はブリッジの有無を含めて「基本的には拡張前の周溝形態を踏襲する」（高橋　2001）傾向に則している。長方形の26方は、37方などの正方形の周溝墓とは異なり、

方台部を１方向に延伸することによって拡張が可能な形状を予め備えていたとも言える。26方の方台部と25方の方台部が連結されていた可能性については、25方と26方の北東溝の覆土断面の相違を同時観察し得ていないためここでは判断できない。ただ、26方に付帯するブリッジを再び利用して拡張部に出入りするとすれば、26方の北東溝を埋め戻して方台部が連結されていた可能性は高い。

一方、25方の北東側に連接された38方の方台部は7.8×10.3ｍと規模が大きく、形状は正方形化しており、その北西溝は25・26方の北西溝と同一直線上には無い。また、25方の周溝とは連結されておらず、西隅角部にブリッジが確保されていることから、25方の北東溝は埋め戻されることなく38方と共用されていたと考えられる。

一般に方形周溝墓に付帯する方台部の盛土は、溝の縁辺際まで裾が広がる低平な角錐台形のイメージであるが、その場合、25方の北東溝を挟んで25方と38方の盛土が屹立することになり、溝内への崩落土流入防止に腐心するのではなかろうか。さらに周溝の掘削土で主体部を覆う厚さの墳丘を方台部全体に盛土した場合、大規模になるほど相対的に細くなる周溝の掘削土量で、主体部を覆う厚みを持つ角錐台の盛土量を確保できるのかは疑問である。むしろ、方台部の盛土は、熊谷市下田町遺跡の第12号方形周溝墓（中山　2006）で確認されたマウンドのように、周溝内周より一回り小さな盛土であったと考えるのが自然であろう。さらに角錐台形に拘泥せず、円形に近い平面形状の盛土が存在した可能性を考えても良いと思われる。方台幅7.8～10.3ｍに対し幅約１ｍの周溝には、より大型の平面区画を誇示するための機能が期待されていたのではなかろうか。37方も幅9.16～9.35ｍの方台部に対し溝の幅は１ｍ内外の10分の１程度である。37方と38方に認められる周溝の深度差（37号：溝の深さ0.49～0.82ｍ、38号：溝の深さ0.18～0.37ｍ）も、盛土直径の設計次第で、主体部を覆う厚さの盛土を周溝の掘削土で賄えたことを示していると考えられる。

25方は、26方の全体形状の延伸により「拡張」を図ったものである一方、38方は25方に「連接」されたものであり、いずれもコの字形の溝を配して構築されているが、その設計思想は異なるものと考えられる。

（５）方形周溝墓の年代

25方の年代については、東コーナーから略完形の高坏形土器が出土している（第44図１）。中部高地系の鍔状口縁高坏とされる（佐々木ほか　2009）。ほかに、壺形土器に弥生時代の範疇で捉えられる幅広複合口縁を持つもの（第44図２）があることから、弥生時代後期後葉～末葉（弥生時代後期Ⅲ段階）としたい。

37方については、浅身の坏部とハの字状に開く脚台部の高坏（第45図１・２）などから、弥生時代後期末葉（弥生時代後期Ⅲ段階新相）としたい。

38方の出土遺物は少なく、図示し得たのは壺形土器の口縁部破片のみである（第49図１）。遺物は弥生時代的な様相を残す一方、38方は25方に後続することから弥生時代後期後葉（弥生時代後期Ⅲ段階古相）～古墳時代前期初頭（古墳時代前期Ⅰ段階古相）としたい。

以上の新旧関係をまとめると（旧→新）、

・25方（弥生時代後期Ⅲ段階）→37方（弥生時代後期Ⅲ段階新相）→38方（弥生時代後期Ⅲ段階古相～古墳時代前期Ⅰ段階古相）

となろう。

一方、これまでの調査で西原大塚遺跡における方形周溝墓の変遷についての考察が為されてきた。それらの成果を模式的に示すと、以下の新旧と比田井氏編年との対比が示されている（旧→新）。

・１方→10方→17方（上田　2000）
・５方（弥生時代後期Ⅲ段階古相）→11方（弥生時代後期Ⅲ段階古相）→６方（弥生時代後期Ⅲ段階新相）→22方（弥生時代後期Ⅲ段階新相）→４方（古墳時代前期Ⅰ段階古相前半）→16方（古墳時代前期Ⅰ段階古相後半）→10方（古墳時代前期Ⅰ段階古相後半）→17方（古墳時代前期Ⅰ段階新相）→２方（古墳時代前期Ⅱ段階）（宮川　2003・2008）
・30方（古墳時代前期Ⅰ段階古相前半初頭）→29方（古墳時代前期Ⅰ段階古相前半の後半）→33方（古墳時代前期Ⅰ段階古相後半初頭）→31・32方（古墳時代前期Ⅰ段階古相後半～古墳時代前期Ⅰ段階新相）（宮川　2008）

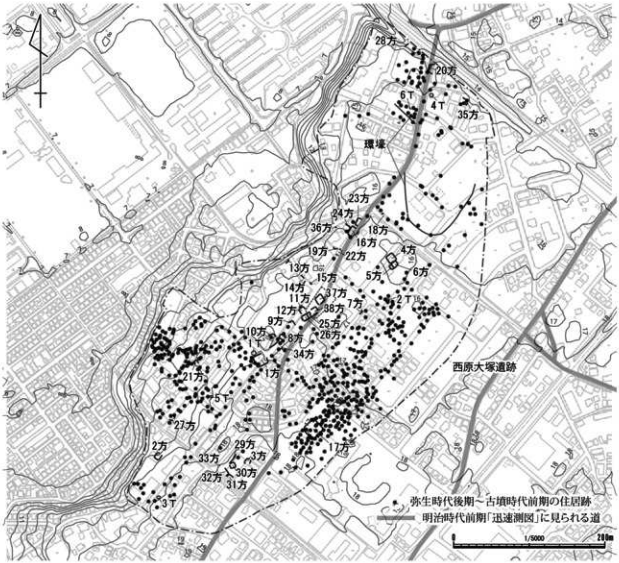
あらためて遺物内容を確認すると、目を引くのは30方である。30方の遺物群には、頸部中央に沈線区画の羽状縄文帯が施された壺形土器や、外面ハケ目調整で胴部と脚部の継ぎ目に凸帯を伴う甕形土器の脚台部破片など、比田井氏の基準に照らし合わせると、弥生時代後期Ⅱ段階以前の様相を残すものがある。30方の年代は、弥生時代後期Ⅱ段階古相に遡る可能性があり、本遺跡で確認されている方形周溝墓の中では、最も古い時期に位置付けておきたい。

概ね、西原大塚遺跡における方形周溝墓の造営期間は、弥生時代後期Ⅱ段階古相から古墳時代前期Ⅱ段階の間で捉えられる。今回検出された３基の方形周溝墓（25・37・38方）の年代は、その前葉～中葉に位置付けられる。また、方形周溝墓造営の担い手を見ると、尾形則敏氏は西原大塚遺跡第70・72地点の調査で住居跡及び出土土器の時期区分を行い、弥生時代後期後葉の１期から古墳時代前期後葉の６期を設定し、比田井氏編年の弥生時代後期Ⅲ段階古相から古墳時代前期Ⅲ段階に対比させている（尾形　2023・2024）。方形周溝墓が盛んに構築されるのは、弥生時代後期Ⅲ段階以降とみて良いだろう。

（６）方形周溝墓の分布について

西原大塚遺跡でこれまでに確認された方形周溝墓は38基を数える。それらの立地環境は、台地の縁辺付近に集中している（第63図）。さらに詳細に見ると、方形周溝墓群は、崖線からやや離れた標高16m以上のほぼ平坦な緩斜面に列をなしており、奇しくも区画整理事業以前の1980年代まで存在した旧道と重なる。この道を遡及すると、少なくとも、明治時代前期測量の「第一軍管地方２万分１迅速測図原図」（以下、「迅速測図」）には描かれている（註２）。道は、本遺跡付近では、等高線が突き出た部分に直交しながら伸びていることから、尾根道であったと考えられる。従って、起伏の少ない集落内にあっても方形周溝墓は、視覚的に優位な尾根線を求めて占地したと考えられる。穿った見方をすれば、方形周溝墓が構築される以前から旧道の前身となる道がすでに存在し、道沿いに方形周溝墓が展開していったとも想像できる。

列を成す方形周溝墓群は、北側から見ていくと、遺跡北部の20・28・35方、その約200ｍ南に16・18・23・24・36方、その南側崖線寄りに13・14・15・19・22方、その南側に11・12・25・26・37・38方、その南側に１・８・９・10・34方、その約100ｍ南に３・29・30・31・32・33方がそ



第63図　西原大塚遺跡における弥生時代後期～古墳時代前期の遺構分布（１／5,000）

れぞれ５～６基程度でまとまり、６群程度に分かれて分布しているように見受けられる。

一方、旧道ラインから東側にやや離れて位置する４・５・６方の一群と、加えて高所に位置する17方では遺物内容が豊富である点は興味深い。

４方では略完形の複合口縁壺形土器や高坏形土器、５方では、三叉文が描かれた「記号土器」（藤波　2024）、６方では壺形土器や台付甕のほか、主体部からガラス製小玉、碧玉製管玉、翡翠製小玉が出土している（徳留ほか　2024）。17方は一辺20ｍを超える市内最大級の方形周溝墓であり、鳥形土器のほか、畿内系二重口縁壺形土器、吉ヶ谷式系土器、在地のもの（土器）と３要素の特徴を示す壺が出土している（上田　2000）。

他方、第63図に見る当該期の住居跡の集中域は、旧道ラインを補助線として、分布が濃厚なものから順に、南東部、西部、東部、北部、やや希薄な南西部の５群程度には分けられそうである。今後の調査の進展と、住居跡の年代観の精査を経ねばならないが、予察を加えると、方形周溝墓が累積の結果、数箇所に集中しつつ分散して分布する状況からは、遺跡全体で同数程度に分けられるレベルの集団が、大きく移動することなく、継続的に住居と方形周溝墓を構築していった様子が窺える。概数で見ると、

比田井氏の暦年代観（比田井　2008）を参考に（註３）、方形周溝墓群の造営期間をＡＤ100（弥生時代後期Ⅱ段階古相）からＡＤ350年頃（古墳時代前期Ⅱ段階）までの約250年間とした場合、１世代を30年と仮定すると約８世代。方形周溝墓38基を世代数で割り返すと各時期約４～５集団となる。実際はどうであろうか。本遺跡における新たな発見と、住居跡の詳細な編年作業を通じて、方形周溝墓の位置付けがより具体的になることを期待したい。

［註］

註１　第27次調査Ｃ区第12・15号竪穴建物跡などの例がある。また、第28次調査を担当した田中信氏のご教示。

註２　明治時代前期測量の「第一軍管地方２万分１迅速測図原図」に描写された主要な道について、平成８年（1996）測量の1/2,500志木市都市計画図上で区画整理事業以前の道路の屈曲を目安として復元トレースし、現在の地図に重ねた。

註３　比田井氏は久ヶ原式土器が出現した時期を弥生時代後期初頭とした場合、AD50を後期初頭とし、AD100までが後期Ⅰ段階（古相・新相）、AD150までが後期Ⅱ段階（古相・新相）、AD225までを後期Ⅲ段階（古相・新相）としている（比田井2008）。

[引用・参考文献]

青池紀子　2024「第５章調査のまとめ　第２節弥生時代後期～古墳時代前期」『西原大塚遺跡第239地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第99集　埼玉県志木市教育委員会

伊東隆夫ほか　2011『カラー版　日本有用樹木誌』第２版

上田　寛　2000「第３章まとめ　３．方形周溝墓について」『西原大塚遺跡第45地点　発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第６集　埼玉県志木市遺跡調査会

遠藤知成　2021「第４章調査のまとめ 第２節弥生時代後期～古墳時代前期（1）弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡について」『西原大塚遺跡第223地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第83集　埼玉県志木市教育委員会

大久保聡・尾形則敏　2020『西原大塚遺跡第220地点　西原大塚遺跡第222地点　西原大塚遺跡第227地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第75集　埼玉県志木市教育委員会

大久保聡　2020「第５章調査のまとめ　第３節西原大塚遺跡第227地点の調査成果（２）603・604号住居跡出土の炭化材について」『西原大塚遺跡第220地点　西原大塚遺跡第222地点　西原大塚遺跡第227地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第75集　埼玉県志木市教育委員会

大網信良　2016「武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：連弧文系」『シンポジウム縄文研究の地平2016―新地平編年の再構築―発表要旨』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会

尾形則敏　1990「第２章西原大塚遺跡第８地点の調査　第５節まとめ」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集　埼玉県志木市教育委員会

2023「第４章調査のまとめ　第１節弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物について」『埋蔵文化財調査報告書９西原大塚遺跡第70地点』志木市の文化財第91集　埼玉県志木市教育委員会

2024「第４章調査のまとめ　第１節弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物について」『埋蔵文化財調査報告書10　西原大塚遺跡第72地点』志木市の文化財第95集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・深井恵子　2000『志木市遺跡群10（西原大塚遺跡第37地点　西原大塚遺跡第39地点　中道遺跡第44地点Ⅱ）』志木市の文化財第28集　埼玉県志木市教育委員会

2003『志木市遺跡群13（田子山遺跡第78地点　西原大塚遺跡第54地点Ⅱ）』志木市の文化財第35集　埼玉県志木市教育委員会

岡本　勇　1963「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第７号　横須賀市自然・人文博物館

加納　実　2024「千葉県緑区鎌取遺跡の再検討―小規模遺跡の分析に向けて②―」研究連絡誌89　公益財団法人　千葉県教育振興財団文化財センター

神沢勇一　1970『稲山遺跡（３）』神奈川県立博物館発掘調査報告書第４集　神奈川県立博物館

櫛原功一　2016「武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：曽利式―多摩地域の曽利式―」『シンポジウム縄文研究の地平2016―新地平編年の再構築―発表要旨』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会

黒尾和久　2016「基礎報告３：加曽利Ｅ式」『シンポジウム縄文研究の地平2016―新地平編年の再構築―発表要旨』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会

小林謙一・中山真治・黒尾和久　2004「１．多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジウム縄文集落研究の新地平３―勝坂式から曽利へ―発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会

小林竜太ほか　2021『小谷場貝塚遺跡―区画整理事業に伴う第22次埋蔵文化財発掘調査―』川口市教育委員会

2024『小谷場貝塚遺跡―区画整理事業に伴う第27次埋蔵文化財発掘調査―』川口市教育委員会

佐々木保俊・尾形則敏　1991『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第16集　埼玉県志木市教育委員会

1996『城山遺跡第12地点　城山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第14地点　中野遺跡第11地点　中野遺跡第16地点　市場裏遺跡第１地点　田子山遺跡第10地点　中道遺跡第21地点　田子山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第21地点　市場裏遺跡第２地点　中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集　埼玉県志木市教育委員会

佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳　2008『西原大塚遺跡第120地点・西原大塚遺跡131地点・田子山遺跡第97地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第15集　埼玉県志木市遺跡調査会

2009『西原大塚遺跡Ⅰ～Ⅲ』志木市遺跡調査会報告書第13集　埼玉県志木市遺跡調査会

佐々木保俊・関根正明・上田　寛・内野美津江・宮川幸佳　2000『西原大塚遺跡第45地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第６集　埼玉県志木市遺跡調査会

下岡孝明　2024「第３章遺構と遺物　第２節弥生時代後期～古墳時代前期」『東京都板橋区志村坂上西方遺跡第５地点発掘調査報告書』株式会社中野技術

高橋　学　2001「いわゆる拡張した方形周溝墓の一事例―朝霞市向山遺跡例の紹介―」『あらかわ』第４号　あらかわ考古談話会

宅間清公　2021「第４章調査のまとめ　第２節弥生時代後期～古墳時代前期（３）住居構造について」『西原大塚遺跡第228地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第79集　埼玉県志木市教育委員会

谷井　彪・細田　勝　1995「関東の大木式・東北の加曽利Ｅ式土器」『日本考古学』第２号　一般財団法人日本考古学協会

谷口康浩　2013『墓域からみた縄文社会』『事典　墓の考古学』土生田純之編

徳留彰紀　2015 a「埼玉県志木市西原大塚遺跡における縄文中期集落研究の基礎的資料」『あらかわ』第16号　あらかわ考古談話会
2015 b「第4章調査のまとめ　第1節縄文時代」『志木市遺跡群22（西原大塚遺跡第174①～④地点）』志木市の文化財第64集　埼玉県志木市教育委員会
2019「武蔵野台地北東部および大宮台地における勝坂式終末期から加曽利E式初頭期の土器様相」『考古学の地平Ⅱ―縄文時代中期の土器論と生業研究の新視点―』山本典幸・考古学の地平グループ編
2022「第4章調査のまとめ　第1節縄文時代の土器について」『志木市遺跡群25（西原大塚遺跡第174②～⑤地点）』志木市の文化財第85集　埼玉県志木市教育委員会
徳留彰紀・尾形則敏・青木　修　2017『市場裏遺跡第23地点　城山遺跡第87地点　西原大塚遺跡第207地点　中野遺跡第95地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第68集　埼玉県志木市教育委員会
徳留彰紀・尾形則敏・深井恵子　2015『西原大塚遺跡第172①～④地点』志木市の文化財第64集　埼玉県志木市教育委員会
徳留彰紀・尾形則敏・藤波啓容・松木綾子・中村真理・新海達也　2024『埋蔵文化財調査報告書11　西原大塚遺跡第35地点』志木市の文化財第97集　埼玉県志木市教育委員会
中山真治・宇佐美哲也・武川夏樹・黒尾和久　2004「東京編年表（「東京①・②」）とその解説」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3―勝坂式から曽利へ―発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
中山浩彦　2006「Ⅳ遺構と遺物　1．方形周溝墓」『熊谷市　下田町遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書320集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
比田井克仁　1997「弥生時代後期における時間軸の検討―南武蔵地域の検討を通して―」『古代』第103号　早稲田大学考古学会
2001『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版
2008「久ヶ原式の展開と史的背景―暦年代の再検討を含めて―」『国士舘考古学』第4号　国士舘考古学会
藤波啓容　2024「第4章調査のまとめ　第3節西原大塚遺跡出土の記号土器について」『埋蔵文化財調査報告書11　西原大塚遺跡第35地点』志木市の文化財第97集　埼玉県志木市教育委員会
細田　勝　2008『加曽利E式土器』『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会
宮川幸佳　2003「西原大塚遺跡における方形周溝墓出土土器」『埼玉考古』第38号　埼玉考古学会
2008「第3章西原大塚遺跡第131地点の調査　第3節小括」『西原大塚遺跡第120地点　西原大塚遺跡第131地点　田子山遺跡第97地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第15集　埼玉県志木市遺跡調査会

図　　版

図版1　西原大塚遺跡第243地点

1．調査前現況（南から）

2．表土剥ぎ（北東から）

3．旧石器試掘坑TP1西壁（東から）

4．旧石器試掘坑TP2西壁（東から）

5．旧石器試掘坑TP3西壁（東から）

6．旧石器試掘坑TP4西壁（東から）

7．旧石器試掘坑TP5西壁（東から）

8．旧石器試掘坑TP6西壁（東から）

図版2　西原大塚遺跡第243地点

1．1001号土坑完掘（北西から）

2．1001号土坑遺物出土状況（北西から）

3．1002号土坑完掘（北から）

4．1003号土坑完掘（北西から）

5．1005号土坑遺物出土状況（南から）

6．1005号土坑完掘（南から）

7．1006号土坑完掘（南西から）

8．1007号土坑完掘（西から）

1．1008号土坑完掘（北西から）

2．1008号土坑遺物出土状況（北から）

3．1009号土坑完掘（北東から）

4．1010号土坑完掘（北東から）

5．1011・1012号土坑土層断面（北から）

6．1011号土坑遺物出土状況（南西から）

7．1011号土坑土器内土層断面（北から）

8．1011号土坑遺物出土状況（東から）

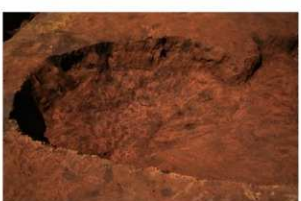
図版4　西原大塚遺跡第243地点

1．1011号土坑完掘（南から）

2．1011号土坑調査風景

3．1012号土坑完掘（西から）

4．1013号土坑土層断面（南西から）



5．1014号土坑完掘（北から）

6．1015号土坑完掘（北東から）

7．1016号土坑完掘（南東から）

8．1017号土坑完掘（北から）

1．1017号土坑遺物出土状況（北東から）

2．1018号土坑土層断面（北西から）

3．1019号土坑完掘（南から）

4．1019号土坑土層断面図（北西から）

5．1020号土坑完掘（西から）

6．1021号土坑完掘（北から）

7．1022・1023号土坑完掘（南東から）

8．1023号土坑遺物出土状況（南東から）

1．1024号土坑完掘（北東から）

2．1025・1026号土坑完掘（北東から）

3．1028号土坑完掘（南東から）

4．1029号土坑完掘（東から）

5．1030号土坑完掘（西から）

6．1031号土坑完掘（北西から）

7．1031号土坑遺物出土状況（東から）

8．1032・1033号土坑完掘（南西から）

1．1034号土坑完掘（南西から）

2．1034号土坑遺物出土状況（北東から）

3．1035号土坑完掘（南西から）

4．1036号土坑土層断面（北東から）

5．1036号土坑遺物出土状況（南東から）

6．1036号土坑遺物出土状況（東から）

7．1036号土坑土器内土層断面（北東から）

8．1036号土坑調査風景

図版8　西原大塚遺跡第243地点

1．1036号土坑完掘（東から）

2．1037号土坑完掘（北西から）

3．1038号土坑完掘（南西から）

4．1039号土坑完掘（南から）

5．1040号土坑完掘（北東から）

6．1041号土坑完掘（南から）

7．33号ピット完掘（南西から）

8．34～36号ピット完掘（南東から）

1．671号住居跡全景（南東から）

2．671号住居跡全景（南西から）

3．671号住居跡炉（北東から）

4．671号住居跡掘り方（南西から）

5．671号住居跡土層断面（北西から）

6．671号住居跡P1柱痕跡完掘（北西から）

7．671号住居跡P1柱痕跡土層断面（北西から）

8．671号住居跡P1掘り方（東から）

1．671号住居跡P1掘り方土層断面（北西から）

2．671号住居跡P2柱痕跡完掘（北西から）

3．671号住居跡P2柱痕跡土層断面（北西から）

4．671号住居跡P2掘り方（南から）

5．671号住居跡P2掘り方土層断面（北西から）

6．671号住居跡P3完掘（南から）

7．671号住居跡P4完掘（北西から）

8．671号住居跡焼土・炭化材検出状況（北西から）

1．25号方形周溝墓完掘（北西から）

2．25号方形周溝墓北西溝（北東から）

3．25号方形周溝墓土層断面S北（北東から）

4．25号方形周溝墓土層断面P（北東から）

5．25号方形周溝墓土層断面O（南東から）

6．25号方形周溝墓遺物出土状況（北西から）

7．37号方形周溝墓調査風景

図版12　西原大塚遺跡第243地点

1．37号方形周溝墓全景（上が北西）

2．37号方形周溝墓全景（北西から）

3．37号方形周溝墓全景（北東から）

4．37号方形周溝墓全景（南東から）

5．37号方形周溝墓全景（南西から）

1．37号方形周溝墓北西溝（北東から）

2．37号方形周溝墓北東溝（南東から）

3．37号方形周溝墓南東溝（南西から）

4．37号方形周溝墓南西溝（南東から）

5．37号方形周溝墓土層断面Ｂ北（北東から）

6．37号方形周溝墓土層断面Ｄ（東から）

7．37号方形周溝墓土層断面Ａ北（南東から）

8．37号方形周溝墓土層断面Ｅ（北から）

図版14　西原大塚遺跡第243地点

1．37号方形周溝墓土層断面B南（東から）

2．37号方形周溝墓土層断面C（南西から）

3．37号方形周溝墓土層断面F（南東から）

4．37号方形周溝墓土層断面A南（南東から）

5．37号方形周溝墓土層断面G（北から）

6．37号方形周溝墓遺物出土状況（北東から）

7．37号方形周溝墓遺物出土状況（北西から）

8．37号方形周溝墓遺物出土状況（北東から）

1．38号方形周溝墓全景（上が北西）

2．38号方形周溝墓全景（北西から）

3．38号方形周溝墓全景（北東から）

4．38号方形周溝墓全景（南から）

5．38号方形周溝墓土層断面A北（北東から）

図版16　西原大塚遺跡第243地点

1．38号方形周溝墓土層断面B（南西から）

2．38号方形周溝墓土層断面C（南西から）

3．38号方形周溝墓土層断面A南（北東から）

4．38号方形周溝墓土層断面D（北東から）

5．1004号土坑完掘（南東から）

6．1号ピット完掘（南東から）

7．2号ピット完掘（北から）

8．3・4号ピット完掘（南西から）

1．5・6・12～14号ピット完掘（北から）

2．7号ピット完掘（南東から）

3．8号ピット完掘（南東から）

4．9号ピット完掘（南東から）

5．10号ピット完掘（南東から）

6．11号ピット完掘（南東から）

7．15号ピット完掘（南から）

8．16～20号ピット完掘（北から）

図版18　西原大塚遺跡第243地点

1．21・22号ピット完掘（北東から）

2．23・24・26・27号ピット完掘（北西から）

3．25号ピット完掘（南西から）

4．28号ピット完掘（南東から）

5．29号ピット完掘（北西から）

6．30号ピット土層断面（北から）

7．31号ピット土層断面（北から）

8．32号ピット完掘（北西から）

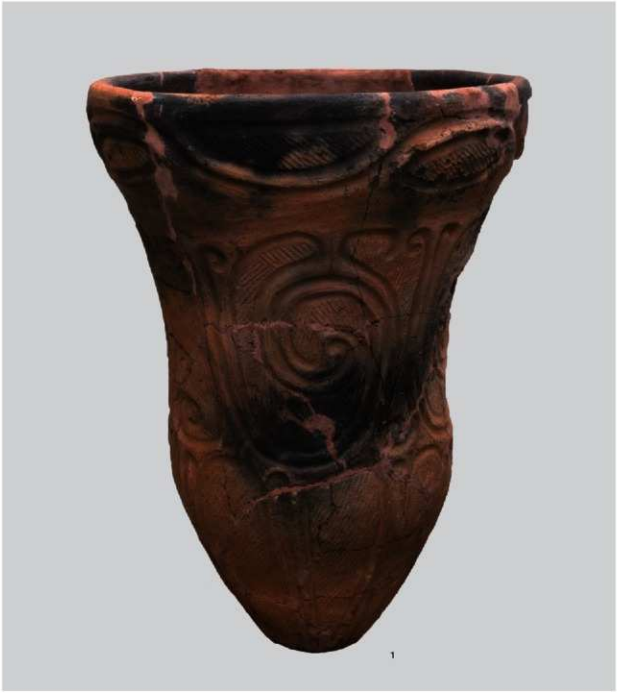
1．1001号土坑出土遺物

2．1005号土坑出土遺物

3．1006号土坑出土遺物

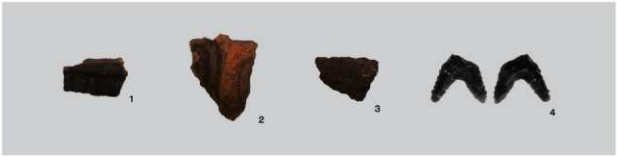
4．1008号土坑出土遺物

1．1010号土坑出土遺物



2．1011号土坑出土遺物

1．1012号土坑出土遺物

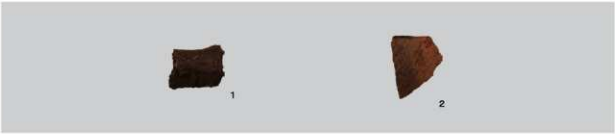


2．1016号土坑出土遺物

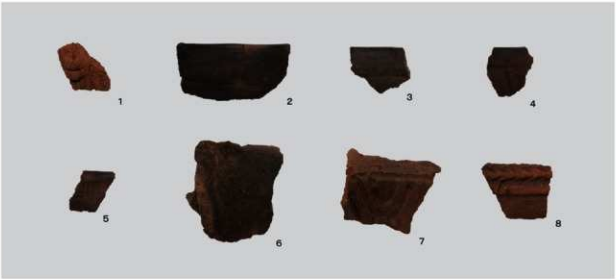
3．1017号土坑出土遺物

4．1020号土坑出土遺物

5．1021号土坑出土遺物



1．1022号土坑出土遺物



2．1023号土坑出土遺物

3．1024号土坑出土遺物

4．1027号土坑出土遺物

5．1029号土坑出土遺物

6．1031号土坑出土遺物

1．1034号土坑出土遺物

2．1036号土坑出土遺物

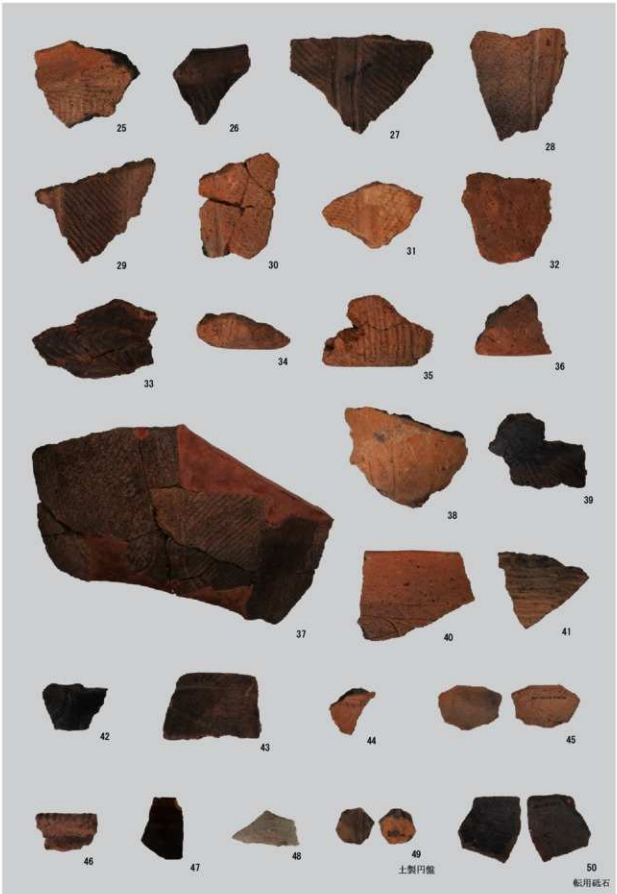
1．671号住居跡出土遺物

2．25号方形周溝墓出土遺物

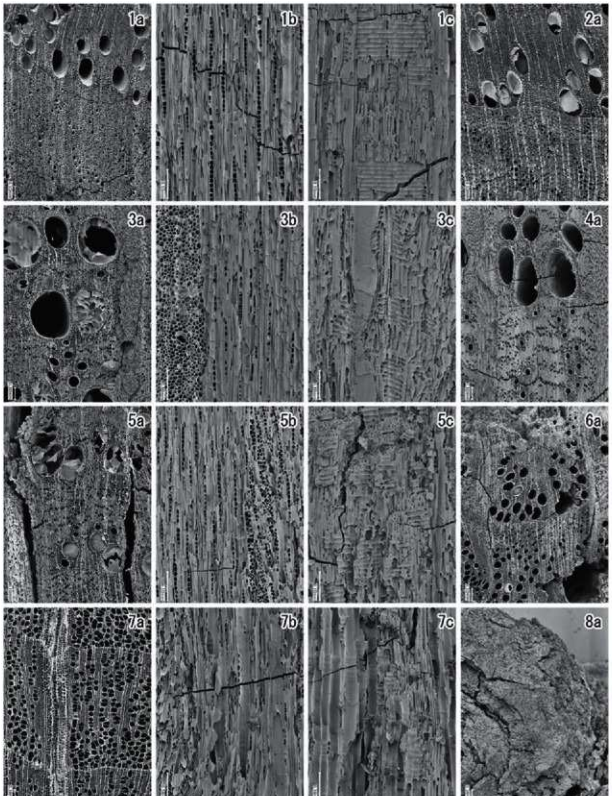
3．37号方形周溝墓出土遺物

4．38号方形周溝墓出土遺物

遺構外出土遺物 1


25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
土製円盤
50
転用砥石

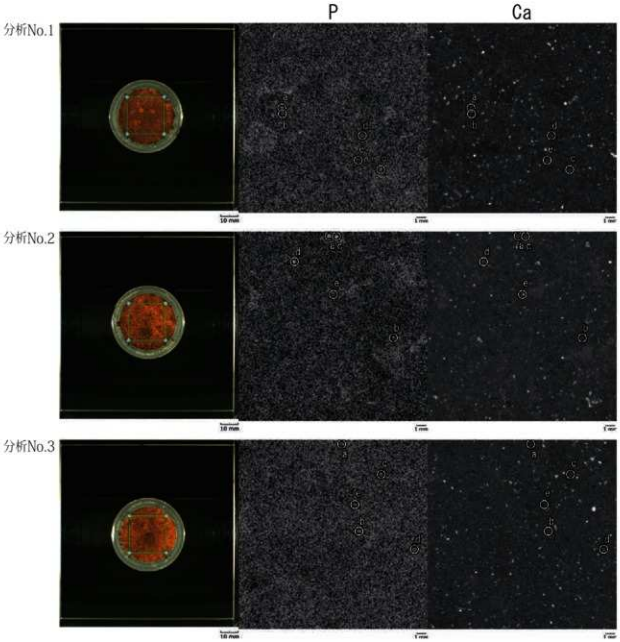
遺構外出土遺物２



炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a－1c．クリ（No.10）、2a．クリ（No.28）、3a－3c．コナラ属クヌギ節（No.1）、4a．コナラ属クヌギ節（No.65）、5a－5c．コナラ属コナラ節（No.14）、6a．コナラ属コナラ節（No.33）、7a－7c．ハンノキ属ハンノキ亜属（No.7）、8a．不明（No.39）

a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



プレス試料およびリン（P）とカルシウム（Ca）の元素マッピング図

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしはらおおつかいせきだい243ちてん　まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	西原大塚遺跡第243地点　埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	志木市の文化財
シリーズ番号	第100集
編著者名	大久保聡　尾形則敏　木村結香　越村 篤　小林陽子　黒沼保子　伊藤 茂　佐藤正教　廣田正史 山形秀樹　Zaur Lomtatidze　竹原弘展
編集機関	埼玉県志木市教育委員会
所　在　地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号　TEL 048（473）1111
発行年月日	令和６（2024）年８月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡（全体面積）	調査原因
西原大塚遺跡（にしはらおおつかいせき）（第243地点）	志木市幸町（しきしさいわいちょう）３丁目7271番の一部	11228	09-007	35°49′28″	139°33′54″	20230530～20230802	601.97（816.97）	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西原大塚遺跡（第243地点）	集落跡・墓跡	縄文時代 弥生時代後期～古墳時代前期 中世以降	土坑　40基 ピット　2本 住居跡　1軒 方形周溝墓　3基 土坑　1基 溝跡　1本 ピット　34本	土器・土製品・石器 なし 土器 土器 なし なし なし	３基の土坑（1005・1011・1036D）で加曽利EⅢ式の深鉢形縄文土器が埋設された状態で出土。 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（671Y）から炭化材を検出。 隣接する区画整理第70地点で確認されていた方形周溝墓（25方）の北東溝を検出し全容が判明。 25方の北東側で同様な軸線をもつ２基の方形周溝墓（37・38方）が検出され、調査区周辺に方形周溝墓群が形成されていることを確認。

要　約

西原大塚遺跡は、旧石器時代から中・近世にかけての複合遺跡である。今回は遺跡の中央に位置する第243地点の調査成果を収録している。

今回の調査で確認された主要な遺構は、縄文時代の土坑40基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡１軒、方形周溝墓３基である。

周辺遺跡の調査結果から、本調査地点は縄文時代中期においては環状集落に囲まれた広場の一角に位置すると想定されていたが、約600㎡の調査でも居住関連の遺構は確認されず、埋設土器を伴うものなど主に土坑群の分布域であることが判明した。

弥生時代後期～古墳時代前期においても、住居跡は１軒のみの検出である。一方、３基の方形周溝墓が集中して検出されたことから、本調査地点では通時的に居住空間とは区別された土地利用がなされていたことがわかった。

志木市の文化財　第100集

西原大塚遺跡第243地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発　　行　埼玉県志木市教育委員会
　　埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発 行 日　令和６（2024）年８月30日
印　　刷　有限会社平電子印刷所